

JOURNAL OF MONGOLIAN STUDIES

モンゴル研究

No. 25

論 文

ウランバートルの今を生きるシャーマンたち（上）

—活動形態の変化と潜在的可能性について—

藤井 麻世

Emergence of Cross-National Social Surveys in Mongolia:

What Have They Revealed?

MINATO Kunio

ゴビ山岳部における牧地植生の旱魃による変化について

三 秋 尚

追 悼

磯野富士子先生を偲んで

芝 山 豊

資 料

インタビュー：磯野富士子先生と『オルドス口碑集』

芝 山 豊

モンゴル語音楽用語小辞典

青 木 隆 紘

モンゴル研究会

大 阪

2008

目次

『モンゴル研究』第25号 2008年

《論文》

ウランバートルの今を生きるシャーマンたち（上）

ー活動形態の変化と潜在的可能性についてー……………藤井麻世… 2

Emergence of Cross-National Social Surveys in Mongolia:

What Have They Revealed? …………… MINATO Kunio … 13

ゴビ山岳部における牧地植生の早魃による変化について……………三秋尚… 31

《追悼》

磯野富士子先生を偲んで……………芝山豊… 43

《資料》

インタビュー：磯野富士子先生と『オルドス口碑集』……………芝山豊… 46

モンゴル語音楽用語小辞典……………青木隆紘… 54

《活動報告》…………… 75

《賛助会員募集について》…………… 76

《投稿規程・執筆要領》…………… 77

《論 文》

ウランバートルの今を生きるシャーマンたち(上)

ー活動形態の変化と潜在的可能性についてー

藤 井 麻 世

はじめに

1. テーマ選択の動機

筆者は特定の宗教を信仰していないが、自然そのものを神として敬意を払う、自然信仰の考え方に非常に共感している。以前、モンゴルについてのドキュメンタリー番組を見た際、自然信仰が当たり前の習慣として生活に溶け込んでいることに興味を持った。同時に自然信仰と関わりが深い「シャーマン」という存在に対しても、興味や一種の憧れを抱くようになった。

モンゴルのシャーマンについては、民族学的な立場から多くの研究がなされている。しかし、当初筆者が日本で入手した文献や資料は、古い時代のシャーマンか、地方で活動するシャーマンの衣装や世界観について書かれたものばかりであった。そのため、シャーマンは社会主義時代に弾圧され、現在では地方に少人数しかいないと認識していた。

だが、2003年に初めてモンゴルへ旅行した際、ウランバートルでシャーマンが増えていることを知る。自然と関係が深いはずのシャーマンがなぜ都市部に増えているのか、どのような人々に必要とされ、活動しているのか、といった疑問が沸き、彼らの実態と社会的な背景を知りたいと思った。

シャーマンに行ったインタビュー調査や、一般の人と話をする中で、シャーマンに対するモンゴル人の印象は良くないと感じた。シャーマンは呪いをかける恐ろしい人々、あるいは詐欺師のよう

なものだと考える人も多い。実際に調査するまでは、筆者もウランバートルのシャーマンを疑いの目で見ていた。自然の多い田舎で、昔ながらの活動をしているのが本物のシャーマンであるため、都会のシャーマンは偽者ではないかという気持ちがあったからだ。お酒で身を持ち崩してしまったシャーマン、代金を不当に請求するシャーマンと出会ったこともある。

だが調査を進めていくにつれて、活動場所が都市部であっても、自然祭祀儀礼を行う時には地方へ行くなど、核の部分は変化していないことがわかった。また筆者が調査を行った大抵のシャーマンは、ごく普通の親切な人たちであり、彼らを頼り、救われたと感じる相談者も確かに存在している。シャーマンの実態を出来るだけ詳しく紹介し、シャーマンの悪いイメージを覆したい、シャーマンの面白さを知ってもらいたいという気持ちだが、このテーマを選択した動機である。

2. 本論文の目的

(1) 社会の変化等の影響により、シャーマンの活動形態がどのように変化したかを分析すること。また、シャーマンの役割について分析すること。

(2) グラウンデッド・セオリー法¹⁾により「シャーマンは、自然や故郷とのつながりといったものと切り離され、満たされない思いを抱える人々を癒す可能性がある。」

という仮説理論を提示すること。

3. 調査の方法

(1) 聞き取り調査

筆者は2005年5月4日から2005年12月4日までの間、モンゴル国ウランバートル市に留学していた。2005年8月12日から24日にかけてフブスグル県へ行き、ツァータンのシャーマン3人と、ダルハドのシャーマン1人に聞き取り調査を行った。

またウランバートルにあるシャーマンのセンターを訪れ、3人のシャーマンに聞き取り調査を行った。11月にはブリヤートのシャーマン、ガルバドラフ・ザイランと知り合い、帰国後の2005年12月4日以降もEメールと電話で連絡を取り続ける。

そして、2006年7月26日～2006年9月28日の期間、筆者は再びモンゴルを訪れた。この間、ガルバドラフ・ザイランと行動を共にし、彼に対するインタビューや、新しいシャーマンのための儀式に参加する、定例の儀式に参加し相談者から聞き取り調査を行う、といったフィールドワークを行った。また彼と共に5か所のシャーマンのセンターを訪れ、5人のシャーマンに聞き取り調査を行った。

これらの調査結果をまとめ、資料1～5を作成した。資料1では筆者が出会ったシャーマンの衣装や道具についてまとめた。資料2はガルバドラフ・ザイランのライフヒストリーである。資料3はガルバドラフ・ザイランを訪れる相談者について、資料4ではウランバートルでセンターに所属し活動するシャーマンについて、そして資料5では、ガルバドラフ・ザイランたちが行った儀式の様子についてそれぞれまとめた。

(2) 文献調査

モンゴル語文献は、ウランバートル市内の書店、古本市で購入したほか、東京外国語大学所属の渡辺隼人さんが所蔵する文献をコピーさせて頂いた。日本語文献は、大阪外国語大学図書館、和

歌山市民図書館など国内の図書館から入手した。

4. 本論文の展開について

第1章では、シャーマンの定義、そして先行研究や調査をもとにモンゴルのシャーマンの概要を記述する。第2章では、シャーマンと相談者の社会的背景である、ウランバートルの現状や問題点について述べる。そして第3章では調査結果をもとに、ガルバドラフ・ザイラン、彼を訪れる相談者、ウランバートルで組織に所属し活動するシャーマンたちの分析を行う。第4章では、第3章の分析を踏まえ、シャーマンの活動形態の変化と役割についてまとめる。また、筆者の体験から上述の仮説理論を提示するという展開である。

Ⅰ シャーマン、シャーマニズム概要

1. シャーマン、シャーマニズムとは何か

(1) 本論文におけるシャーマンの定義と基本用語の説明

シャーマンの定義については論争がある。その論争について、桜井徳太郎氏の論文「シャーマニズム研究の諸問題－トランスと入巫のパターン－」²⁾ pp.17-24の内容をまとめると、次のようになる。

まず、トランス状態に入った後、自らの意識によって神霊と交渉する「脱魂」を行う者がシャーマンであるという説がある。そしてもう一つ、神霊を自らの体に憑依させる「憑霊」を行う者がシャーマンであるという説がある。だが近年では、トランス状態を自らのコントロール下に置くことができるという点が重要であり、脱魂型、憑霊型のどちらもシャーマンであるという考え方も優勢になってきている。

古い時代のモンゴル、シベリアのシャーマンについての記述を読むと、脱魂型であるということが目につく。だが、筆者が調査したシャーマンた

ちは、ほとんどが憑霊型であった。本論文では、脱魂型と憑霊型のどちらもシャーマンであるという考えに従い、シャーマンを「意図的に自らをトランス状態に導くことができ、それによって神霊と関係をもって儀礼を行う、あるいは人の相談に乗るといった活動を行う宗教的職能者」と定義する。シャーマニズムとは、シャーマンを中心とした宗教的形態のことである。モンゴルでは男性シャーマンをザイラン、女性シャーマンをオッドガンと呼ぶ。性別が限定されることはない。

もう一つ、モンゴルのシャーマニズムを論ずる上で、オンゴッドという重要な言葉がある。これは精霊という意味だが、この言葉の中には先祖のシャーマンのオンゴッド、動物のオンゴッドなど、さまざまな霊的存在が含まれている。共通するのは、シャーマンを守護し助ける者であることだ。

また、モンゴルでは、自然神が山、土地、川、湖、火、木などに宿ると考えられている。そして彼らは様々な姿で捉えられている。例えば、ヨーラー・オッドガン³⁾は、フブスグル湖には蛇、熊などの動物の姿をした神が宿っていると説明した。一方ガルバドラフ・ザイランによると、土地神や水神などの自然神は人間の姿をしている。だが、場所によっては動物の姿をした神が宿することもあるそうだ。

オンゴッドは基本的にシャーマンよりも上の存在である。だが、水や土地、山などに宿る自然神は、オンゴッドよりも更に上の存在である。

(2) 「巫病」について

シャーマンになる前によく見られる「巫病」と呼ばれる症状がある。これは、シャーマンになるべき人が、それに気が付いていないとき、もしくは拒んでいる時に現れる。

ガルバドラフ・ザイランによると、モンゴルの場合よくみられるのが意識を失う、ひきつけを起こすなどの症状である。他にも凶暴になる、夢遊

病のようになって歩き回るなど、様々なケースがある。また、生活や仕事が上手く行かなくなるということもあげられる⁴⁾。シャーマンのもとを訪れ、自分がシャーマンにならなければいけないということを知り、その運命を受け入れてからは症状が治まる。その後、同じ民族のシャーマンに師事し、太鼓の叩き方や歌を学ぶのが一般的だ。

2. モンゴル国のシャーマン、シャーマニズムについて

(1) シャーマニズムの歴史概要

Ч.Далай(1959),"Монголын бөөгийн мөргөлийн товч түүх",pp.18-29の内容を参考に、16世紀までのモンゴル国におけるシャーマニズムの歴史を簡単にまとめると、以下のようになる。

シャーマニズムの歴史は古い。古代から、モンゴル周辺の遊牧民族の間でシャーマニズムが信仰されていた。匈奴の時代にも、シャーマンが数多く存在し、他の部族と戦闘を行う際に参謀として活躍していた。鮮卑族、ウイグル族や、満州族も古くからシャーマンを信仰していた。8、9世紀までシャーマンはどの民族にも存在し、部族の指導者となる場合もあった。

モンゴルにいたほとんどの民族は、12世紀までシャーマニズムを信仰していたと思われる。だが、この期間に関してはあまり資料がない。

1206年、チンギス・ハーンがモンゴル国を統一し、シャーマニズムが国教になった。シャーマニズムの形が整ったのも、この時期である。シャーマンは隆盛を極め、王や貴族の政策にまで影響を及ぼした。13世紀初頭まで、他の宗教はほとんど広まっていなかった。

1268年、フビライ・ハーンが元を建国した。首都が現在の北京に移り、赤帽派のチベット仏教が国教になった。そのため大規模な自然信仰儀礼をラマ僧が行うこともあった。そして、シャーマンの政治的な影響力は随分減った。だが、一般的

な自然祭祀儀礼はシャーマンが行っており、葬儀もシャーマニズムの形式で行われていたため、民衆の間では変わらず信仰されていた。そして、首都がモンゴルへ戻り、赤帽派のチベット仏教が影響力を失った時、再びシャーマニズムが復興した。1368年から1576年までの間、シャーマニズムはモンゴルの主要な宗教であった。

ところが、16世紀の清朝時代になると、黄帽派のチベット仏教が主な宗教となり、シャーマンとラマ僧の間には激しい争いが起こった。赤帽派と違い、黄帽派のチベット仏教は王や貴族に保護され多くの寺が建てられたため、民衆の間にも広まっていった。そして、シャーマニズムは衰退していった。

社会主義時代になると、1924年成立の革命政府が反宗教政策を実施する。ラマ僧もシャーマンも弾圧の対象になった。社会主義時代に、巫病の症状が現れた人からお話を伺ったが、やはりシャーマンであることを公には出来なかったそうだ。師匠のシャーマンが逮捕されたまま帰ってこなかったという証言もある⁵⁾。インタビューでお話を伺ったシャーマンの中にも、社会主義時代には秘密裏に家で儀式を行っていたというシャーマンがいた。また多くのシャーマンが粛清されたことは、完全な形のシャーマニズムの伝統継承に影響を与えた。

1990年に民主化が起こり、1992年2月の新憲法では信教の自由が保障されたため、シャーマニズムやチベット仏教が復活した。現在、ウランバートルで活動するシャーマンが増加している。

(2) 主な民族

ゴロムトセンター⁶⁾の代表であり、シャーマンの研究家であるスフバット氏によると、現在モンゴル国で活躍するシャーマンは、ダルハド、ハルハ、ブリヤート、ツァータン(トゥヴァ)、オリヤンハイが主な民族であるそうだ。ただ、中には民族というカテゴリーでくくってよいのか判別が

難しい場合もある。

モンゴルで一番多い民族は、ハルハである。スフバット氏によると、16世紀に最も目立つハルハのシャーマンが徹底的に弾圧された。そのためハルハのシャーマンに関しては資料が少なく、研究が進んでいないそうである。

現在、一般的にシャーマンが多いとされているのが、モンゴル国の北西部に位置するフブスグル県である。ロシアとの国境近くのタイガ地帯にトナカイを飼って暮らすツァータン(トゥヴァ)、ダルハド、オリヤンハイのシャーマンが有名だ。この地域は土地の力が強いいため、シャーマンが弾圧された時代でも、貴族たちがシャーマンを保護したのだという話を、留学時に通っていた学校の先生から聞いた。この話の真偽は不明だが、2005年の夏フブスグル県を旅行した時に、自然環境の厳しさを実感した。自然と折り合いをつけていかなくてはならない環境のため、自然信仰やシャーマニズムが他の地域に比べ、根強く信仰されているのではないかと思う。またこれはブリヤートにも言えることだが、首都から遠く離れた地方で活動していたため、古い時代のシャーマン弾圧政策や、社会主義時代の反宗教政策が行き届かなかったのではないだろうか。

ブリヤートは、もともとロシアのバイカル湖周辺に暮らしていた民族である。シャーマニズムに、ラマ教(チベット仏教)が融合しているという特徴がある。ロシアなど、外国でも多くの研究がなされている。

大体このように分けられるが、互いの特徴が交じり合っている場合もある。複数の異なる民族のシャーマンに弟子入りするという例、ブリヤートのシャーマンに師事したハルハのシャーマンが、数珠を身につけているなどの例があった。これは社会主義時代にシャーマンの数が減ったため、それぞれの正確な伝統の継承が難しくなったこと、現在さまざまな民族のシャーマンがウランバートル

ルに存在し、交流が進んでいることが原因だと思われる。

(3) 衣装や道具が持つ意味

シャーマンが身につける物や道具は、悪い影響から身を守る鎧であり、霊的存在と交渉するための道具であり、それ自体が信仰の対象である。身につけていないときは、サヒオスと呼ばれるお守りになる。

筆者が調査したシャーマンの衣装や帽子などについて、資料1にまとめた。また、スフバット氏の著書「Монгол нүүдэлчин ардын шашин шүтлэгийн зан үйл」のpp.141～182に、シャーマンの衣装や道具が図や写真入りで詳しく紹介されている。

(4) 自然祭祀儀礼と儀式

自然神を讃える代表的な儀礼には、オボー、山、土地の神に対して行うものが挙げられる。また、火、湖、川、シャーマンの木と呼ばれる神木に対してなど、様々な場所で様々な儀礼が行われる。これらの自然祭祀儀礼をタヒルガと呼ぶ。雨乞いの儀礼を行うこともある。また、旧正月の儀礼や、季節的な儀礼を行うシャーマンもいる。

ブリヤートのシャーマンは、チャナル⁷⁾という儀式を行う。これは、シャーマンの位をあげ、より強い力を得るための儀式である。1年に1度、合計13回、13年にわたって行われる。時期は、カウが鳴き始める5月22日以降だ。

また、ブリヤートのシャーマンにはユスンテイ／ユスニウドゥルと呼ばれる儀式を行う者がいる。これは、旧暦で9のつく日、つまり9日、19日、29日に先祖のシャーマンのオンゴッドと交流する儀式である。

(5) オンゴッドや自然神との関わり方について

オンゴッドや、自然神との関わり方は、民族やシャーマン個人によって異なる。ただ、筆者が出会ったシャーマンの例からいうと、ブリヤートの

シャーマンは先祖のシャーマンのオンゴッドと関係が深い。土地神や水の神といった自然神とも、オンゴッドを通じて関わりをもつ。一方、ハルハのビャンバドルジ・ザイランのように、祖先のオンゴッドとはあまり関係を持たず直接自然神と関わるシャーマンもいる。

(6) 通訳者

シャーマンがトランス状態になると、方言で話したすことや、舌がもつれて言葉が聞き取れなくなることがある。そのため必ず通訳が必要だ。通訳者は、弟子のシャーマンの場合もあれば、家族の場合もある。相談者に対しどのようなオンゴッドが来て、何を話したのかを伝える重要な役割を持つ。

II ウランバートルの現状

1. ウランバートルでは何が起きているのか？

(1) 社会システムの変化

モンゴル国では、1990年以降に社会主義体制から議会制民主主義・市場経済化への体制移行が進み、1992年には新憲法が制定された。しかし、これらの急激な変化が社会と経済の混乱を招き、貧困問題など多くの社会問題を引き起こした⁸⁾。

その一方、信教の自由、出版、思想の自由が認められるようになった。日本を含む西側諸国との経済面での連携が強まり、観光やビジネスなどを目的とした外国人の出入りも増えた。

(2) 都市化が引き起こした問題と情報化

『大辞林』によると、都市化とは「産業化の進展、高速交通網の発達、情報化などに伴う人口の都市への集中、都市的生活様式の形成とその農村部への浸透過程をいう語」である。

モンゴル国の場合には農村ではないが、近年学校に行くため、病院で治療を受けるため、遊牧に見切りをつけ都会で仕事に就くため、といった理由

で地方からウランバートルに移住する人が増えている。

モンゴル国統計局⁹⁾によると、2002年のモンゴル国人口は約247万人で、ウランバートルの人口は約84万人である。ところが、2005年には人口が約256万人に対し、ウランバートルの人口は約96万人になっている。つまり、2002年には全体の34.1%だった首都の人口比率は年を追うごとに上昇し、2005年には37.6%になっているのだ。首都近郊ではゲル地区が急速に広がっている。道路、水道、電気などのインフラが整っていない所もある。またゴミ問題、大気汚染、貧困問題などさまざまな問題が起こっている。

一方、情報化も進んでいる。ここで述べる情報化とは、インターネット、TV、出版物、携帯電話などの通信手段が普及し、それによって情報伝達の高速化、広域化が起こることである。モンゴル国では地方都市にもインターネットの敷設が進み、ウランバートルには数多くのインターネットカフェがある。携帯電話も普及しているし、さまざまな種類の広告、新聞、書籍が出版されている。

(3) 貧困問題と失業問題

1991年、モンゴルに市場経済が導入された。その急速な導入による負の影響として、貧困問題や失業問題が起こり、現在に至るまで解決されていない。

2006年8月26日、27日に日本福祉大学、モンゴル国教育大学、大阪外国語大学がチームを組んで、貧困世帯の調査(以下B調査とする)が行われた。8月25日に調査地区の見学を行った後、筆者もB調査に参加させていただいた。そしてモンゴル国教育大学の先生、調査地区の住人の方と共に障害者の方がいる8つの家庭を訪れ、聞き取り調査を行った。そこで、貧困の深刻な実態を肌身で感じた。電気が欲しい、道が整っていない、仕事がないことが一番の問題であり、住民会議の議題にもよく出る、子どもの学費が払えない、治

療費が払えない、食費を削っているなどの証言を多くの人から聞いた。ゴミの山で暮らす人とも会った。

貧困とされる家庭が全て悲痛な状態なのではなく、前向きに、たくましく暮らしている人もいる。だが、病人や学校へ通う年齢の子どもが数人いる場合、生活は非常に厳しくなるようだ。やはり貧困は大きな社会問題である。市内や市場にはストリートチルドレンもよく見られる。

貧困から抜け出るために働こうと思っても、ある程度の収入の仕事に就くためには、年齢や、専門の壁がある。そのため、なかなか仕事が見つからない。近年では韓国、アメリカ、日本など外国への出稼ぎが増えている。

(4) 医療問題

留学している頃から、モンゴルの医療は大きな問題があるのではないかと感じていた。今回B調査で聞き取りをした障害者の女性は「高額の注射や薬を自分で外から買ってこなければならぬ¹⁰⁾。」と証言した。また、モンゴルで日本語教師をしている友人が、軽い腹痛を盲腸と誤診され、手術されそうになった話を聞いたこともある。

そこでさらに詳しいモンゴルの医療事情について情報を得るため、理学療法士の道久恵氏にお話を伺った。彼女は、2005年6月から2006年6月まで、モンゴル国立障害者リハビリテーションセンター(以下：リハセンターとする)で、リハビリテーションの技術を伝えるボランティア活動を行ってきた。2007年3月からは青年海外協力隊員として、2年間リハセンターへ派遣されることが決まっている。

道久氏は2006年8月26日に、1年間行ったボランティア活動の結果とモンゴルの医療事情について、国際医療協力セミナーばちばちの会で報告を行った。この節では彼女が口頭で行った報告の原稿を引用し、ウランバートルの医療事情と問題

点についてまとめる。下記枠内が、道久氏の報告である。

問題① 医療設備の不足

ウランバートル市には、国立の病院機関としては、リハセンター内の病院部門以外にも、第一病院、第二病院、旧外傷病院、新外傷病院、小児病院、軍人病院などがあります。そのほか、外国資本の私立病院も増えてきています。しかし、私立病院は診療費が高いため、一般の人などは入院ができないことが多いです。レントゲンや検査はコストがかかるといった理由から、整形外科の手術後もレントゲン撮影が行われません。

問題② 医者と医療技術の水準が低い

患者中心医療やチーム医療といった考えはまったくない。そのため、医師の指示ミス、診断ミス、手術ミスも見過ごされている。インフォームドコンセントが行われておらず、患者自身も、自分が何の疾患で、どういった治療を受けているのか、どんな手術が行われ、結果・経過はどうであるなどの情報をまったく知りません。

レントゲン診断ができない。左右をまちがえるならまだしも、上下を間違えて見る医師もいます。外国から新しく手術方法が紹介されれば、見よう見まねで手術がなされる。もちろん失敗しても患者に告げられることはありません。モンゴルで特に多い、切断手術についても、時間の短縮だけが重要視されており、断端の骨の形成や筋の縫合などは行われません。また、脊髄腔内への空気の注入。これは第二次世界大戦中、戦場で薬剤がまったく無くなったときにプラセボ効果を狙って行われていたそうですが、これが実際に病院で治療の一環として行われています。

問題③ 医療従事者の給料が低い

特に国立（外科医など手術を行う医師や私立は多少マシ）。国立リハセンターの医師で一ヶ月の給料は60ドル程度です。一般企業では100から150ドル程度です。給与が低いため、海外で学んだレベルの高い医師はモンゴル国内に残らず、海外に定住してしまうか、通訳など違う職種を選んでしまう。通訳であれば、一日30ドル程度の給与がもらえるところもあるそうです。医師という仕事は好きだけれど、食べて行けないと、仕方なく違う職業を選ぶ医師もたくさんいます。

リハセンターで、道久氏は多くの患者と関わってきた。その患者というのは、よその病院で不完全な処置をされた末に来る方が大半だったそう。彼らの証言や他病院との交流活動によって、以上のような実態が分かったそうである。

私立で比較的設備の整った病院もあるが、治療費が高い。モンゴルでは、医療施設の不足、医者と医療技術の水準の低さが大きな問題だ。だが、根底にあるのは、問題③であると道久さんは指摘する。給料が低く待遇が悪いため、意欲のある良い医者が育たない。そのため問題②が悪化するという悪循環に陥っているようだ。

このような病院事情、あるいはお金がないという理由から、病気のときは、寺を訪れてお経を唱えてもらう、あるいは民間療法に頼るという人もいる。B調査を行った際にも、民間療法のマッサージ師に頼るというケースがあった。シャーマンを訪れる相談者も、病気の相談が非常に多い。背景には、このような医療事情があることを押さえておきたい。

(5) 宗教事情

現在のモンゴルで、大多数の人が信仰している宗教は、やはりチベット仏教である。社会主義時

代が終わり信教の自由が認められて以来、各地で寺が復興を遂げた。実際にガンダン寺やダシチョイリン・ヒードなどの寺を訪れると、老若男女を問わず多くの人が参拝に訪れている。

友人のモンゴル人女性(19歳)に聞くと、試験の前などにお経を唱えてもらうことがあるそうだ。特に珍しいことではない、と話していた。病気の時、心配事を抱えている時に、お経を唱えてもらうと良くなると信じる人もいる。また、占星術を専門とするラマ僧も存在し、寺の内部に占いの相談のスペースを設けてあるのを見た。友人の牧民男性(26歳)は、ラマ僧に結婚の時期や、相性を占ってもらったことがあるそうだ。薬草の知識を持ったラマ僧がいて、薬を処方することもある。

その他の宗教については、韓国系のキリスト教が広まってきているようだ。筆者が留学中に通っていた学校にも、韓国人のキリスト教牧師が数人いた。布教とともに鍼などの技術を無料で教える活動をしているそうだ。B調査を行った地域の一画にも、教会があった。

また、2006年8月下旬に、UBパレスという大きなコンサート会場で、英語を話す白人男性の牧師による講演会が開催された。7月28日に筆者がモンゴルへ着いた時は、街中にポスターが貼られ、空港でもチラシを配布するなど、宣伝にかなり力を入れている様子であった。講演会の中継をテレビで見たが、広い会場いっぱいに入りが入り、キリストの奇跡によって車椅子の人が歩き出すという様子が劇的に放送されていた。どの流派のキリスト教団体なのか、資金源、モンゴルへ布

教にきた目的などは不明である。

ラマ僧やキリスト教の牧師に比べ、シャーマンはまだまだ一般的でない。TVで自然祭祀儀礼を行っているシャーマンの様子や、シャーマン風ダンスの様子が放映され、シャーマンに関する本が出版されるなど、以前よりは理解が進んできているようだがそれも一部での話だ。

B調査で訪れた8家庭と、その地域で暮らす人々数名に対し、信仰する宗教について質問をした。だが、シャーマンを訪れたことのある人は0人であり、シャーマンを訪れようと思うかという質問に対して、はいと答えた人もいなかった。その理由は主に、シャーマンは恐ろしいから、シャーマンに知り合いはいないし、胡散臭い気がするから、チベット仏教を信仰しているから、宗教を信じていないから、などであった。

また、ホームステイ先の家族、友人や、知り合いになった人たちにシャーマンの印象を尋ねると、たいていの人は良い印象を持っていなかった。呪いをかけられるかもしれない、というのである。ホームステイ先の21歳の女性は、筆者がシャーマンを調査しようとしていることを知ると、「シャーマンにうかつに関わっちゃだめよ。悪いシャーマンだと呪いをかけられるかもしれない。怖いわ。」と言った。筆者と同年代の彼女が、だまされることなく、呪いをかけられることを心配したのが意外だった。

では、実際のシャーマンはどのような人たちなのか。調査結果を第3章で述べる。

資料1 シャーマンの衣装、道具、 占いについて

＜衣装＞

悪い影響から身を守る鎧という意味がある。また一番下に着用する衣装の左脇の下が破れている場合がある。なぜなら、衣装の破れ目からオンゴッドが入り、シャーマンの身体に憑依すると考えられているからだ。ブリヤートのシャーマンの場合、その上にマントのようなものを身につける。更に強力な守護が必要な場合は、その上から毛皮の衣装を身につける。写真1は、ブリヤートのシャーマン、ガルパドラフ・ザイランが全ての衣装、帽子を身につけた時の写真である。

写真2は、オリヤンハイのシャーマン、バルジンナム・ザイランの自宅を訪ねた時の写真だ。複数の太鼓と衣装があった。色とりどりのリボン状

の布が衣装に付けられている。

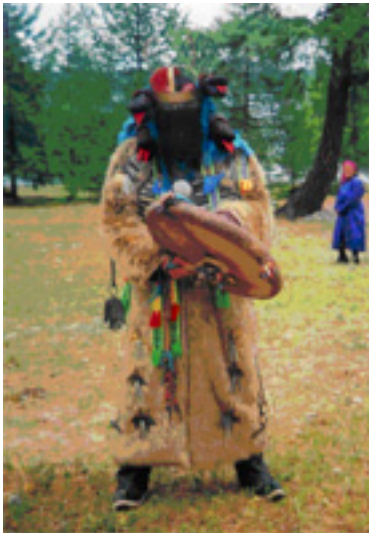
またダルハドのシャーマン、エンフバヤル・オッドガンの場合は、衣装に81体の蛇の人形が付いていた。また、背中にゼウセクと呼ばれる鉄飾りがいくつも付いていた。金属製の飾り、蛇の人形、リボン状の布はシャーマンの衣装によく見られる飾りである。

＜帽子＞

帽子にも身を守る意味がある。また、下部には目隠しがついている。これはシャーマンがトランス状態に入りやすくするためのものと思われる。デザインは、目や顔が刺繍されているものが多い。ブリヤート以外の場合は、上の部分に鳥の羽が飾られている。ブリヤートの場合は、鹿の角をかたどった金属製の帽子である。横の部分に黒い蛇の人形が4体付いている場合もある。

また、布でできた帽子は2種類あり、黒い帽子は黒い側のオンゴットを呼び出すときに、青い帽

写真1



2005年6月27日
フブスグル湖のほとりにて
撮影：ゾーニーメデー社
新聞記者トンガラク氏

写真2



2006年9月22日
オリヤンハイのシャーマン
バルジンナム・ザイラン
撮影：藤井

子は白い側のシャーマンを呼び出すときにかぶる。鹿の角をかたどった鉄製の帽子は、より強い悪影響から身を守る際に、布の帽子の上からかぶる。

<太鼓>

太鼓はシャーマンの乗り物と言われている。脱魂型のシャーマンの場合、その音色は自らの魂が霊界へ向かう時の乗り物となる。憑依型の場合、その音色に乗ってオンゴッドがやってくる。つまり太鼓はオンゴットの乗り物になるようだ。

ハルハ、ダルハド、ツァータン(トゥヴァ)、オリヤンハイなどほとんどの場合は厚みのある太鼓を使っている。だが、ブリヤートの場合は厚みのない太鼓を用いていた。ダルハドのシャーマン、エンフバヤル・オッドガンの太鼓の取っ手には老人(オンゴッド)の顔が彫られている。また、オリヤンハイのシャーマン、バルジンナム・ザイランの場合、太鼓には人の顔や木、動物などが描かれていた。太鼓の絵柄やデザインも個人差が大きい。

<鏡>

衣装以外では、最も強力なお守りである。特に新米のシャーマンは鏡を肌身離さず身につけるように指示される。鏡の曇り具合で危険を察知するシャーマンもいる。

写真3は儀式を行う直前のガルバドラフ・ザイランの姿である。自宅前で撮影した。胸元とその下に銀色と金色の鏡が2つ見られる。

<その他>

数珠、鈴、経文などブリヤートのシャーマンにはラマ教の法具が取り入れられている。オンゴッドを呼び出す歌の歌詞にも、ラマ教のマントラ(真言)があった。その他、杖、鞭もブリヤート特有の道具だ。ガンガとは草原に分布する紫色の小さな花をつける草をつみ、乾燥させたものを指す。その煙には浄化作用があると考えられ、儀式の時に焚かれる。アルツと呼ばれる香を焚く場合もある。

写真3



2005年11月10日撮影：藤井

<占い>

たいていのシャーマンは占いを行う。毎回大掛かりな儀式を行うのは大変だ。そのため儀式を行う前や、軽いアドバイスをする時に占いを行う。また口琴を弾きながらインスピレーションを得るシャーマンもいる。占いの道具には数珠、コイン、シャガイ(羊のくるぶしの骨)、トランプ、石、羊の肩甲骨など様々な種類がある。

<参考文献リスト>

日本語文献

- ・島村一平(2000)、『平原に聴く、シャーマニズムの息吹』『季刊 民族学』93号、国立民族学博物館友の会
- ・鯨岡峻(2005)、『エピソード記述入門—実践と質的研究のために』、東京大学出版会
- ・佐藤正衛(2004)、『北アジアの文化の力 天と地を結ぶ偉大な世界観のもとで』、新評論
- ・ウヴェ・フリック(2002)、『質的研究入門—人間の科学>のための方法論』、春秋社
- ・ミハーイ・ホッパール(1998)、『シャーマニズム

の世界』、青土社

- ・ピアーズ・ヴィテブスキー(1996)、『シャーマンの世界』、創元社
- ・ロジャー・ウォルシュ(1996)、『シャーマニズムの精神人類学』、春秋社
- ・井上順孝・編(1994)、『現代日本の宗教社会学』、世界思想社
- ・佐々木宏幹(1980)、『シャーマニズム～エクスタシーと憑霊の文化～』、中央公論社
- ・ウノ・ハルヴァ(1989)、『シャーマニズム アルタイ系諸民族の世界観』、三省堂
- ・桜井徳太郎・編(1978)、『シャーマニズムの世界』、春秋社
- ・M・エリアーデ(1974)、『シャーマニズム』、冬樹社
- ・ミハイロフスキー／バンザロフ著 白鳥庫吉／高橋勝之訳(1971)、『シャーマニズムの研究』、新時代社

モンゴル語文献

- ・Д.Бямбадорж(2006),"Мөнх тэнгэрийн шашин бөө мөргөл", Улаанбаатар
- ・Д.Бямбадорж(2005),"Бурхан халдун хайрхан тэнгэрийн тахилга, бөөгийн ёс", Улаанбаатар
- ・Ш.Сүхбат(2005),"Монгол нүүдэлчин ардын шашин шүтлэгийн зан үйл", Улаанбаатар
- ・Ц.Нүүбэл.Б.Төмөр(2004)."Тэнгэрийн элч", Улаанбаатар
- ・А.Оюунтуигалаг(2004),"Монгол улсийн буриадууд", Улаанбаатар
- ・Ш.Сүхбат(2003),"Бөө", Улаанбаатар
- ・С.Бадамхатан(1692),"Хөвсгөлийн цаатан ардын аж байдалийн тойм", Улаанбаатар
- ・Ч.Далай(1959),"Монголын бөөгийн мөргөлийн товч түүх", Улаанбаатар
- ・"Босоо Хөх нөмрөгийн"(2006 №1, №2)

ウェブサイト

- ・質的研究の部屋 <<http://www.geocities.co.jp/Technopolis/Mars/4688/index.html>>

- ・質的研究法講座 <<http://web.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~ysekigch/qual/qualassess.html>>
- ・平成12年度 経済協力評価報告書 <<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryō/hyouka/kunibetu/gai/h12gai/index.html>>
- ・モンゴル国統計局 <<http://www.nso.mn/>>
- ・Азийн бөөгийн "Тив дэлхийн холбоо" <<http://www.owc.org.mn/tivdelhii/golomt/index.htm>>
- ・Roaring Hooves-Mongolia <<http://www.roaringhooves.com/>>

註

- 1) 調査を行い、その調査研究から理論を発見し、理論検証のための調査を行う、という循環的なプロセスをとる研究方法。ウヴェ・フリック(2002)、『質的研究入門—人間の科学—のための方法論』、pp.52～58参照。
- 2) 桜井徳太郎・編(1978)、『シャーマニズムの世界』、春秋社 pp.2-38にこの論文が掲載されている。
- 3) ヨーラー・オッドガン(48歳)はダルハド族のシャーマンである。2005年8月17日、フブスグル県のオランオオルにある自宅で、お話を伺った。
- 4) 資料2、資料3、資料4参照。
- 5) Ш.Сүхбат(2003),"Бөө", Улаанбаатар p65 ダルハドのダルジド・オッドガンの証言。
- 6) シャーマンのセンター。多くのシャーマンが所属している。私は2005年6月にゴロムトセンターを訪れ、スフバット氏にお話を伺った。参考ウェブサイト Азийн бөөгийн "Тив дэлхийн холбоо" 参照。
- 7) 資料4参照。
- 8) 「2000年度版 ODA 評価報告書 経済協力評価報告書 第1章2. モンゴル」参照。
- 9) National Statistical Office of Mongolia の "Mongolian statistical Years book" 2003 -2006 年から引用。
- 10) 2006年8月26日 目と腎臓が悪い女性の証言。

(ふじい まよ)

<<Article>>

Emergence of Cross-National Social Surveys in Mongolia: What Have They Revealed?

MINATO Kunio

Introduction

The 2000s witnessed a blossoming of cross-national social surveys in Asia. These surveys, initially developed in Western countries, broadened their coverage to Asia. There are also surveys focusing on Asian societies from an Asian viewpoint such as “AsiaBarometer,” “Asian Barometer (East Asia Barometer),” “East Asia Value Survey,” and “East Asian Social Survey” (Minato, 2008).

The trend of cross-national social surveys has reached Mongolia. Although the country’s sparse population and underdeveloped transportation and telecommunications infrastructure might raise doubt about the possibility of quantitative surveys nationwide, there have already been projects conducting such surveys in Mongolia. These projects are developing a new and scientifically-valid approach of Mongol study, as well as cross-national comparisons that include Mongolia.

This study examines the cross-national social surveys conducted in Mongolia and their results. Considering the short history of cross-national social surveys in the country, I begin by detailing the advantages of the surveys, especially in the context of Mongol study. Next, I introduce the survey projects covering Mongolia, namely the AsiaBarometer, the Asian Barometer, the Life in Transition Survey, and the studies using data from these surveys, depending upon their availability. Lastly, I discuss the challenges and the perspectives for cross-national social surveys in Mongolia.

I Advantages of Cross-National Social Surveys in Mongolia

Studies that explore the reality of the Mongolian people and society have been gathered for a century. Some of these studies are bibliographic surveys, while others apply field research¹⁾, a method based on observation and interaction with people, family, or an organization in focus.

This paper focuses on cross-national social surveys. Since these surveys adopt unconventional methods in Mongol study, it is necessary to explain their advantages, which are summarized as follows: (i) attitudes and behaviors of Mongolians can be grasped quantitatively; (ii) the surveys enable cross-national comparison; and (iii) survey data is open to researchers.

The first advantage derives from the quantitative method of the survey. Field researches focus on specific people or areas and describe their detailed images; therefore, it is regarded as qualitative research. Cross-national social surveys, on the other hand, target people living in plural societies and aim to measure such information as their attitudes toward a certain topic, their values,

and their behavior in quantitative terms, thereby classifying this method as a quantitative survey.

Quantitative surveys and qualitative researches have distinct characteristics, which are outlined in Table 1. It should be noted that, although some argue that one method is superior to the other, these two approaches can be complementary²⁾: the life history of a herdsman transitioning to a market economy might be best depicted through the qualitative research, whereas the quantitative survey might be appropriate in verifying factors determining herdsmen's attitudes toward transition in the country.

Table 1 Quantitative Survey and Qualitative Research

Quantitative Survey	Qualitative Research
Measure objective facts	Construct social reality, cultural meaning
Focus on Variables	Focus on interactive processes, events
Reliability is key	Authenticity is key
Value free	Values are present and explicit
Independent of context	Situationally constrained
Many cases, subjects	Few cases, subjects
Statistical analysis	Thematic analysis
Researcher is detached	Researcher is involved
Measure attitudes and orientation in a large population	Describe events taking place in limited area and time

Source: Babbie (2004), Neuman (2003).

As for the second advantage, I would like to address the following two aspects by applying Manabe (2004). First, social and human behavioral phenomena in Mongolia have become a subject of scientific research for researchers all over the world. This promotes the development of not only Mongol study but also the study of other cultures. Second, comparative studies lead us to reexamine conventional assumptions and concepts. There are plenty of arguments that attribute the distinctive characteristics of Mongolians to their “peculiar” nomadic pastoralism. However, the problem lies in verifying whether or not they are correct. Cross-national social surveys with established and scientifically-valid methodology offer a way to test such descriptions.

The third advantage is in the drastically easier and more certain access to the realities of the Mongolian people and society. A cross-national survey requires huge amounts of resources and time, and cannot be conducted by an individual researcher. Releasing survey data enables researchers to explore the realities of Mongolia, even if they cannot conduct a survey by themselves. An analysis utilizing survey data collected by other researchers or organizations is called a “secondary analysis,” and has already become an established research method in social science.

There is another significance in opening survey data: it enables researchers to verify the

arguments of previous studies. Qualitative researches provide detailed descriptions of subjects studied, but it is difficult to assure whether or not such descriptions can be generalized. It is also difficult to verify studies based on quantitative surveys unless open data is available. Studies using open data can be replicated and tested by another study, as with experiments in natural science. This makes it possible to detect unsuitable studies, thereby eliminating a biased image of Mongolia.

As a recent addition to the history of Mongol study, cross-national social surveys are crucial to the exploration of people and society in Mongolia. Studies based on these surveys are expected to offer scientific findings from the country, and to contribute to the understanding of not only Mongolia but also other cultures. The following sections are an examination of such examples.

II The AsiaBarometer

The AsiaBarometer has been conducting surveys since 2003 in various parts of Asia. The countries and regions surveyed vary each year, as shown in Table 2.

Table 2 Countries and Regions Surveyed, and Target Population in the AsiaBarometer

Year	Countries and Regions Surveyed (Number)	Target Population
2003	Japan, South Korea, China, Thailand, India, Malaysia, Myanmar (Burma), Sri Lanka, Uzbekistan, Vietnam (10)	800 (aged 20-59)
2004	Japan, South Korea, China, Brunei, Cambodia, Indonesia, Laos PDR, Malaysia, Myanmar, Philippines, Singapore, Thailand, Viet Nam (13)	800 (aged 20-59)
2005	Afghanistan, Bangladesh, Bhutan, India, Kazakhstan, Kyrgyz Republic, Maldives, <u>Mongolia</u> , Nepal, Pakistan, Sri Lanka, Tajikistan, Turkmenistan, Uzbekistan (14)	800-1200 (aged 20-59)*
2006	Japan, South Korea, Taiwan, China, Hong Kong, Singapore, Vietnam (7)	1,000 except China with 2,000**
2007	Cambodia, Indonesia, Laos, Malaysia, Myanmar, The Philippines, Thailand (7)	1,000**
2008	Australia, China, India, Japan, Russia, The United States (6)	1,000**

Note: *- In Mongolia adults aged 20-69 were surveyed.

** - Age group is not specified.

Source: The AsiaBarometer website (<https://www.asiabarometer.org/>).

Takashi Inoguchi, the leader of the AsiaBarometer, describes the main subject of the survey as “daily of ordinary people in Asia” (Inoguchi, 2005:17). Questionnaires of the AsiaBarometer contain questions regarding the lives of respondents, such as their social infrastructure, patterns of economic life, patterns of daily life, values and norms in daily life, values and norms associated with social behavior, identities, views on social and political issues and institutions, health conditions, and sociological attributes (Inoguchi, 2006; Inoguchi and Fujii, 2007:7).

Mongolia was included in the AsiaBarometer 2005 survey targeting the regions of Central and

South Asia. The survey in Mongolia was conducted in the capital city of Ulaanbaatar and the four aimags of each region: Dundgobi (Central), Sukhbaatar (Eastern), Khovd (Western) and Khövsgöl (Khangai). The 800 respondents were chosen through multi-stage stratified random sampling and participated in face-to-face interviews (January, 2008). The survey data has been released on the AsiaBarometer and the ICPSR of the University of Michigan websites, and is available upon request. The AsiaBarometer website released questionnaires in Mongolian and English.

The AsiaBarometer 2005 data, along with the data collected in other years, has already produced several cross-national analyses that include Mongolia. Carlson (2008) used 2004 and 2005 data and examined whether religious affiliation affected one's preference of regime. The analysis found differences in the preferences of regimes among and within religious groups. Afghan Muslims, for instance, preferred government led by experts. Within Buddhist groups, the Mongolians were most supportive of democracy. Support for nondemocratic governments was significantly higher in Hindus, Muslims, and Buddhists than Christians, while support for democracy was significantly lower only in Hindus. There was no significant difference in other religious and non-religious groups.

Inoguchi and Hotta (2006, 2008) explored social capital in Central and South Asia. They extracted three components from questions on social capital: the first component "general trust" is related to interpersonal trust; the second, "merit-based utilitarianism," is witnessed as trust in lucrative human relationships; the third, "institutional engagement," comprises trust in institutions (in this case, religious groups and social welfare) and the use of social networks. They determined the scores for each component and sorted countries into six groups. Mongolia and Nepal were classified into group 5, where interpersonal trust is low but utilitarianism and institutional engagement is high. They explained the results as owing to their geopolitical proximity to China.

Manabe (2006, 2008) analyzed the correlation among public utilities, well-being (sense of happiness, life satisfaction and standard of living), as well as trust and political attitudes and behavior in Central (Kazakhstan, Mongolia, and Uzbekistan) and South (India, Pakistan, and Sri Lanka) Asian countries. The results were as follows: first, generalized order could be observed in relation to public utilities: first electricity, then water, and then gas. This order was seen in the countries in AsiaBarometer 2005 and six countries (China, Japan, Malaysia, South Korea, Thailand, and Vietnam) in AsiaBarometer 2003 (Manabe, 2004). Second, sense of happiness was closely related to satisfaction with institutions in Kazakhstan, Pakistan, Sri Lanka, and Uzbekistan but not in India and Mongolia. Third, the components of personal trust were related with each other in all countries, but they were less related to the components of institutional trust. No general tendency was found among the components of institutional trust. Fourth, there were patterns of correlation between cynicism in politics and voting behavior: V-shape (Kazakhstan and Sri Lanka), U-shape (India, Mongolia, and Uzbekistan) and the inverted U-shape (Pakistan).

Reed (2007) analyzed the role of religion in “secular” East Asia and “religious” South Asia. In South Asia, there was almost no respondent without a religious identification, and the majority of the respondents answered that they prayed or meditated daily. In East Asia, on the other hand, the percentage of those without a religious identification was higher, although it varied from 18.6% in Mongolia to 79.5% in China. On the other hand, there was a common feature of daily prayer between the two areas: daily prayer had a significantly positive linkage with age and gender. Besides, the effect of the standard of living and education level on daily prayer varied, regardless of the areas. The standard of living had a significantly positive effect in Mongolia whereas it was negative in China, India, and South Korea. The education level had a significantly positive effect in Hong Kong and negative effects in China, Japan, and Pakistan.

In Reed (2008), religiosity in “secular” Central Asia and “religious” South Asia was analyzed. In South Asia, except Sri Lanka, the majority of respondents performed daily prayers and thought that ceremonies such as funerals, weddings, births, and festivals should include religion. On the other hand, Central Asians tended to accept non-religious ceremonies and the absence of daily prayer. The least religious country was Mongolia, where non-religious ceremonies were most accepted and only about 5% of respondents performed daily prayer. In both areas, those who performed daily prayers were tolerant about moral decline, bribery, abortion, and homosexuality and were passive in elections, whereas those who preferred religious ceremonies exhibited a converse behavior pattern.

Sonoda (2007) examined the image of Japan in East Asian countries and the region. In a question posed to the respondents on whether Japan had a positive or a negative influence in their country, it was determined that Japan was seen favorably in all the countries and regions analyzed except South Korea and China. The AsiaBarometer also questioned the influence of other countries such as China, India, Russia, the United States, and the United Kingdom. As for Mongolia, the most favored country in Mongolia was Russia, followed by the United States, South Korea, the United Kingdom, and Japan. China was the country least favored in Mongolia.

In Sonoda (2008), Asian identity was analyzed by using data from the AsiaBarometer 2004, 2005, and 2006. The percentage of respondents who identified themselves as “Asian” was highest in Cambodia (99.3%) and lowest in Afghanistan (less than 10%). In Mongolia the percentage was around 75%, or eighth place among the 28 countries and regions analyzed. There was a significantly positive and strong relation between national pride and Asian identity. Although national pride was considered as a discouraging element in the promotion of the Asian identity, the result was in fact quite opposite. The respondents with an Asian identity were found to perceive the influences of other countries more positively than those without this identity.

AsiaBarometer 2005 provides data on the lives, attitudes, and behavior of people in Central and South Asia, where quantitative survey data is extremely scarce. This data is of great help,

depicting the true image of the area and contributing to the development of social sciences.

At the same time, however, some problems should be pointed out. First, considering the political conditions or underdeveloped infrastructures, it is questionable if a nationwide survey in its true sense was possible in the countries of the 2005 survey³⁾. In fact, the survey in Mongolia was limited to certain areas. Second, Kawato (2006) argued that some questions contained ambiguity— such as the question about the influence of countries analyzed in Sonoda (2007). The word “influence” can be used as a political, economic or cultural reference, and answers may differ depending on the respondent’s interpretation. Third, in countries where citizens are strictly monitored, answers may be biased so as to avoid the attention of the authorities. Fourth, it would be necessary to ask whether a respondent is a member of the ruling party in a country under a socialist regime or a dictatorship (Sonoda, 2005).

III The Asian Barometer (ABS)

The Asian Barometer (ABS), headquartered at National Taiwan University, is a survey focusing on public opinion on political values, democracy, and governance in Asia. It was originally launched as the East Asia Barometer in 2000, and became the ABS in 2003 when it merged with the South Asia Barometer.

The ABS has conducted two waves of surveys. The countries and regions surveyed are shown in Table 3. The dataset of the first wave has already been released on the Asian Barometer website. An online analysis is also possible on the website.

Table 3 Countries and Regions Surveyed in the ABS

Wave	Survey year	Countries and regions surveyed (Number)
1st	2001-2002	Japan, South Korea, Taiwan, China, Hong Kong, <u>Mongolia</u> , Philippines, Thailand (8)
2nd	2006-2007	Japan, South Korea, Taiwan, China, Hong Kong, Cambodia, Philippines, Indonesia, Malaysia, <u>Mongolia</u> , Singapore, Thailand, Vietnam (13)

Source: The East Asia Barometer website (<http://eacsurvey.law.ntu.edu.tw/index.html>).

In Mongolia both waves of the ABS were conducted. Nathan (2003) reported that the first wave of surveys in Mongolia was conducted in October and November 2002 and collected 1,144 valid responses. An outline of the second wave of surveys in Mongolia is reported in the country report (Ganbat, 2007). According to the report, the survey was conducted by the Academy of Political Education on a nationwide scale in May and June 2006. Respondents were Mongolians of voting age (18 or older), chosen by a four-stage random sampling method consisting of i) Primary Sampling Units, ii) Secondary Sampling Units (soums and districts), iii) households, and iv) respondents. One thousand two hundred and eleven interviews were conducted face-to-face.

There have already been a number of cross-national studies based on ABS data on Asia, including Mongolia. Albritton and Bureekul (2005) focused on the impacts of cultural socialization and the interaction with government in regard to support for democracy, pluralist values, regime legitimacy, economic situation at both national and personal level, perceived and witnessed corruption, and institutional trust. The results determined that cultural socialization had a contradicting impact; modernization had a negative influence on interaction with government, while the trust of others was positive. Moreover, interaction with government affected other interactions.

Chang and Chu (2007) examined the two concepts of democracy: liberal democracy with an emphasis on the electoral procedure or freedom of expression; and the substantivist notion with a stress on income equality or basic needs. In East Asia, the former had not taken root compared to the latter. These concepts were associated with sex, education, political involvement, a detachment from traditionalism but not with age, a detachment from authoritarianism and media exposure.

Chang et al. (2008) tackled the difference in values on economic development and democracy between the East and the West. Economic development took precedence over democracy in Asia. They explained that the superiority of economic development was a product of traditionalism, to be specific, Confucianism, and economic growth did not necessarily lead to a democratic transition, as Western modernization theory expected. Based on this, they argued that focusing on democratic values in Confucianism was essential in order to enroot democracy in Asia.

Chu et al. (2003) and Chu and Huang (2007) explored what would lead people in East Asia to detach themselves from authoritarian regimes. The former study, using first wave data of the ABS, demonstrated that social and political values and regime comparison (perceived democratic progress, increase in political rights, and improvement of policy performance) played a critical role in the detachment from authoritarianism. On the other hand, economic conditions, which were considered to have a correlation with regime preference, did not impose a significant effect on democracy. The latter study used the second wave dataset and explored the support for democracy as well as the detachment from authoritarianism. It also confirmed the effects of detachment from traditionalism and democratic orientation on rejecting authoritarianism, though the effects of those values were weaker for the support of democracy. Rather, the support of democracy was related to perceived democratic progress and satisfaction with democracy.

The quality of democracy was investigated in Chu et. al. (2008) and Huang et. al. (2007). The former study demonstrated that respondents required responsiveness to their needs and concerns, competitive electoral systems, and the delivery of clean politics from their governments. As corruption was still persisting even in democratic regimes, this analysis suggested that the East Asian democracies make further efforts to establish transparency and a legal system. The latter study revealed that most respondents gave low evaluations on democracy in their respective

countries, especially on rule of law, controlling corruption, and horizontal accountability (ability of the legal system and legislature to check government). Therefore, the lower the quality of democracy proved to be, the lesser the satisfaction with democracy itself, popular support for democracy, and the belief in liberal democratic values.

Ikeda et al. (2003) and Ikeda and Kobayashi (2007) analyzed how political participation was related to social capital and cultural factors. The first study demonstrated that social trust and entry in community-level associations had a significant effect on political participation, especially electoral behavior. Cultural factors influenced political participation indirectly: the effect of social trust on political participation becomes larger when people are less collectivistic or more embedded in the Asian “tradition” of supporting morally upright political leaders. The second study also found that, the less collectivistic, or the more supportive of morally upright political leaders, the more an individual is supportive of morally upright political participation.

Nathan (2003) provided exploratory study patterns of traditionalism in East Asian countries/regions. This study considered “tradition” as a set of attitudes predominant prior to modernization, and focused on the commonality of tradition among societies. It was found that Mongolia was the most traditional country of all those surveyed. Also, two factors were extracted from the questions on traditional values; the former related to hierarchy in family and gender relations, and the latter was on avoidance of conflict and refraining from self-assertion.

Nathan (2007) analyzed the effects of political values represented by democracy and cultural values represented by traditionalism on the support of current regimes in East Asia. Nathan compared the effects of those values to the perceived performance of the current regime, and argued that political and cultural values had more effect on respondents’ support to existing regimes than regime performance did. Democratic values were more effective than cultural values, although the mechanism of the effect was too complicated to be grasped.

Park and Shin (2005) and Shin (2007a) investigated satisfaction and evaluation of democracy in Asian new democracies: South Korea, Mongolia, the Philippines, Taiwan, and Thailand. The majority of respondents in these countries demonstrated satisfaction and better evaluated democratic regimes than the previous nondemocratic regimes. They supported democracy and rejected authoritarianism not only when they were satisfied with the current democracy, but also when they felt the system was performing better than in previous regimes. These findings were also confirmed in Shin (2007a). The study revealed that most of the respondents were satisfied and better evaluated their current regimes than for prior nondemocratic ones. Satisfaction and better evaluation on current regimes increased support for democracy and the rejection of authoritarianism.

Park and Lee (2007) tested the effect of association on democracy. Their analyses clarified that most respondents were not engaged in any associations, regardless of the country and

region. Moreover, associations had little or no effect on civic virtue (social trust, reciprocity, and citizenship), nor did it promote the democratic values or norms reflected in the attachment to democracy, detachment from authoritarianism, and support for political institutional pluralism and rule of law. Associations were only found to have a correlation with political activism: political efficacy, political interest, voting activities, campaigns, contact with officials or organizations, and protests.

Rose et al. (2003) examined the factors of political trust, specifically, the generic factors that vary across countries such as socioeconomic attributes, or the particularistic factors specific to a certain country or area. When particularistic factors are added into the analysis along with generic factors, they have little, if any, significant effect on political trust. However, being Chinese or Russian had a relatively strong effect: the former was positive, and the latter, negative.

Shi (2003) discussed the effect of values and norms on the political process. Among various values and norms, authoritarian orientation and refusal to self-sacrifice toward collective interests had a crucial impact on institutional trust and political action such as demonstrations or strikes.

Shin (2007b) categorized people's reactions to democracy into four types: hybrids (not attached to democracy / not detached from authoritarianism), anti-authoritarians (detached from authoritarianism / not attached to democracy), proto-democrats (attached to democracy / not detached from authoritarianism), and authentic democrats (detached from authoritarianism / attached to democracy). Confucian values increased the number of hybrids and proto-democrats and reduced anti-authoritarians and authentic democrats; the experience of democracy increased the number of proto-democrats and authentic democrats and reduced hybrids and anti-authoritarians.

The process of democratization in Asia was examined by Shin (2008a). He revealed that "authentic democrats" as defined by Shin (2007b) were a minority in East Asian democracies where the support for liberal democratic regimes was low. Such a tendency was attributed to the persistence of a nonliberal culture, leading to very slow and unsteady transition toward democracy.

Shin (2008b) conducted a comparative analysis on the understanding of democracy between East Asia and other regions, using data from the Global Barometer Survey⁴⁾. His analysis demonstrated that most citizens in new democracies had the cognitive capabilities⁵⁾ for defining democracy in their own words. However, against prior hypothesis, such citizens were likely to connect democracy with socioeconomic benefits rather than freedom, or liberty.

Shyu (2003) explored the similarities and differences in the attitudes of people toward political leaders. He revealed that a strong leader mindless of established procedure or opposition was most welcomed in Mongolia. He also found the difference and similarity in factors related to attitudes within East Asia. The effect of sociodemographic factors varied among countries: for instance, effect of age was negative in China but positive in Mongolia. On the other hand, political factors such as democratic values and trust in government had a positive effect in almost all the countries.

Shyu (2007) focused on the relation between economic performance and support for democracy. The evaluation of macroeconomic conditions proved to have a significantly positive effect on the support for democracy. Meanwhile, the evaluation of a respondent's own economic condition had a significantly negative effect, which indicated that people in disadvantageous financial situations were more supportive of democracy, perhaps with a view to changing their situation.

Tan and Wang (2007) examined whether or not younger generations in Asia were supportive of democracy. The results showed that younger generations were likely to have democratic values, more so than older generations. Asia's youth were also found to be more supportive of democracy and less traditional. However, the effect of age reduced when other variables were controlled.

Wu and Chu (2007) investigated whether uneven income distribution affected satisfaction with and support for democracy. Their analyses showed that both lower and higher income holders tended to be less satisfied with democratic performance than middle income holders. It also showed that the assessment of democracy worsened as income disparity expanded.

It should be noted that there have already been studies on Mongolia using ABS data. Ganbat (2004) analyzed how Mongolians perceived democratization, current democratic conditions, and the future of democracy. He demonstrated that the majority of Mongolians were satisfied with the current conditions and optimistic about democracy in near future. At the same time, he warned that the lack of a profound notion of democracy, weak detachment from authoritarianism, and an ambiguous regime preference for a democracy would impede the democratic transition in Mongolia.

Landman et al. (2005) discussed the condition of democracy in Mongolia. They assessed the various aspects of Mongolian democracy, and in their assessment the ABS data is quoted to denote that most Mongolian citizens agreed that democracy is both desirable and suitable to their own country, though they were unsatisfied with the democratic process.

Data collected in Mongolia by the ABS is used in not only cross-national or Mongolian researches, but also contributes to researches of other political systems: It was used in the analyses of Japan by Yamada et al. (2008), Taiwan by Huang et al. (2008), the Philippines by Romero et al. (2008), Indonesia by Mujani (2008), Malaysia by Welsh et al. (2008), Hong Kong by Lam and Kuan (2003) and Ma and Chan (2008), Cambodia by Meerkerk (2008), and Vietnam by Pham (2008).

The ABS, as stated above, has been providing data and studies on democracy in Asia. Since democratic transition is still a critical issue in Asia, the findings from the ABS will produce various guidelines for the latter in the future. Moreover, analyses of the ABS data can increase the possibility that Mongolian democratization could contribute to democratic transitions worldwide.

However, we should be aware of the danger when interpreting the word "tradition." The ABS covers the area with a variety of political and economic conditions, religions — Buddhism, Islam,

Catholic —, and ways of living from farming to nomadic pastoralism. Assuming the existence of a unified “tradition” in this diversified area might cause a misunderstanding, unless “tradition” is strictly defined as in Nathan (2003). Besides, “tradition” tends to be associated with Confucianism in the aforementioned researches, but a Mongolian would never label himself or herself as a Confucian. “Tradition” or cultural factors should be interpreted with caution.

IV Life in Transition Survey (LiTS)

Life in Transition Survey (LiTS) was conducted in 2006 by the European Bank for Reconstruction and Development (EBRD), an international financial institution to support the transition of ex-socialist countries toward a market economy, with a focus on the lives of people during this transition. The survey covered transition countries in so-called the former Soviet bloc⁶⁾; however, Turkmenistan was excluded because of its political and social conditions. Turkey was included in its place — although it is not considered to be ex-socialist but rather one of the World Bank’s European and Central Asian countries — as well as other countries in LiTS (except Mongolia). The data and questionnaire are available on the EBRD website.

The methodology of LiTS is detailed in its survey reports (Synovate, 2006; EBRD, 2007a). In each country, 1,000 interviews of adults (aged 18 or older) were collected from a nationally representative sample chosen through the probability proportionate to size (PPS) method⁷⁾. Countries were first divided into primary sampling units (PSUs) based on census enumeration areas. From these PSUs 50 units were randomly chosen, and 20 respondents were also randomly selected from each of the 50 units. In Mongolia, however, a different method was used due to its sparse population and nomadic pastoralists. Mongolia was first split into the capital Ulaanbaatar and other areas. Nineteen PSUs out of 50 were allotted to the former Ulaanbaatar stratum, and the rest (31 PSUs) were allotted to the latter. Then PPS selection was used in each stratum⁸⁾.

There have already been researches using the LiTS data. Denisova et al. (2007) examined how transitions changed labor market structure. Transitions generated self-employment and a shift in the labor force from the state to the private sector. However, non-employment rose during the transitionary period, and it was not until 2001 when employment started to recover. The impact of transition on employment was different among countries as well as within job categories; the impact was stronger in the South Caucasus and Bosnia-Herzegovina, and high-skill labor was more impact-resistant than low or medium skill labor. Mongolia was one of the countries where, against the trend mentioned above, there was a shift in its labor force from non-employment to state sector.

Grosjean and Senik (2007a, 2007b) analyzed the relation between economic liberalization and preference toward democracy. In the analysis, the effects of distance in relation to the border was controlled, based on the assumption that a person living near the border and another person living in another region faced different degrees of market development even in the same country.

The finding was that democracy increased support for market liberalization, whereas market liberalization did not generate support for democracy.

Guriel and Zhuravskaya (2007) and Sanfey and Teksoz (2008) focused on life satisfaction. The former study used data from the World Values Survey (WVS)⁹⁾ and LiTS and revealed a stagnation in life satisfaction despite economic recovery, which contradicted the empirical fact that life satisfaction improves as the economy expands. One of the major factors affecting this result was sample bias in transition countries: non-response rates were higher in individuals with high incomes than those with low incomes. Other factors related to lower life satisfaction were deteriorated human capital and lack of stability. The latter study showed the difference in the effect of countries on life satisfaction; this effect was positive in Central Asian countries, Belarus, and most of the EU member states and negative in Southern European countries and Hungary; there was no significant effect in the Kyrgyz Republic, Mongolia, Poland, and Russia.

In addition to these researches, EBRD (2007b) offers a broad and detailed report of the survey results. It contains the analyses of living standards and measures of life, changes in the labor market, public services and attitudes toward environment. It provides information on the frequencies of questions by country, and therefore can be used as a source book of LiTS.

LiTS offers data revealing the attitudes of people toward transition in countries where nationwide surveys have rarely or never been conducted. However, it is a pity that LiTS seems relatively unknown compared with the AsiaBarometer and the ABS. It is necessary for experts on transition economies to utilize LiTS data before it becomes too outdated to be relevant.

V Future Challenges and Perspectives

This study examined cross-national social surveys conducted in Mongolia: the AsiaBarometer, the ABS, and LiTS, and researches based on these surveys. Due to time constraints and information gathering capacity, this paper may not provide a complete list of references. Nevertheless, it determines, to a certain degree, a new form of Mongol study and its achievements.

The challenges posed by these surveys are twofold. The first is that these surveys must be conducted continuously. While the ABS conducted two surveys in Mongolia, LiTS is not a continuous survey, and it is not clear whether the AsiaBarometer repeats a survey in Mongolia. However, findings in the 2000s might not hold true after a certain period of time. It is necessary to repeat surveys so as to verify whether these findings still hold true.

The second challenge is to assure the validity in the interpretation of the survey results. As was discussed in Section 3, it is difficult to interpret the results logically in countries like Mongolia, where cross-national surveys were only recently introduced. Inaccurate interpretations, such as labeling Mongolia's tradition as Confucian, might raise doubts in researches based on these surveys.

Then, what should be done? A solution to the first challenge is to have Mongolia participate in worldwide social surveys such as the WVS or the ISSP¹⁰⁾. Participants of such surveys can learn the skills and techniques as well as gain the experience necessary to implement nationwide quantitative surveys. Mongolian researchers have conducted field surveys of the AsiaBarometer and the ABS, and it is possible to organize research teams in Mongolia.

As for the second challenge, it is desirable for Mongolists to test the “findings” of existing studies. There is no guarantee that the experts in data analysis are familiar with the society and culture of Mongolia. Any interpretations of the social and cultural aspects of Mongolia should be reexamined by those who have mastered knowledge of the country. However, such reexamination requires the knowledge and skill of data analysis. It is necessary to nurture such researchers and to promote the collaboration of among data scientists and Mongolists.

Despite these challenges, cross-national social surveys are useful tools to enrich social science in Mongolia. By accumulating researches based on the data provided by these surveys, we can elucidate the reality of Mongolian people and society more accurately and precisely.

References

- Albritton, Robert B. and Thawilwadee Bureekul (2005), ‘Social and cultural supports for plural democracy in eight Asian nations: A cross-national, within-nation analysis’ “ABS Working Paper Series” No.31.
- Babbie, Earl (2004), “The Practice of Social Research (10th Edition)” Wadsworth/Thomson Learning, Belmont, CA.
- Carlson, Matthew (2008), ‘The Leadership, democracy and the impact of religion: An analysis of the AsiaBarometer and World Values Surveys’ in Inoguchi (ed.), 367-382.
- Chang, Eric and Yun-han Chu (2007), ‘Traditionalism, political learning and conceptions of democracy in East Asia’ “ABS Working Paper Series” No.39.
- Chang, Alex, Yun-han Chu, and Yu-tzung Chang (2008), ‘Analyzing the foundation for the economic priority in East Asia’ Presented at the Asian Barometer Conference on “The State of Democratic Governance in Asia”, Taipei.
- Chu, Yun-han, Yu-tzung Chang and Fu Hu (2003), ‘Regime performance, value change and authoritarian detachment in East Asia’ “ABS Working Paper Series” No.8.
- Chu, Yun-han and Min-hua Huang (2007), ‘A synthetic analysis of sources of democratic legitimacy’ “ABS Working Paper Series” No.41.
- Chu, Yun-han, Min-hua Huang and Yu-tzung Chang (2008), ‘Quality of democracy and regime legitimacy in East Asia.’ Presented at the Asian Barometer Conference on “The State of Democratic Governance in Asia”, Taipei.
- Denisova, Irina, Markus Eller and Ekaterina Zhuravskaya (2007), ‘Labor market flows in transition’ “CEFIR Policy Paper Series”.

- EBRD (2007a), "Life in Transition: A Survey of People's Experiences and Attitudes".
- EBRD (2007b), "Transition Report 2007: People in Transition".
- Flick, Uwe (2002), "An Introduction to Qualitative Research (2nd Edition)" Sage. (Translated into Japanese by Oda, Hiroshi, Noriko Yamamoto, Tsune Kasuga and Naoko Miyaji as "Shitsu teki kenkyu nyumon: 'Ningen no kagaku' no tamen no hohoron", 2002.)
- Ganbat, Danba (2004), 'The mass public and democratic politics in Mongolia' "ABS Working Paper Series" No.29.
- Ganbat, Danba (2007), 'Mongolia country report Second wave of Asian Barometer Survey' "ABS Working Paper Series" No.33.
- Grosjean, Pauline and Claudia Senik (2007a), 'Should market liberalisation precede democracy? causal relations between political preferences and development' "EBRD Working Paper Series" No. 103.
- Grosjean, Pauline and Claudia Senik (2007b), 'Should market liberalisation precede democracy? causal relations between political preferences and development' "IZA Discussion Paper" No. 2889.
- Guriev, Sergei and Ekaterina Zhuravskaya (2007) '(Un)Happiness in transition' "CEFIR/NES Working Paper Series" No. 111.
- Huang, Min-hua, Yun-han Chu and Yu-tzung Chang (2007), 'Quality of democracy and regime legitimacy in East Asia' "ABS Working Paper Series" No.40.
- Huang, Min-hua, Chang-yen Tsai and Yu-tzung Chang (2008), 'The state of democratic governance in Taiwan: partisan-driven perceptions in political turbulence' Presented at the Asian Barometer Conference on "The State of Democratic Governance in Asia", Taipei.
- Ikedo, Ken'ichi, Yasuo Yamada and Masaru Kohno (2003), 'Influence of social capital on political participation in Asian cultural context' "ABS Working Paper Series" No.10.
- Ikedo, Ken'ichi and Tetsuro Kobayashi (2007), 'The influence of social capital on political participation in the cultural context of Asia' "ABS Working Paper Series" No.37.
- Iarosshi, Giuseppe (2006), "The Power of Survey Design" The World Bank, Washington.
- Inoguchi, Takashi (2005), 'The AsiaBarometer: Its origins, its principles and its prospects' "Participation" 29(2): 16-18.
- Inoguchi, Takashi (2006), 'The AsiaBarometer question and answers' Paper prepared for presentation at the World Congress of the International Political Science Association, Fukuoka, Japan.
- Inoguchi, Takashi, ed. (2008), "Human beliefs and values in incredible Asia: South and Central Asia in focus country profiles and thematic analysis based on the AsiaBarometer 2005" Akashi shoten.
- Inoguchi, Takashi and Zen-U Lucian Hotta (2006), 'Quantifying social capital in Central and South Asia: Are there democratic, developmental, and regionalizing potentials?' "Japanese Journal of Political Science" 7(2): 195-220.
- Inoguchi, Takashi, and Seiji Fujii (2007), 'The AsiaBarometer: Its Aim, its scope and its development' downloaded from the AsiaBarometer website.
- Inoguchi, Takashi and Zen-U Lucian Hotta (2008), 'Quantifying social capital in Central and South

- Asia: Are there democratic, developmental, and regionalizing potentials?' in Inoguchi (ed.), 327-349.
- Janar, Turtogto (2008), 'Daily lifestyle and political attitudes of ordinary Mongolians' in Inoguchi (ed.), 221-248.
- Kawato, Akio (2006), '[Book review] Inoguchi, Takashi, Miguel Basáñez, Akihiko Tanaka and Timur Dadabaev (eds.) [2005] "AsiaBarometer: toshibu no kachikan to seikatu style -AsiaBarometer [2003] no bunseki to shiryō" (Inoguchi, Takashi, Miguel Basáñez, Akihiko Tanaka and Timur Dadabaev (eds.), 2005, Values and life styles in urban Asia: A Cross-cultural analysis and sourcebook based on the AsiaBarometer survey of 2003)' "Asia kenkyū" 52(1): 102-106.
- Lam, Wai-man and Hsin-Chi Kuan (2003), 'Noises and interruptions ? The road to democracy', "ABS Working Paper Series" No.11.
- Landman, Todd, Marco Larizza and Claire McEvoy (2005), 'State of democracy in Mongolia ? A desk study', Paper prepared for "Democracy Development in Mongolia: Challenges and Opportunities" national conference, Ulaanbaatar, Mongolia.
- Ma, Ngok and Kin-man Chan (2008), 'The state of democratic governance in Hong Kong' Presented at the Asian Barometer Conference on "The State of Democratic Governance in Asia", Taipei.
- Manabe, Kazufumi (2004), 'AsiaBarometer no data kaiseki - hohoronteki kentō to tansakuteki data kaiseki ?' (Data analysis of the AsiaBarometer survey - methodological discussions and exploratory data analysis -) "Kwansei Gakuin University School of Sociology Journal" 97: 1-24.
- Manabe, Kazufumi (2006), 'Data analysis of the AsiaBarometer survey -Methodological discussions and exploratory data analysis-' "Kwansei Gakuin University School of Sociology Journal" 101: 25-40.
- Manabe, Kazufumi (2008), 'Data analysis of the AsiaBarometer survey -Methodological discussions and exploratory data analysis-' in Inoguchi (ed.), 351-366.
- Meerkerk, Dorie (2008), 'The state of democratic governance in Cambodia.' Presented at the Asian Barometer Conference on "The State of Democratic Governance in Asia", Taipei.
- Minato, Kunio (2008), 'Cross-national social survey in East Asia: World Values Survey, ISSP, AsiaBarometer, Asian Barometer, East Asia Value Survey and EASS', Institute of Regional Studies, Osaka University of Commerce and Institute of Social Science, University of Tokyo (eds.), "JGSS Monographs" 7:159-193.
- Mujani, Saiful (2008), 'The state of Indonesia democratic governance: A popular assessment' Presented at the Asian Barometer Conference on "The State of Democratic Governance in Asia", Taipei.
- Nathan, Andrew (2003), 'Patterns of traditionalism in East Asia.' Presented at East Asia Barometer Conference on "How East Asians View Democracy: The Region in Global Perspective", Taipei.
- Nathan, Andrew J (2007), 'Political culture and diffuse regime support in Asia' "ABS Working Paper Series" No.43.
- Neuman, W. Laurence (2003), "Social Research Methods: Qualitative and Quantitative Approaches (5th Edition)" Allyn and Bacon, Boston.

- Park, Chong-Min and Doh Chull Shin (2005), 'Do East Asians view democracy as a lesser evil? Testing the Churchill's notion of democracy in East Asia' "ABS Working Paper Series" No.30.
- Park, Chong-min and Jaechul Lee (2007), 'Are associations the schools of democracy across Asia?' "ABS Working Paper Series" No.38.
- Pham, Thanh Nghi (2008), 'The state of democratic governance in Vietnam.' Presented at the Asian Barometer Conference on "The State of Democratic Governance in Asia", Taipei.
- Reed, Steven R. (2007), 'Analyzing secularization and religiosity in Asia,' "Japanese Journal of Political Science" 8(3): 327-339.
- Reed, Steven R. (2008), 'Religiosity in Asia: preliminary analysis of the 2005 AsiaBarometer' in Inoguchi (ed.), 383-394.
- Romero, Segundo, Eclar and Linda Luz Guerrero (2008), 'Philippine democracy and governance 2005: Insights from the Asian Barometer Surveys.' Presented at the Asian Barometer Conference on "The State of Democratic Governance in Asia", Taipei.
- Rose, Richard, William Mishler, Yun-han Chu and Neil Munro (2003), 'Asian values, post-communist legacies and generic influences on political trust: A substantive and methodological analysis' Presented at East Asia Barometer Conference on "How East Asians View Democracy: The Region in Global Perspective", Taipei.
- Sanfey, Peter and Utku Teksoz (2008), 'Life in transition: are people happier after a decade and a half?' Paper Prepared for the 30th General Conference of The International Association for Research in Income and Wealth.
- Shi, Tianjian (2003), 'Does it matter or not? Cultural impacts on the political process' "ABS Working Paper Series" No.13.
- Shin, Doh Chull (2007a), 'Is not so bad good enough: Retesting Churchill's lesser-evil notion of democracy in East Asia' "ABS Working Paper Series" No.44.
- Shin, Doh Chull (2007b), "Why East Asians react differently to democratic regime change: Discerning their routes to becoming authentic democrats" "ABS Working Paper Series" No. 45.
- Shin, Doh Chull (2008a), 'The third wave in East Asia: Comparative and dynamic perspectives.' Presented at the Asian Barometer Conference on "The State of Democratic Governance in Asia" Taipei.
- Shin, Doh Chull (2008b), 'How East Asians understand democracy: From a comparative perspective.' Presented at the Asian Barometer Conference on "The State of Democratic Governance in Asia", Taipei.
- Shyu, Huoyan (2003), 'Political style in eight East Asian countries: A preliminary analysis' Presented at East Asia Barometer Conference on "How East Asians View Democracy: The Region in Global Perspective", Taipei.
- Shyu, Huoyan (2007), 'Does economic performance matter? Economic evaluation and support for democracy in seven Asian Counties' Paper presented at the Asian Barometer Conference on "Why Asians Support Democracy and Why Not?", Taipei.
- Sonoda, Sigeto (2005), 'Vietnam: Social life under development and globalization', in Inoguchi et.

- al. (eds.), "Values and Life Styles in Urban Asia: A Cross-Cultural Analysis and Sourcebook Based on the AsiaBarometer Survey of 2003" Mexico City: Siglo XXI Editores: 121-133.
- Sonoda, Sigeto (2006), 'Chugoku kenkyu kara hikaku kenkyu he -'toi' wo toinaosu tameno seido kochiku to AsiaBarometer no yakuwari (From Chinese research to comparative research ? Role of the AsiaBarometer in establishing system to reexamine "questions") "AsiaBarometer Project Series" 4:14-18.
- Sonoda, Shigeto (2007), "'AsiaBarometer" ni miru Asia no katachi' (Form of Asia seen in the AsiaBarometer) "Waseda Asia Review" 1:30-33.
- Sonoda, Shigeto (2008), 'Asia no nakano Asia jin ishiki' (Asian identity in Asia) "Waseda Asia Review" 3:28-31.
- Synovate (2006), "Life in Transition Survey (LITS) 2006 a Brief Report on Observations, Experiences and Methodology from the Survey" retrieved on 17th February, 2009 from the EBRD website.
- Tan, Ern Ser and Wang Zhengxu (2007), 'Are younger people in Asia more pro-democratic: Lifecycle effects or generational changes?' "ABS Working Paper Series" No.36.
- Welsh, Bridget, Ibrahim Suffian and Andrew Aeria (2008), 'The state of democracy in Malaysia: public perceptions' Presented at the Asian Barometer Conference on "The State of Democratic Governance in Asia", Taipei.
- Wu, Chin-en and Yun-han Chu (2007), 'Income inequality and satisfaction with democracy: evidence from East Asia' "ABS Working Paper Series" No.42.
- Yamada, Masahiro, Gill Steel, Kazunori Inamasu, Ken'ichi Ikeda and Naoko Taniguchi (2008), 'Country assessment report on the state of democratic governance Japan: pessimism in mature democracy' Presented at the Asian Barometer Conference on "The State of Democratic Governance in Asia", Taipei.

Notes

- 1) Researches called "field research" in this article are generally called "fieldwork". However, "fieldwork" also indicates implementation of quantitative survey in the field (interviews, distribution of questionnaires etc.), and using the term might cause confusion. Because of this, I use "field research" to refer to qualitative method.
- 2) See Babbie (2004), Neuman (2003) and Flick (2002) for issues in the controversy.
- 3) As for other countries, detailed methodology of survey has not been open to public at the end of February 2009.
- 4) The Global Barometer Survey was inaugurated in 2001 based on a partnership among the ABS (then East Asia Barometer), Latinobarometro, Afrobarometer and the Arab Barometer.
- 5) "Cognitive capability" refers to ability how many concepts a person can think of in regards to "democracy".
- 6) The countries surveyed in LiTS were Albania, Armenia, Azerbaijan, Belarus, Bosnia and Herzegovina, Bulgaria, Croatia, Czech Republic, Estonia, FYR Macedonia, Georgia, Hungary,

Kazakhstan, Kyrgyz Republic, Latvia, Lithuania, Moldova, Mongolia, Montenegro, Poland, Romania, Russia, Serbia, Slovak Republic, Slovenia, Tajikistan, Turkey, Ukraine, and Uzbekistan.

- 7) See Iarossi (2006) for practical procedure.
- 8) Another exception is Serbia and Montenegro. Because Montenegro declared independence from Serbia in 2006, survey was conducted separately and 1,000 interviews were collected for each.
- 9) The WVS has conducted five waves of survey with a focus on value change and modernization since 1981. See the WVS website (<http://www.worldvaluessurvey.org/>) and Minato (2008) for further information.
- 10) The ISSP (International Social Survey Programme) has been conducting annual surveys in variety of countries and regions all over the world. See the ISSP website (<http://issp.org>) and Minato (2008) for detail.

(みなと くにお)

《論 文》

ゴビ山岳部における牧地植生の早魃による変化について

三 秋 尚

はじめに

北東アジアの高緯度・高標高帯に位置するモンゴル国は国土の約80%が草原(生態的極相)によって覆われ、その草原植生は概ね北部から南部へ向かって森林性草原、純草原、砂漠性草原、砂漠草原が帯状に分布している¹⁾。これらの草原帯には5種類の家畜、すなわちラクダ、馬、牛(ヤクを含む)、羊、山羊が主として生態的に分布し、遊牧(移動的牧畜)方式によって飼養され、国民経済を大きく支えている。

遊牧は牧地(草原)生態系の畜産的機能に依拠した環境調和型牧畜であり、持続可能な家畜生産方式である。しかし、その家畜生産力は定住的牧畜に比べて著しく低い。その理由として、家畜改良面において苛酷な自然環境への家畜の適応能力の保持に重点を置いているため、乳、肉、毛を目的とした専用品種の育成が阻まれ、一方、飼養管理面では半年以上に亘る厳寒期における牧地植生の量と飼料的品質の低下及び越冬用粗飼料や濃厚飼料の十分な調達・確保の困難性、さらには早魃による夏草及び冬営地における放牧用備蓄草の不足などが挙げられる。

今岡²⁾によるバヤンホンゴル県における1990年代の気温と降水量等の変化に関する調査では、ゴビ草原地帯における降水量には1990年以降わずか10年間にわたっても一定の周期が認められ、そのなかで降水量が多いのは、標高2000メートル以上の観測地点であるが、標高の低い観測地点

では、降水量が少ないまま、横ばい状態になっている。そして2000年には県内全土で早魃が起こり、夏の草生量の不足から家畜を肥らせることができず、その冬のゾド(家畜の大量死)の被害を大きくしている。

遊牧という四季用牧地間の循環的移動放牧システムのもとでは、冬営と春営牧地植生を構成する草種は夏期に旺盛な生育を遂げ、秋以降の急激な低温によって霜枯れ草(foggage)となって備蓄され、一方、夏営と秋営牧地植生の草種は生育中あるいは成熟期の生草である。しかし、いずれの四季用草種とも夏の生育状態が、その量と品質に深く係わり、早魃の発生は牧地植生を介して家畜の増体と越冬能力に著しい影響を及ぼす。

本調査報告は、バヤンホンゴル県ボグド郡ツェルゲル村における冬営牧地において過去に実施した牧地植生の草種構成、植被率、現存量に関する資料を多雨年と寡雨年に仕分けて、早魃が牧地植生に及ぼす影響について検討したものである。

I 調査方法

1. 調査地の概要

モンゴル国のほぼ中央部から北西方向に走るハンガイ山脈を源流とするトゥイン川は、森林性草原帯を経て砂漠性草原帯へと約250km南下し、オロク湖に注ぐ。この湖の南に迫るゴビ・アルタイ山脈はゴビ地方の中央部に深く入り込み、中国国境沿いに東西に横たわる。

ゴビ・アルタイ山脈の東寄りに高峰イフ・ボグド山(3,975m)を擁立する山系があり、その東方約110kmの地点には秀丽テルグーン(3,590m)を頂点とするズーン・ボグド山系がある。ズーン・ボグド山系の山岳斜面の山肌は激しい浸食によってそぎ落とされ急峻であるが、山麓は伸びやかに広がり波状の台地を形成し、この台地にはいく筋もの深い切れ込みがあり、夏の豪雨時にはしばしば濁流の集水路となる。

標高1,000～1,300m前後のゴビ大平原に接続するズーン・ボグド山系の山中で、東西約42km、南北約12kmの広がり占有するツェルゲル村の東半分は標高2,000m以上の山々が連なり、夏营地として利用され、西半分はゴビ平原寄りの2,000m以下の低標高地で冬营地として利用されている。

本調査地は冬营地内のダーマイン・ツァガーン山(2,005m)山麓にあり、その地形は標高1,800mの山すそからゴビ大平原に向かって北西方向に標高1,500mの地点に至る約6kmの緩やかな波状の台地である。ちなみにダーマイン・ツァガーン山麓台地約23km²の牧地では、約600頭の山羊・羊群(1992年現在)が10月上旬から3月末ごろまで昼間放牧されている。

2. 調査時期と方法

植生調査は1993年8月18日、1998年8月29日、2001年8月26日及び2002年8月24日に実施され、同時期における草種の生育ステージは概ね開花～結実期であった。

植生調査方法は1m×1mの方形枠(コドラード)を使用し、同方形枠を1993年は約0.5～1.0km間隔10か所、1998年は約0.5km間隔8か所、2001年と2002年は約0.5km間隔でそれぞれ8、7か所に無作為に設置し、枠内に出現した草種について草丈、冠部被度を測定した。そして牧地群落を構成する草種間の力関係を総合的にあらわす

1つの「ものさし」として頻度比、草丈比、冠部被度比の3要素を用いた積算優占度(SDR₃)及び相対積算優占度(SDR')を算出した³⁾。また、地上0.5cm前後の高さで刈取り、生重と風乾重を測定した。なお、気温と降雨量は調査地点から約70km北方のボグド郡中心地(標高1300m)の気象観測所における測定値である。

3. 調査年次の生育期における気温と降水量

ゴビ山岳部低標高地における主要草種は、一般に4月に萌芽し、7～8月の間に開花・結実し、10月以降に霜枯れ状態となる。以上の4～8月の生育期における月平均気温と月間降水量及び同気温と降水量の積算値(以下、月積算気温と月積算降水量)を示すと表1のとおりである。

表示した1975～2005年(うち1985年は観測値欠如)間における生育期の月積算気温の平均(平年値)は87.7℃、一方、1973～2005年(うち1985年観測値欠如)間における月積算降水量の平均(平年値)は56.3mmとなっている。

上記した月積算気温及び月積算降水量の平均を上回る年次をそれぞれ温暖年、多雨年、反対に下回る年次をそれぞれ冷涼年、寡雨年とすると、冷涼年の出現回数は1975年以降30年間に16回、そのうち1990年以降16年間は8回、一方、寡雨年の出現回数は1973年以降32年間に19回、そのうち1990年以降16年間は8回となっている。

先に記述した調査時期のうち1993年の生育期は冷涼・多雨年(月積算気温78.4℃、月積算降水量102.3mm)、1998年は温暖・多雨年(同89.3℃、85.4mm)、2001年は温暖・寡雨年(同92.8℃、31.4mm)、2002年は温暖・多雨年(同97.1℃、92.1mm)と類別される。

ちなみに上記調査時期の前後年次における生育期の月積算気温と降水量をみると、1992年は冷涼・寡雨年(同84.8℃、34.3mm)、1994年は冷涼・寡雨年(同84.6℃、50.0mm)、1997年は温暖・

やや多雨年(同89.5℃、64.6mm)、1999年は温暖・やや寡雨年(同91.6℃、59.4mm)、2003年は冷涼・やや多雨年(同91.5℃、62.3mm)、2000年は温暖・やや多雨年(同79.3℃、65.3mm)と類別される。

表1 植生調査年における月平均気温と月間降水量

月	気温					降水量				
	平年 ¹⁾	1993年	1998年	2001年	2002年	平年	1993年	1998年	2001年	2002年
1月	-17.2	-19.2	-17.7	-17.6	-17.6	0.6	-	0.0	0.2	1.1
2月	-12.2	-9.6	-8.6	-10.6	-11.5	0.8	1.2	1.2	0.2	0.3
3月	-3.1	-1.9	-1.6	2.2	-11.1	1.4	-	2.8	0.0	1.7
4月	7.0	4.7	9.4	7.8	6.0	2.5	-	18.4	3.4	7.6
5月	15.3	13.6	15.0	15.4	15.7	5.1	5.2	5.5	2.0	28.1
6月	21.3	20.4	21.3	22.3	22.8	10.9	9.4	-	14.1	44.0
7月	23.1	21.1	22.8	24.7	26.8	18.8	26.8	38.2	3.3	7.8
8月	21.0	18.6	20.8	22.6	25.8	19.0	60.9	23.3	8.6	4.6
9月	14.1	3.0	16.1	16.3	23.6	5.5	-	-	0.9	7.7
10月	4.9	4.8	6.5	6.1	14.1	2.7	4.9	8.1	10.4	-
11月	-6.5	-7.7	-2.8	-3.2	-8.9	0.9	-	-	0.7	-
12月	-14.4	16.6	-11.8	-18.9	-19.5	1.0	4.5	-	5.7	-
年間 ²⁾	4.4	2.6	5.8	5.6	5.5	69.2	112.9	97.5	49.5	102.9
生育期 ³⁾	87.7	78.4	89.3	92.8	97.1	56.3	102.3	85.4	31.4	92.1

出所：気象観測地はバヤンホンゴル県ボグド郡気象観測所。

注：1) 平年とは気温は1974～2005年、降水量は1973～2005年(ただし気温、降水量とも1985年を除く)。

2) 年間の気温は年平均気温(℃)、降水量は年間総量(mm)。

3) 生育期は4～8月間における月積算気温(℃)と月積算降水量(mm)。

II 調査結果

1. 1993年と1998年における植生

1993年(冷涼・多雨年)及び1998年(温暖・多雨年)における調査地の植生は表2のとおりであり、草丈と冠部被度は各調査地点における測定値の総和を示している。

1993年における主要草種は14種を数え、その中で冠部被度の特に大きい草種と同被度をみると、イネ科の *Stitipa gobica* (Говийн хялгана) は208%、キク科の *Artemisia frigida* (Агъ) は133%、ユリ科の *Allium polyrrhizum* (Таана) は99%と続き、これら草種の草丈はそれぞれ9.7±1.7cm(変動係数17.5)、16.3±8.1cm(同49.7)、10.6±2.5cm(同23.6)となり、一方、出現頻度

はそれぞれ100%、100%、90%の順となっている。以上の3草種の SDR₃ を高い順に挙げると、*Artemisia frigida* は88.0、*Stipa gobica* は86.5、*Allium polyrrhizum* は65.3と続き、SDR' はそれぞれ22.1%、21.7%、16.9%の順になっている。

以上の草種に次いで冠部被度の大きい草種はキク科の *Ajanía trifida* (Гурвалсан Боролзой) であるが、その数値は25%と著しく小さく、草丈は11.3±3.3cm(同29.2)、出現頻度40%、SDR₃ 26.5、SDR' 6.7%となっている。残り8種類の草種の内訳はキク科3種、イネ科とアカザ科各2種、アブラナ科、ミカン科及び *Ephedra* 科各1種となり、それらの冠部被度は12～<1%、出現頻度は40～10%、草丈は16.0～2.0cm、SDR₃ は24.7～3.7、SDR' は6.4～0.9%の範囲となっている。

上記した牧地植生における植被率は51.1±

3.8% (同7.4)、1 m²当たり現存量は生重で54.7 ± 13.7g (同25.1)、風乾重は19.1 ± 4.1g (同21.5)となっている。以上の現存量の草種別構成割合(風乾重基準)をみると、*Stipa gobica* は33.9%、*Allium polyrrhizum* は21.3%、*Artemisia frigida* は15.1%、*Ajania trifida* は10.3%、*Ajania achilleoides* (төлөгчдүү боролзой) は8.5%と続き、他の草種は3.6~0.2%の範囲となっている。

一方、1998年における主要草種は15種を数え、その中で冠部被度の大きな草種とその被度をみると *Allium polyrrizum* 158%、*Stipa gobica* は102%、*Ajania trifida* は77%、*Ajania achilleoides* は58%、*Artemisa frigida* は38%と続き、残り11種はキク科3種、イネ科とアカザ科各2種、アブラナ科、ミカン科、クマツヅラ科及び *Epedra* 科各1種となり、それらの冠部被度は6~<1%、草

表2 ダーメイン・ツァガン山麓冬営地における夏期の植生(1993、1998年)

草種名	1993年8月18日					1998年8月29日					残存量の草 種別構成割 合(風乾物基 準,(1993年))
	総 和		頻度	SDR ₃	SDR'	総 和		頻度	SDR ₃	SDR'	
	草丈	冠部被度				草丈	冠部被度				
イネ科											
<i>Stipa gobica</i>	97	208	100	86.5	21.7	68	102	100	84.8	15.8	33.9
<i>Agropyron cristatum</i>	19	10	20	12.2	3.1	32	6	38	27.7	5.2	3.6
<i>Cleistogenes soongorica</i>	5	2	10	4.7	1.2	3	2	13	5.7	1.1	0.4
キク科											
<i>Artemisia frigida</i>	163	133	100	88.0	22.1	74	38	63	61.5	11.5	15.1
<i>Artemisia scoparis</i>	32	4	20	13.9	3.5	8	3	13	8.3	1.5	1.8
<i>Ajania achilleoides</i>	41	10	30	20.0	5.0	68	58	63	63.3	11.8	8.5
<i>Ajania trifida</i>	45	25	40	26.5	6.7	73	77	63	69.3	12.9	10.3
<i>Heteropappus hispidus</i>	46	12	40	24.7	6.2	40	5	38	30.8	5.8	2.1
ユリ科											
<i>Allium polyrrhizum</i>	95	99	90	65.3	16.4	76	158	100	111.3	20.8	21.3
アブラナ科											
<i>Ptilotrichum canescens</i>	26	7	30	16.5	4.1	5	<1	25	10.7	2.0	1.3
アカザ科											
<i>Ceratioides Gagnebin</i>	19	11	30	15.7	3.9	25	6	25	20.4	3.8	0.1
<i>Salsola passerina</i>	3	<1	20	7.3	1.8	11	2	50	21.7	4.1	0.3
ミカン科											
<i>Haplophyllum dahuricum</i>	14	4	30	13.5	3.4	10	<1	13	8.6	1.6	0.9
クマツヅラ科											
<i>Caryopteris mongolica</i>	-	-	-	-	-	5	1	13	6.6	1.2	-
Ephedra 科											
<i>Ephedra glauca</i>	2	<1	10	3.7	0.9	3	<1	13	5.7	1.1	0.4
植被率(平均±標準偏差)(%)	51.1 ± 3.8					49.4 ± 9.1					
現存量(平均±標準偏差)(g/ m ²)											
生重	54.7 ± 13.7					53.4 ± 14.0					
風乾重	19.1 ± 4.1					18.3 ± 5.2					

注：1) 調査地点は1992年は0.5~1 km間隔10か所、1998年は約500m 間隔8か所。

2) 総和は各調査地点における草丈(cm)と冠部被度(%)それぞれの測定値の合計。

3) 草丈(cm)、冠部被度(%)および頻度(%)は小数点以下四捨五入。冠部被度<1は1%未満。

4) 残存量の草種別構成比は1993年8月調査における10か所の全風乾物量に占める草種別風乾物の割合(%)。

丈は13.2～2.5、出現頻度は50～13%、 SDR_3 は30.8～5.7、 SDR' は5.8～1.1%の範囲となっている。

以上の牧地植生における植被率は $49.4 \pm 9.1\%$ (同18.4)、 1 m^2 当たり現存量は生重で $53.4 \pm 14.0\text{ g}$ (同26.2)、風乾重は $18.3 \pm 5.2\text{ g}$ (同28.4)となっている。

2. 2001年と2002年における植生

2001年(温暖・寡雨年)と2002年(温暖・多雨年)における調査地の植生は表3のとおりで、2001年の冠部被度の括弧内は夏枯れ個体を含む数値である。

2001年における主要草種はイネ科、キク科及びアカザ科各2種、ユリ科、ミカン科及び *Ephedra* 科各1種の9種を数え、その中で冠部被度の特

に大きい草種とその被度をみると、*Stipa gobica* は166(258) %、*Artemisia frigida* は64(70) %、*Ajania achilleoides* は33(36) %と続き、これら草種の草丈はそれぞれ $8.8 \pm 2.7\text{ cm}$ (変動係数30.7)、 $7.0 \pm 2.0\text{ cm}$ (同28.6)、 $7.5 \pm 1.6\text{ cm}$ (同21.3)となり、一方、出現頻度はそれぞれ100%、75%、75%の順となっている。以上の3種類の草種の SDR_3 を高い順に挙げると *Stipa gobica* は112.2、*Artemisia frigida* は58.5、*Ajania achilleoides* は52.8と続き、 SDR' はそれぞれ39.3%、20.5%、18.5%の順になっている。

以上の3草種に次いで冠部被度の大きい草種は *Ephedra glauca* と *Allium polyrrhizum* の2種類であるが、その冠部被度はそれぞれ8(9) %、7(20) %と小さく、また、それぞれの草丈は $4.5 \pm 1.1\text{ cm}$ (同

表3 ダーマイン・ツアガーデン山麓冬営地における夏期の植生(2001～02年)

草種名	2001年8月26日					2002年8月24日				
	総 和		頻度	SDR_3	SDR'	総 和		頻度	SDR_3	SDR'
	草丈	冠部被度				草丈	冠部被度			
イネ科										
<i>Stipa gobica</i>	71	166(258)	100	112.2	39.3	56	80	86	73.4	16.2
<i>Agropyron cristatum</i>	4	2(3)	13	6.7	2.4	44	15	29	34.0	7.5
<i>Cleistogenes soongorica</i>	-	-	-	-	-	10	<1	29	15.5	3.4
キク科										
<i>Artemisia frigida</i>	44	64(70)	75	58.5	20.5	77	73	86	72.8	16.1
<i>Ajania achilleoides</i>	45	33(36)	75	52.8	18.5	35	34	57	45.8	10.1
<i>Heteropappus hispidus</i>	-	-	-	-	-	34	1	29	26.0	5.8
ユリ科										
<i>Allium polyrrhizum</i>	11	7(20)	25	14.7	5.2	55	130	86	95.9	21.2
アカザ科										
<i>Ceratoides Gagnebin</i>	6	3(4)	13	7.6	2.7	12	<1	14	10.9	2.4
<i>Salsola passerina</i>	2	<1	13	5.3	1.9	12	4	57	28.5	6.3
ミカン科										
<i>Haplophyllum dahuricum</i>	6	<1(1)	13	7.0	2.5	32	10	57	38.5	8.5
Ephedra 科										
<i>Ephedra glauca</i>	14	8(9)	38	20.4	7.2	9	5	14	10.6	2.4
植被率(平均±標準偏差)(%)	37.0 ± 5.4					48.7 ± 14.6				
現存量(平均±標準偏差)(g/ m ²)										
生重	4.8 ± 2.7					21.6 ± 6.9				
風乾重	2.7 ± 1.4					14.7 ± 5.2				

注：1) 調査地点は2001年は約500m間隔8か所、2002年は約500m間隔7か所。

2) 冠部被度の括弧内は当該植物の枯死個体を含む。

3) <1は1%未満。

24.4)、 $5.3 \pm 1.3\text{cm}$ (同24.5)、出現頻度は38%、25%、 SDR_3 は20.4、14.7、 SDR' は7.2%、5.2%となっている。残り4種類はアカザ科2種、イネ科とミカン科各1種となり、それらの冠部被度は3(4)~<1(1)%、草丈は6.0~2.0cm、出現頻度は各13%、 SDR_3 は7.6~5.3、 SDR' は2.7~1.9%の範囲となっている。

上記したように冠部被度の括弧内数値は早魃により茎葉の枯れた個体を含む被度を示しており、したがって括弧内外の被度の開きの大きさから早魃による影響の程度を推測することは可能であり、その影響は全草種に及んでいるが、特に *Allium polyrrhizum*、*Stipa gobica* 及び *Artemisia frigida* において顕著である。

以上で記述した牧地植生の植被度は $37.0 \pm 5.4\%$ (同14.6)、 1m^2 当たり現存量は生重で $4.8 \pm 2.7\text{g}$ (同56.3)、風乾重は $2.7 \pm 1.4\text{g}$ (同51.9)となっている。

一方、2002年における主要草種は11種類で、その内訳はイネ科とキク科各3種、アカザ科2種、ユリ科、ミカン科及び *Ephedra* 科各1種となり、その中で冠部被度の大きい草種とその被度をみると、*Allium polyrrhizum* は130%、*Stipa gobica* は80%、*Artemisia frigida* は73%と続き、これら草種の草丈はそれぞれ $9.2 \pm 1.6\text{cm}$ (同17.4)、 $9.3 \pm 2.2\text{cm}$ (同23.7)、 $12.8 \pm 4.9\text{cm}$ (同38.3)、一方、出現頻度はいずれも86%となっている。以上3種類の草種の SDR_3 を高い順に挙げると、*Allium polyrrhizum* は95.9、*Stipa gobica* は73.4、*Artemisia frigida* は72.8と続き、 SDR' はそれぞれ21.2%、16.2%、16.1%の順になっている。

上記3種類の草種に次いで冠部被度の大きな種類は *Ajanía achilleoides* と *Agropyron cristatum* の2種で、その冠部被度はそれぞれ34%、15%と小さく、また、それぞれの草丈は $8.6 \pm 3.5\text{cm}$ (同40.7)、 $21.9 \pm 5.6\text{cm}$ (同25.6)、出現頻度は57%、29%、 SDR_3 は45.8、34.0、 SDR' は10.1%、7.5%

となっている。残り6草種はアカザ科2種、イネ科、キク科、ミカン科及び *Ephedra* 科各1種となり、それらの冠部被度は5~<1%、草丈は16.8~4.8cm、出現頻度は57~14%、 SDR_3 は38.5~10.6、 SDR' は8.5~2.4%の範囲となっている。

以上の牧地植生の植被率は $48.7 \pm 14.6\%$ (同30.0)、 1m^2 当たり現存量は生重で $21.6 \pm 6.9\text{g}$ (同31.9)、風乾重は $14.7 \pm 5.2\text{g}$ (同35.4)となっている。

III 考察

1. 出現草種の種類

出現草種の最多は1998年の15種、最少は2001年の9種となり、1993年は14種、2002年は11種を数えている。以上の草種の科別内訳をみると、1990年はキク科5種、イネ科3種、アカザ科2種、ユリ科、ミカン科及び *Ephedra* 科各1種、そしてクマツヅラ科は1998年に1種となっている。一方、2000年代ではイネ科とキク科は2001年に2種、2002年には3種、アカザ科は両年とも2種、ユリ科、ミカン科、*Ephedra* 科は両年とも1種となっている。

上記したように出現草種の科別草種数には調査時期間に差異がみれ、特に2000年代は減少し、とりわけ2001年代は最低となっているが、その該当草種はイネ科の *Cleistogenes soongorica*、キク科の *Artemisia scoparis*、*Ajanía trifida*、*Heteropappus hispidus*、アブラナ科の *Ptilotrichum canescens*、クマツヅラ科の *Caryopteris mongolica* であった。これら草種のうち *Ajanía trifida* を除く草種は本来出現頻度が低く、しかも調査手段としての方形枠が一定の場所に設置されず、調査地点が時期によって異なり、そのため調査記録から逃れ易いこと、さらに2001年は早魃の影響も考えられる。なお、*Ajanía trifida* が2000年代に記録されなかった理由は本調査で明らかにされなかった。

2. SDR' からみた草種間の力関係

各調査時期における SDR' (各草種の SDR₃ の総 SDR₃ に対する比率) の上位から3番目、場合によっては4、5番目までの草種(括弧内は SDR' 値)を列記すると以下のとおりである。

1993年 は *Artemisia frigida* (22.1 %)、*Stipa gobica* (21.7%)、*Allium polyrrhizum* (16.4%) の順となり、以上の3草種の合計 SDR' は60.2%と50%を10ポイント上回り、そのなかで上位2草種の力関係は概ね均衡している。なお、4位の草種 *Ajanía trifida* の SDR' は6.7%と急落している。

一方、1998年には *Allium polyrrhizum* (20.8%)、*Stipa gobica* (15.8 %)、*Ajanía trifida* (12.9 %) の順となり、以上3種類の合計 SDR' は49.5%と50%を極僅差ながら下回り、そのなかで *Allium polyrrhizum* は他の2種類を5～8ポイント上回っている。なお、4、5位の草種はそれぞれ *Ajanía achilleoides* (11.8 %)、*Artemisia frigida* (11.5 %) と続き、その SDR' は3位の草種にかなり近接し、3～5位の草種の力関係は概ね均衡状態となっている。

2001年の場合は *Stipa gobica* (39.3%)、*Artemisia frigida* (20.5 %)、*Ajanía achilleoides* (18.5 %) の順となり、以上3草種の合計 SDR' は78.3%と80%に近接し、そのなかで *Stipa gobica* は著しく突出し、他の2草種の力関係はかなり均衡している。なお、4位の草種 *Ephedra glauca* の SDR' は7.2%となり、5位の草種 *Allium polyrrhizum* は5.2%と続いている。以上の *Allium polyrrhizum* の SDR' は1998年と比べて著しく縮小しているが、それは旱魃の強い影響と考えられる。

一方、2002年には *Allium polyrrhizum* (21.2%)、*Stipa gobica* (16.2%)、*Artemisia frigida* (16.1%) の順となり、以上の3草種の合計 SDR' は53.5%と50%を幾分上回り、そのなかで首位の *Allium polyrrhizum* は他の2草種を5ポイント程度上回り、2、3位の草種の力関係は均衡している。なお、4

位の *Ajanía achilleoides* の SDR' は10.1 %、5位の *Haplophyllum dahuricum* は8.5 %と続き、*Ephedra glauca* 及び *Ceratoides Gagnebin* はともに2.4%と最低となっている。

モンゴル草原における低標高・砂漠性草原帯の主要草種は一般的にイネ科の *Stipa gobica* とユリ科の *Allium polyrrhizum*、キク科の *Artemisia frigida* とされている¹⁾。本調査地においても大半の調査時期で上記3草種が出現しており、ただ、キク科の *Artemisia frigida* と *A. achilleoides* の2草種は1993年と1998年に上記3草種に加わり、同2草種の SDR' は *Artemisia frigida* と比べて1993年は極めて低く、1998年にはほぼ同水準と高く、一方、2001年と2002年には *Ajanía achilleoides* のみ出現し、その SDR' は *Artemisia frigida* と比べて2001年は近接し、2002年には6ポイント下回っている。

上記したように *Stipa gobica*、*Artemisia frigida*、*Allium polyrrhizum* 及び *Ajanía achilleoides* は調査4時期に亘って出現しているが、これら草種の SDR' には年次間差異がみられ、そのなかで *Stipa gobica* と *Artemisia frigida* 草種の調査時期間における高低差は比較的小さく、一方、*Allium polyrrhizum* における高低差は極めて大きく、特に2001年には著しく低水準となっている。

以上の各草種の SDR' にみられた調査時期間の差異は、草丈、冠部被度、出現頻度のいずれかの大きな変化に基づくものである。たとえば1990年代と2000年代の *Stipa gobica* の SDR' をみると、1998年と2002年(以下、1990年代、2000年代の後年次)は1993年と2001年(以下、1990年代、2000年代の前年次)と比べて著しく低下しているが、1990年代の場合は後年次における冠部被度が大幅に小さくなり、2000年代の場合は後年次における冠部枝度が大幅に小さく、出現頻度が減少したためである。また、*Allium polyrrhizum* の SDR' は両年代における後年次の方が高くなっ

ているが、それは1990年代の場合は後年次における冠部被度が著しく大きく、出現頻度が増加したためであり、一方、2000年代の場合は後年次に草丈が著しく伸長し、そのため冠部被度は顕著に大きくなり、しかも出現頻度が非常に増加したためである。

3. 植被率と現存量に及ぼす早魃の影響

調査地植生の植被率は、上記した多雨年の1993年に51.1% (変動係数7.4)、1998年に49.4% (同18.4)、2002年には48.7% (同30.0) となり、その平均は49.7% (同18.3) となっている。以上のように多雨年における被植率には調査時期に差異がみられ、その較差は1.7~2.4ポイントの範囲を時系列的に幾分拡大している。一方、寡雨年の2001年における植被率は37.0% (同14.6) を記録し、多雨年における平均植被率を12.7ポイント下回り、寡雨による早魃の影響は甚大である。

草種の茎葉の伸長と株張りは生育期(4~8月)の気温と降水量に大きく左右され、その結果が植被率に現れていると考えられる。

しかし、本調査において気温と降水量の影響の程度を明らかにすることは出来なかったが、一般的観察として降水量の過少が植被率の大幅な低下に影響しているようである。ちなみに降水量が植被率に及ぼす影響はウムヌゴビ県ボルガン郡における砂漠性草原10か所の調査地においても顕著にみられ、その植被率は多雨年(1990年)に $67.5 \pm 11.4\%$ (変動係数16.9)、寡雨年(1991年) $47.2 \pm 7.0\%$ (同14.8) となり、多雨年の方が 20.3 ± 4.4 ポイント上回っている⁴⁾。

調査地植生の植被率の高低は現存量の多少と不可分の関係にあり、上記調査時期における現存量(1㎡当たり)をみると、多雨年の1993年に生重では54.7g (変動係数25.1)、風乾重は19.1g (同21.5)、1998年に生重では53.4g (同26.2)、風乾重は18.3g (同28.4)、2002年に生重では21.6g (同

31.9)、風乾重は14.7g (同35.4) となり、以上の平均は生重で43.2g (同26.6)、風乾重は17.4g (同27.6) となっている。以上のように多雨年における現存量には調査時期に差異がみられ、その較差は生重では1.3~33.1gの範囲、風乾重では0.8~4.4gの範囲を時系列的に拡大しているが、その較差は風乾重の場合は小さく、特に2002年には著しく縮小している。

一方、寡雨年の2001年における現存量は生重で4.8g (変動係数56.3)、風乾重は2.7g (51.9) となり、多雨年における平均現存量と比べて生重は38.4g、風乾重は14.7g 下回っている。以上の寡雨年における現存量の著しい低下は、早魃により茎葉の伸長が抑制され、しかも表3の冠部被度における弧内数値が示すように枯死部分が増加し、その結果として植被率は著しく低下すると同時に現存量も低下したためである。

上記したように1993~2002年における多雨年の3調査時期において植被率と現存量には時系列的低下の傾向がうかがえるが、それは測定値の変動係数が大きい点からして、調査地における方形枠の設置法と設置か所数など調査方法に起因しているのではないかと推測されるが、一方、1990年以降における家畜の増殖に伴う過放牧や多発する早魃など影響を無視することはできない。

なお、上記したように2001年における寡雨は牧地植生に早魃害をもたらしているが、翌年の生育期は多雨となり、植被率と現存量は回復状態を呈している。また、先に記述したように過去30余年間に寡雨年が多発し、1990年以降は2年に1回の割合で頻発し、その都度早魃害を受けた植生は多雨年に回復している。以上のような牧地植生の回復機能は植物群落のなかで多年性草種の根系が地中に深く、広く発達し、十分に確立されているためと考えられる。

しかし、近年における過放牧の加速化と気候の乾燥化の進行のもとでは牧地植生の根群の活力を

維持向上することは至難の業であると推量される。

IV 要約

ゴビ山岳部放牧地(標高1,600~1,800m)において、4~8月における月積算降水量が85.4~102.3mmの範囲の1993年、1998年及び2002年(以上多雨年)、同降水量31.4mmの2001年(寡雨年)に、草種の開花~結実期に当たる8月中下旬に方形法(コドラート法)による植生調査を実施した。

出現した主要草種は1993年に14種、1998年に15種、2002年に11種、2001年に9種を数え、そのうちキク科は1993年及び1998年に各5種、2002年に3種、2001年に2種、イネ科は1993年、1998年及び2002年に各3種、2001年に2種、そして全調査時期にアカザ科2種、ユリ科1種、ミカン科1種、*Ephedra*科1種、1998年にクマツヅラ科1種となっている。以上の草種のなかで、SDR'(相対積算優占度)、出現頻度、現存量の3点からみた重要草種はイネ科の *Stipa gobica*、キク科の *Artemisia frigida* と *Ajanía sp.*、ユリ科の *Allium polyrrhizum* であった。

調査地植生の植被率は、多雨年の1993年に51.1±3.8%、1998年に49.4±9.1%、2002年に48.7±14.6%、以上の平均は49.7±9.2%となり、一方、寡雨年の2001年は37.0±9.1%となり、多雨年の平均植被率を12.7±0.1ポイント下回っている。

一方、牧地植生の現存量(1m²当たり)の生重と風乾重は、それぞれ1993年に54.7±13.7g、19.1

±4.1g、1998年に53.4±14.0g、18.3±5.2g、2002年に21.6±6.9g、14.7±5.2gとなり、以上の平均は生重で43.2±11.5g、風乾重は17.4±4.8gとなり、2001年にはそれぞれ4.8±2.7g、2.7±1.4gとなり、多雨年の平均現存量と比べて生重は38.4±8.8g、風乾重は14.7±3.4g下回っている。

以上で記述したように寡雨年における旱魃は調査牧地植生の植被率と現存量に甚大な悪影響を与えているが、多雨年には植被率と現存量の回復がみられる。しかし、近年の過放牧化が加速され、気候の乾燥化が年々進行する環境条件下では牧地植生の復元力が後退する懸念を拭い去ることはできない。

謝 辞

調査地植生の時系列的推移に深く関与する気象環境のうち気温と降水量に関する貴重な資料を提供して下さった大阪大学世界言語研究センターの今岡良子先生に深甚なる謝意を表す。

引用文献

- 1) 三秋 尚(2000)「ハンガイとゴビの両地域における牧地の植生について」『モンゴル研究』18号
- 2) 今岡良子(2002)「山羊の増加が砂漠化の原因か?—モンゴル国バヤンホンゴル県の場合—」『第28回日本環境学会予稿』
- 3) 三井計夫監修(1964)『飼料作物・草地ハンドブック』養賢堂
- 4) 三秋 尚(1995)「モンゴルー遊牧の草原(7)」『畜産の研究』Vol.49, No.11

写真1 多雨年における植生調査地の風景



大小の礫が多い場所である。草種の伸びは良く、遠目には緑と黄色に彩られた豊かな草原の眺めである。ダーマイン・ツァガン山麓台地、1998年8月29日。

写真2 寡雨年における植生調査地の風景



比較的礫の少ない場所である。早魃のため草種の伸びは止まり、茎葉の一部は枯れ上がり、しかも夏枯れの株が目立ち、灌木（おもに *Caragan microphylla*）の点在が目立ち、遠目には薄褐色に染まった荒涼とした草原の眺めである。2001年8月26日。

写真3 多雨年における植生の一例



長さ1mの折れ尺(移動中の調査のため仮の方形枠)で囲んだ場所で草種ごとに草丈、被度、地表0.5cm以上の茎葉部の重量を測定する。1998年8月29日。

写真4 寡雨年における植生の一例



干害のため草種の伸びは悪く、しかも株の一部あるいは全部が枯れ上がっている。
2001年8月26日

写真5 寡雨年における植生の夏枯れ状態の一例



Allium plyrrhizum(Таана) の一株(直径は概ね5~20cm程度)から僅か数本の茎葉が伸張し、そのなかには先端部が枯れている。2001年8月26日。

写真6 草種の根茎(根群)の一例



Allium plyrrhizum の夏枯れ株(茎の基部)から発生する地下20cmまでの根群で、多数の太い根が伸びている。なお、20cm以下の部分は切断されている。2001年8月26日。

(みあき たかし)

《追 悼》

磯野富士子先生を偲んで

芝 山 豊

磯野富士子先生のパリからの手紙が手元に数通残っています。最初のもは1975年6月10日の消印で、私たちが送った『モンゴル研究』創刊号2冊のうち1冊をラティモア氏に見せた上でリーズ大学のオノン先生に送ったことや、「大学生のレベルでこれだけのものが出来るのは他の国にはないといってもよいでしょう」というモンゴル研究会へのお褒めのことばなどが記されています。

書き出しに、「去年はじめて皆様とお目にかかってそろそろ1年になります」とあるのは、1974年、磯野先生は大阪外国語大学で集中講義を担当された時のことです。

1974年は、磯野の先生が中公新書の『モンゴル革命』を出版された年です。当時外大の前期課程の学生だった私は、担当の小貫雅男先生に無理を言って、後期課程の講義を聴講させていただきました。

昼休みに食事に出て、学生たちが食べる速さに目を丸くしておられたことをよく覚えています。考えてみると、その頃の富士子先生は、現在の私と同じ年齢だったはずですが、いまの私とは大違いで、上品で華やいだ雰囲気と若々しさをお持ちでした。先生の精神のしなやかさは、その頃のことだけではなく、傘寿を過ぎても変わらず、どなたもおっしゃるように、まるで女学生のようにした。

富士子先生の若さの秘密が知的好奇心にあったということは、衆目の一致するところでしょう。

その好奇心を象徴するものがあります。それは、富士子先生が最後まで手元に置き、飾っておられ

た一枚の絵です。



大きな扉を前にした一人のラマ僧。僧は、いまでもその扉を推し開けようとしています。アジアの歴史に関心を抱く方なら、この彩色された絵には、元になったスケッチがあることにお気きづきになるかも知れません。探検家スヴェン・ヘディンの『チベット遠征』の挿絵、「第五代タシ・ラマ（パンチェン・ラマ）廟の入り口」です。

実は、ヘディンのスケッチには扉を開ける僧の周囲に他に9人の僧が描かれているのですが、彩色画は扉の前の一人だけを描いています。歴史と叡智が詰まった聖なる場所への扉を開く一人の僧。扉の向こうには、どんなものが待っているのでしょうか。清澄な空気と静寂の中に、知的なスリルを感じさせる劇的な場面です。いかにも、知的

好奇心を失うことのない先生が愛された絵だと思うのです。特定の宗教からは常に距離をおいておられた先生ですが、その強い意志の背景には、なにかしら、人間にとっての超越的な存在に対する畏敬の念もあったことをうかがわせます。

その絵は、磯野先生のヨーロッパでの何か大切な思い出と繋がるものであったようです。おそらくストックホルムでのことだと思うのですが、1952年に没したヘディン自身ではなく、ヘディンを直接知る人物で、ヘディンのスケッチをもとに彩色画を描いた高名な画家と偶然出会い、その方から記念に贈られたものというお話だったように記憶しています。

この絵はいま宮脇淳子さんの研究室に飾られています。

何故、そうなったかは、次のような次第です。

2007年の10月、私はモンゴル研究会の今岡良子さんから一通の転送メールを貰いました。ある研究者の方からのメールで、「磯野富士子先生に会ったが、うまく会話が成立しなくなっているの、何か聞くべきことがあれば、お早めに」というような内容だったと思います。驚いて、何度か電話をしましたが、繋がりませんでした。やや時をおいて、ようやく、電話で話せた時、先生はこれからホスピスに移るつもりで用意をしているということを告げられました。心配させまいと、それまで私には、体の不調を隠しておられたようでした。「目白のお家を引きあげられた時のように、お手伝いに行きましょう」と申しあげると、「来なくていい」とおっしゃいます。「手伝いがいらなくても、会いたいから行きますよ」と言うと、「私が会いたくないのよ」とのこと。「何故ですか?」と尋ねると、「だってさ、vanity だと思っけどもさ、見られたくないのよ。」という答え。短い押し問答の中で、綺麗な発音で vanity の語が何度か繰り返され、私はついに面会を諦めました。その時の電話を先生はなかなか切ろうとなさいませんで

した。電話を切るきっかけを作ったのは、お体への悪影響を気にした私の方でした。それが最後の会話になるとは思っていなかったからです。

年が明けて、2008年2月初め、先生が1月5日にご帰天になった旨、ご遺族からお電話をいただきました。その折、件の絵についてお話がありました。

富士子先生は、磯野誠一先生がお倒れになり、ご夫婦揃って、ケア付きマンションにお移りなるため、ご自宅を処分され頃から、蔵書の整理を始めておられました。法律関係のものは東京大学に、モンゴル関係のものは岡田英弘・宮脇淳子ご夫妻の研究室や大阪外国語大学へといった具合に、用途を考えて寄贈されました。最後となった電話の頃、先生の手元には、ほとんど何も残しておられなかったと思います。ホスピスには大きなものは持っていけない。気に入って、手元に残して飾っている絵があるのだが、これをどうしようかとのことだったので、「引き取り手が他になければ、私が貰いますよ」と申し上げました。富士子先生はその時のことを覚えておられて、この絵はオリジナルではないが、捨てずに必ず芝山に渡すように言い残されたそうです。

富士子先生の御遺志で開かれた3月の富士子先生の「偲ぶ会」の後、宮脇さんと一緒にその絵を拝見しました。宮脇さんは一目見て、気に入られて、欲しいとおっしゃったので、必ず飾っていたのなら、とお譲りしました。先生のご厚意を無にしたように思われるかもしれませんが、富士子先生は私にその絵が捨てられないようにしてほしいと願われたのだと思いましたし、宮脇さんのところは、相応しい場所に思えました。私にとって、先生の愛した絵を毎日見て暮らすのは少し辛いことでしたし、手元には、富士子先生への思い出の品は既に十分に残っていました。

「(富士子先生のところから)君のところに来たのは(資料的な価値のない)ガラクタだけでしょ」

とある研究者の方から言われたことがあります。なるほど、その通りかも知れません。でも、ガラクタこそが私の宝物なのです。書籍は誰にとっても価値がありますが、ガラクタは同じ思いを共有する者だけに価値をもつものです。

手元のガラクタは、『オルドス口碑集』の全翻訳原稿とモスタールト神父から贈られたオルドス・モンゴル語の辞書とテキスト。これはどのように使ってもよいというお言葉と一緒にお預かりしました。他にも、『冬のモンゴル』滞在中、肌身離さず持っておられたアヤガ(お椀)のような、ご本人と私以外には全く興味を示さないであろう品もあります。

磯野先生から頂いたものは、そうした目に見えるものだけではありません。先生からグロータス神父へのご紹介がなければ、『南北モンゴルカトリック教会の研究』という本はこの世に存在しなかったでしょうし、なにより、1975年のお手紙の末尾にあったモンゴル思想史研究に対する励ましがなければ、研究者としての現在の自分はなかったと思います。モンゴル研究、とりわけ、文学や思想の研究などを続けても、研究職につくことはおろか、生活していくことさえ困難と思われた時期、富士子先生がおられると思うだけで、「本当の学問」とは何なのかを見失うことなく、頑張るための勇気が湧いて来る気がしました。

富士子先生が60年前に出版された『冬のモンゴル』には、「本当の学問」について書かれた箇所があります。「人間の小さな力をもって自然と人間性の神秘を探るには、全部の研究者が力を合わせても遠く及ばないというのに、その一人一人がお互いの小さな力を「学者の偏屈」や独占欲で切り崩し合っていたら、一体何ができるのだろう。」その節は「私は真の学問の持つ可能性を信じたいと思う。」と結ばれています。

最近の大学教員などは、青臭いと滅多に口にすることのない「本当の学問」ですが、富士子先生が生涯それに忠実であったことは間違いがありません。それは、先生が日本の「制度としての学問」の埒外にあったという表面的なことだけではなく、研究者として、フィールドに向き合う姿勢、そのものでした。

誠一先生とともに西北研究所で研究生活をスタートされた富士子先生ですが、戦後日本の様々な場所で活躍された西北研究所のメンバーとは一線を画するところがありました。「梅棹のタフさと磯野のナイーブさの間に、異文化との出会いの光と闇が交錯している」(海野弘『陰謀と幻想の大アジア』平凡社、2005年)と言われる所以です。先生ご自身は、『冬のモンゴル』を「本物の活仏や王公が機能していた社会」の記録として現在も価値のあるものと考えておられました。その通りですが、モンゴルで参与観察する日本人の立場を考えるために、その書物と富士子先生のその後の生き方がとても重要なものであることを、若い世代の方々に是非知っておいいただきたいと願っています。

しかし、教師の仕事は教師なしで生徒がやっていけるようにすることなので、先生を称えるためには、いつまでも感傷に浸らず、弟子は先生なしでもやっていけることを示さなければなりません。富士子先生が「本当の学問」を目指して、行く手にモスタールト師やキュリー夫人を見たように、私も行く手に磯野富士子先生を見ながら、「真の学問の持つ可能性」を信じていきたいと思います。もっとも、富士子先生がこれを読まれたら、「あなたなんかをシャビ(弟子)にした覚えはないわよ」と、あの素敵な声で、笑われるかも知れません。

(しばやま ゆたか)

《資 料》

インタビュー

磯野富士子先生と『オルドス口碑集』

(2000年12月1日 大阪外国語大学)

2000年12月1日、磯野富士子先生は、ご自身が編集されたデロワ・ホトクトの回想録などの書籍の他、大切にしておられたオーエン・ラティモアゆかりの品々を旧大阪外国大学図書館に寄贈された。その中には、ラティモアが徳王から拝領した品々や、ハズルンドとラティモアの友情の証で、磯野先生が『図書』に書かれたニルギトマ王女とラティモアのパリでの再会のエピソードに登場する飾り鉤も含まれている。これらの品は、現在、大阪大学箕面キャンパス内の大阪大学付属図書館に所蔵され、希望者に公開されている。

同じ日、磯野富士子先生は、大阪外国語大学のリレー講義に、ゲストとして参加して下さった。

以下は、インタビュー形式で行われた講義の録音テープを起こして作成したテキストから、主に、『オルドス口碑集』に関する部分を抜き出したものである。

当日の講義担当で聞き手を務めた芝山の発言は適宜簡略化したが、磯野先生の発言部分は改行、句読点を入れたのみで、改変していない。但し、読者の便宜のため、()内に文意を補う補足情報を入れ、若干の注を付した。

この対談での磯野先生の発言は、一見、すべて既知の情報の繰り返しのように思われるかも知れないが、微妙なニュアンスも含め、先生とその業績を理解するために重要な情報が含まれている。(芝山 豊)

(前略)

芝山 ……では、どうして先生がモンゴルを研究なさるようになったかのお話を。

磯野 全く困ることは、私はモンゴルに縁ができようとは、お嫁にやられるまで全然知らなかった、思いもしなかったんですよ。女学校時代には地理と歴史が、殊に東洋史が嫌いというよりも、もう興味がないというか、関心がなかった。でも日本女子大の附属高等女学校でしたから、勉強しなくてもね、追い出される心配なかったんです。だから、好きなことだけしていれば良かったんで、そして、だから、モンゴルに、主人が結婚して1年半くらいの時に、急に江上波夫先生がうちいらして、長広舌をおふるいになって、先生がお歸りになったら、(主人が)「蒙古に行く」って

言い出したんですよね。それで、私はその頃、蒙古なんてどういう所にあるのか、そう定かではなかったし。まあ、それだから全然自分で選んだ道じゃなかったんです。それで、本当にモンゴルに行っても、家族(論)にしても、みんな潜りなんです、私。正式に免状といふかなんといふか、持っているのは英語、英文学だけなんです。他には何



大阪外国語大学 講義にて

の資格もない。それで、まあ、モンゴルに連れて行かれまして、で、今の方はびっくりなさるかもしれないけれど、その主人が行くって決めた時に、「君どうする？」って聞かれた覚えがないですよ。ね。だから、勝手に決めて……。だから、そして、しかも行くまでに時間が短いし、モンゴル語なんてのは、全然知らなかったし、それでその昔の、あの、今は小沢さんの『モンゴル語4週間』になってますけれども、昔は、精松先生の『蒙古語4週間』というのをまず買って、あれは、4週間にただちぎってあるだけなの。だから、たいしてあんまり、そんなこと（いっちゃいけないけど）。それに引っ越しもしなくちゃ、むしろ行くのに準備しなくちゃならないでしょう。家のこともね。それからその中国というのがあるけど、中国でしょう。それも、その準備もなしにモンゴルに行っちゃったわけなんですよ。勿論、内蒙ですけど。その頃は、今、芝山先生がおっしゃったように、その日本の軍が、アジア、あの頃北の方ですけどね、中国や満州国、蒙古聯合自治政府というのも、日本の、まあ、蒙古自治政府だったけど、結局、日本の軍人たちが行って、そして、傀儡、徳王は、本当は、傀儡になりたくなかったんだけど、他にしかたがなくて、日本と、言うなりに（ではなく）、なるべく内輪に、協力の度をなるべく少なくしようとしていたんだけど、結局、あの孤立無援で……。もちろん、皆さん、「旗」というのご存知でしょ。ホショーね。本当のノヨンね、王侯だの、それから本物のゲゲン、本物っていうか、活仏だの、実際に機能していた時代なんですよ。だからⅢ、ナツァグドルジの、つまり今のモンゴル国のもうシニアな学者たちでも、実際にそういう社会が機能していた時代というのは、よく覚えていないとか、知らないとかっていうので、そういう点で、ある点で、そのモンゴルの昔の社会っていうのを知らない、（知っている）人がもうほとんどいなくなっている時に、まあ、モンゴルのウ

ジムチンという（＊芝山に向かって）ちょっと説明して。

興安嶺のこっち側で、一番あの、そのころの外蒙に接した、あそこが一番古い慣習が残っているというので、行ったのですけど。それで、まあ『冬のモンゴル』（で書いた）みたいに、およそ冒険的じゃなくて、そして寒いのが大嫌いだったのに、ラクダの車で、3晩4日、野宿して、行かなきゃ



『冬のモンゴル』の頃の磯野御夫妻

ならない羽目になっちゃったんです。

（芝山さんが）あの人形のことまで覚えてらっしゃるなら、（人形の）レナを連れて来れば良かったわね。なにしろ、幌つきの……。『冬のモンゴル』に書いてあるから繰り返すことありませんけどですけどね。それで、まあやっと、ウジムチンに着いたけど、そこでお世話になった方は「旗の顧問」っていうと、みんな知らない人は、モンゴルのこと知らない人は、「キノコ？」っていうんですけどね。旗って、ほら、あの昔、説明しなくていい？（＊「大丈夫です」の答）その旗のいろんな所に、みんな日本軍関係の、特務機関といって分かります？（＊「分かるでしょう。」の答）特務機関の人が顧問になって入っていたんですよ。それで、あの蒙軍の、ウジムチンにいたところにも、軍の、蒙軍の顧問として、結局、日本の側か

ら、その正式に(法的にはないけれど)、実質的にはコントロールしていたんですね、その各旗に王侯が、その頃のウジムチンのノヨンはまだ子どもだったけれども、子どもじゃなくても、方々にお目付け役みたいなのがついて、それで監督して、日本の(*一語不明)というか、都合のいいようにやっていたわけなんですね、それで我々も行けたわけなんですね。全体としてビザがどうのこうのという時期じゃなかったけども。

(中略)

芝山 モスタールト神父様のことをお話し下さいますか。

磯野 それはね、モスタールト神父様は、あの始めにモンゴルに行った時に、北京をとっていくわけでしょ。その時に、あれは服部(四郎)先生、江上(波夫)先生か、ともかくそのモスタールト神父様がいらっしゃるといってね、まあ、私はモスタールト先生もオルドスも、全然オルドスなんてどこにあるのかも知らなかったわけだけど、北京で少しおじの所にいた時に、小林さんて、考古学やっていらした方がいらして(小林知生、南山大学名誉教授)、その方がベル・モスタールトの所に連れて行ってくださったの。モスタールト神父様は。

日本の特務機関の中だったと思うんですね、あの方は、かなり有力な方が、そして、こっちのモンゴルとか研究してらした方、トルコが主だったかしら、その方が、関東軍と掛け合って、(モスタールト神父様は)ベルギーの方で、敵国でしょ、ベルギーは。だから他の人が抑留というのか、北京の中の一ヶ所に集められてそこから出られなかったんですよ。それで、モスタールト神父様のことを知っていた方が「スミ」さんて、驚を見られて書いた方、(驚見東観愛知教育大名誉教授、

2008年没)、やっと後で分かったんですけどね、その方が、関東軍の、占領日本軍と交渉して下さって、それで、あの北京のカトリック教会の中の神父様たちのいらっしゃったところの、小さな、8畳もなかったんじゃないかしら、部屋に、そこで研究が続けられるように計らってくれて、それで、我々はもう、モスタールト神父様の所に外から来る人も、別にあんまり邪魔もされないでいかれたんです。

それで、その小林さんという考古学の方が最初に連れて行って下さったんです。我々がこれからモンゴルに行くって言ったらものすごく喜んで下さって、それで(訳書で)ご覧になったかどうか知らないけど、そこで、まるでパンフレットでも渡すようにオルドス辞典ね、フランス語とオルドス語のこんなでかいのよね、それを2冊と、それとオルドス口碑集ってというの、一抱えあるでしょ、あれを下さった。本当、ボンと下さっちゃった。まだ何も始めてないのに。

それでこっちはモンゴル語も何も知らないし、行っちゃったもんですからね。それでフフホトに行ってから、私はモンゴル語をやるために、オルドス口碑集を読んで、訳して、まあ、訳すというよりも、始めは忘れちゃわないように書いていったんですよ。それで、随分モンゴル語の助けに、まあオルドス方言ですからね、ハルハとかなり違うところありましたけれども。またモスタールト神父様は言語学の方が専門でいらっしゃったから、本当の専門は宣教師だったんでしょうけれども、(言語を)研究をしてらしたもんだから、モンゴルのその頃はテープレコーダなんかももちろんない、19世紀の終わり頃から20世紀の始めにかけてオルドスに入っていまして¹⁾、それでその聞いた言葉を、特別な、普通のローマ字じゃなくて、言語学者だから、こう、普通のフォニームね、何ていったっけ、普通の言葉で書けば同じ字に入るところでも、その前後によって多少音が違ってく

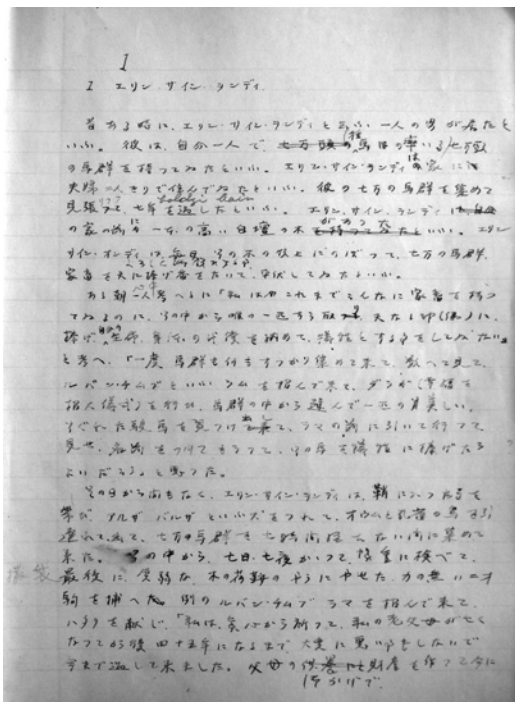
るでしょ。同じ「アー」っていうんでも。それを詳細に分けて書いてあるから、実は、それから字引をお作りになったから、転写の、(方法を)見つけるのを大変だったんですって。それでその字引がオルドス語を転写したのと、フランス語訳なんですよね、訳って。そのオルドス語をフランス語で字引に作ってあるから、私はその頃フランス語は全然知らなかったっていいってもいいくらい。それでオルドス語をオルドス辞典からフランス語を、単語ですからね、引いて、フランス語から仏和を引いて二重でしょ。それで、最初、説話の最初が、エリン サイン オンディ ゲジ ネッグ フン バイサングリ、その一行を、それこそ、蘭学事始じゃないけど二三日かかって、やっと、昔、エリン サイン オンディって人がいたんだと納得するまで二三日はかかって。それは厚和(フフホト)にいる時に始めて、それはその今の飛行機じゃないから、全部でっかいオルドス口碑集も

辞書も全部ウジムチンまで持っていかれたんですよ。厚和でもそれを続けていて、奥でもやって、それで、日本語と似ているから、ある程度ね、わりと終わりになってから速くなったんですけどね。それが私のモンゴル語。だからモンゴル語の学校行ったこともないし、だからあの精松先生の4週間と。

それから、まあ、奥に行ってモンゴルの人達と実に惜しいと思うのはね。

通訳を使ったインタビューっていうのは、我々はあるまり信用しないし、ラティモアも、後で、そりゃまったくそうだと言ってね。ラティモアがフィッシュスキンの・タタル('Fishskin Tatars')ってね、何だ、黒竜江の今の中国のモンゴル地帯の一番北で黒竜江のそばにシャケの皮かなんかで着るものや何かを作っていた部族がいるんですね。そこの調査に、彼は中国語の方が先に(学習)してたから、中国語は(よくできる)。そしてその彼の時代はフィッシュスキンの・タタルの人たちも中国語は分かる、それで中国語でインタビューするとあなたとは話しが通じるって、それで、この間どっかの国の人が来たけど、いいかげん気に入らそうなことを言っておいたよというようなわけだね。それは確かに調査っていうこと分らないじゃない。現地調査っていうものがね、それで警戒するでしょ。一番あれなの、税をとるためじゃないかと。それはもっともなことなんですけどね。それは、後で聞いたんだけど、我々は通訳を通した現地調査っていうのは、(通訳は)あてにならないんで、こっちがモンゴル語ができなくても、ともかくできるだけモンゴル語で。

で、殊に、その頃、日本人がいかなかったことはあっても、その頃、日本語できる人というのはやっぱり大東亜共栄圏的な人だからどんな風に通訳するか分かんないじゃない。それだからもっと長くいられたら、もうちょっとちゃんとした調査ができたんだと思うんですけど。それで結局、半年



『オルドス口碑集』翻訳ノート1頁目

ちょっと、半年ぐらいの間だったから、本当に『冬のモンゴル』なんてものは、あれは調査記録じゃなくて、日記が、幸いそのモスタールト神父様や、グロータス神父様のおかげで、手元に戻ったんですのよね。引き揚げの時は、書いたもの一切持ってっちゃいけなかったから。それで、あの、だから、あれは全然学術的なものじゃないから、そのおつもりで読んでいただきたいんですけど。ただ、まあ、ノヨンだとか、活仏なんかが、どんな風になってやってたかっていう一端はね（お分りになると思う。）お正月は、あれが内蒙古でも昔ながらでやった最後のお正月だったと思うの。

（中略）

芝山 プリティッシュ・カウンスルの奨学生でイギリスに行かれて被爆者の通訳ボランティアみたいのをなさったでしょ、プリティッシュ・カウンスルが反対したにも関わらず・・。

磯野 それ、昨日話したっけ？

芝山 それはみんな知っています。婦人団体との関わりで、女性の問題も重要なのですが、先生のモチーフとしてあるのは家族の問題。古い日本の家族ですね、家族の問題と個人の問題というのは常に関心があって・・・。

磯野 （私は）被害者だったのよね。戦後になって主人の付き合いもあったし、あの結局、私自身が親との考え方がわーんと違って、そのズレが新教育で全国的になったんで、お母さんたちの。それだから、私は、旧家族制度でやりたかったことは、英文学の方だったんだけど、やれなくて、そして、とっ捕まって、お嫁にやられちゃって、それから蒙古へ連れていかれて、それから帰って来たら蒙古というものは何にも問題にならなくなっ

て、でもう行くことができなくなったでしょ、戦後すぐ、あの頃はね。

そしたら家族制度になって、それで家族制度がいかに被害を及ぼしたかということや、親子のズレがどういうものかやっているうちに家族関係論というのになっちゃって、それで女子大で家族関係論、それから社会事業大学ということで、時間講師だけどやっていて、そして、夫婦で共学、夫婦共学というも楽じゃない、どちらかが転業しなきゃならない。主人があの頃、今、筑波になった教育大学で民法やってたから、彼が廃業したら飯の食い上げでしょ。だから、転業するとしたら、私が転業しなきゃならなかった時に、江上（波夫）先生が「モスタールトのあれはどうなりました？」とおっしゃったから、初め、あんな膨大なもの出してくれる人なかったし、「あのまんまになってますって」言ったら、「ペル・モスタールトがお元気なうちに何か出しておいの方がいいじゃないですか」って言って、ほんの一部を、東洋文庫で、平凡社の東洋文庫で出してくれて。

だけど、面白かったのはね、モスタールト神父様のフランス語訳の『オルドス口碑集』の、フランス語訳は全訳が出て、やっぱりあの同じ輔仁大学の方で出ているんですけど、要するに歌ね、ドー（歌謡）だとか、いろんな、なぞなぞとか諺、そういうのね。殊に歌は、ほとんどそのように訳せないのね、フランス語と全然違うでしょ文脈が。ところが日本語はね、かなり近く訳せたんですね、モンゴル語だからね。だからそれだけはフランス語訳よりも元に近いと思うけれど。だから、私は、転業に転業を重ねて、結局、何も虻蜂取らずで、82歳までなっちゃったわけ。

（中略）

磯野 なぜ、ラティモアのところにいたかっていうと、東京外大で坂本是忠さんが学長になった

時に、その歴史とか、何か言語じゃないことをやりに来てくれないかと、時間、非常勤じゃなくて、本当になってくれないかと来たんだけど、ラティモアをもう、決めちゃったものをちょっと見捨てるわけにはいかなかったし²⁾、もうひとつはラティモアの蔵書というものが、方々のヨーロッパの有名な図書館にどれかはあっても、ラティモアの蔵書ほど揃っているのはなかったんですね。それがいつでも自由に使えるでしょ。それで、それが大いに魅力であったし。それで、私は、初めはモンゴルの革命の頃をやるつもりだったんだけど、アンダっていうのは本当に義兄弟かしらと思った、クリエンなんて、ああいう形で遊牧がなりたったのかしらとか、やっぱりね、ちょっと母とうまくいかなかったことからつながっているのかもしれないけど、天邪鬼で、通説になっていることがあって、つい、それ本当かしらと思うと、ひっかかるというかになって、それだって、ラティモアの蔵書が揃っていたから、方々の図書館ね、大きな、主に英国とフランスだけど、一番大きな図書館に行っても、あることはあっても揃ってない。さんざん巡り歩かなきゃならないのが、こう、とれるわけでしょ。すぐそこにあるわけでしょ。それが魅力で、つつい世話に、結局、世話もすることになっちゃって。だからそういったら悪いかもしれないけど、ラティモアってのは、えらい頼りになるしっかりした人だと思ったけど、いかに世話がやけてということが分かって、私、ラティモア知らないほうがよかったかも知れない(笑)

でまあ、ラティモアがあれだし(*亡くなって)、うちもそういうこと(*ご主人の体調を考え、目白のお宅を整理されること)になったんで、家族(の研究)もモンゴル(の研究)も全部放り出して、方々しかるべきところに(それらの資料を)送りつけて、今の所(高齢者用ケア付マンション)へもっていくのは、英文学やなにかで読みたくて読めなかった、英語ばっかしじゃないの、読みたくて読

めなかった本だけ。だからこちらでも、元来、芝山さんのところへ渡して、それだけで帰るつもりだったら、運ぶのに芝山さんがこう東京へ回っていらっしゃるというので、これ幸いとばかりに、来て、もっていただいて、というわけ。まことにご期待に添えません、申し訳ないですけど、そういうちょっと変わってて、何ともかんと説明のしようのないことで、82(歳)にもなりました。

(中略)

芝山 『オールドスロ碑集』のことで、私が非常に印象に残っているのは、先生が全部綴じを剥がしてしまわれて・・・

磯野 剥がしてっていうんじゃないくて、何べんもやっているうちにボロボロになっちゃった。

芝山 ボロボロになっちゃって、それをお布団の・・・

磯野 キレもない時代で戦後でしょ。だからお嫁入りの時の布団だって、もうすでにスフ。まあ、本当の絹や木綿もなかった頃だから、それを貼って布団のように縞が入っているんだよね。いかにも布団布団している。



布団の布で綴じられた『オールドスロ碑集』

芝山 それをお使いになって大学ノートにですね、訳をビシッと書かれているわけです。その大学ノートのほんの一部が今先生お話しになったこの東洋文庫のシリーズの中に納まっているわけですね。だけど、入ってない方が多いわけですね。

磯野 10分の1くらい。

芝山 是非、全部印刷したいと思っているのですけど。

磯野 原稿というのかあの頃もちろんワープロも何もないでしょ、それでボールペンというのが出始めて、ボールペンの古いの、時がたつとにじんじゅうのよね。それでまた、私は稀代の悪筆で、あれは捨てちゃおうかと思って。

芝山 捨てちゃだめです！

磯野 そしたら、芝山さんが文学の方に興味がおありになるというので、それと芝山さんと親しくなったから、「芝山さんならいいや」と思って、送りつけちゃったわけ。

芝山 私がもらって密かに何点かだけ自分が訳したようにして出すこともできますけど・・・。

磯野 構わないわよ。

芝山 そういうことをしては磯野先生の学問に対する教えに反することになりますから。なるべくたくさんの人に知らしめて、共同で先生の原稿を起こして、なんとか出版したいと思っています。

磯野 でもね、あれはちゃんともういっぺんやってないから書きっぱなしだからね、専門家をご覧になると違っているところ、うんと、まあ、

あの仏訳とか一応は(比較検討したん)でしたけれども、本当に捨てちゃおうと思った、寸でのことで。

芝山 危ないところでした。

磯野 これもらってくれる人、送り付けるところなんかないし、ボールペンのは、にじんじゅうて字はメチャクチャだし。

まあ、でもね、あれの『オールドスロ碑集』の、これ(*東洋文庫版を手)に出た時かしら、護雅夫さんが、なんだっけ、「なんとかするほど文句が多い」っていうの書評にね、書いてくださったのよね。何だっけ、知らないほどじゃない、なんとかこういうことを言ったら、そのモンゴルの諺を使って、やりこめられるかも知れないとか。それだから、かなり面白い諺やなんかあるんですよ。わりとこう使ってましたね、あの頃は。

あの、そうか。ボーバクシというボルジギンの後裔の人がウジムチンにいたんですよ。ボーバクシって、みんな言ってましたけどね。そんな人が言ったのは、私は、やっぱり言葉わりと覚えるもんだから、モンゴル人がね、カトン(*高貴な女性へ敬称)なんてのは、それこそね、大変なカトンだと思ったら、我々も日本人で、日本人がいばっていたか知らないけど、私はカトンと呼ばれていたわけよね。それでカトンの方がバクシ(誠一先生)よりもモンゴル語がうまいって言ったからさ、私はそんなこと言っちゃダメよと言ったんだけど、そしたらそのボーバクシが「ウヌン ウグ ソンソート オールラフブル メルゲンフン ビシ」(真実を聞いて、怒るのは識者ではない)って言ったのよね。そういうふうにボーバクシだったからかもしれないけど、その頃はわりと諺みたいなのをちょいちょいと出てくるというか。それから歌のことはね、ファーランガっていう宮廷楽士みたいな人が、楽士って、歌のね、16歳で、お

正月やなんかの時にまあ、ノヨンの所のお祭りで歌うわけでしょ。そして、その人がね、なにしろね、恋歌なのよね、それを教えてもらおうとしたら、ボーバクシが、「カトンにそんな歌教えちゃいけない」って。いかにもボーバクシらしいんですけどね、ひとつ覚えたのは、(*一節を歌う)。つまり、荒地じゃない、山に生えるのは、オーランガザル、だからあの、オイラスンモドって、日本のと同じじゃないのかもしれないけど、柳の木の定め、そして、お嫁にやられてよその土地にやられるのはオヒン・フン、女、娘の定め、オヒン・フンの定めだっていうのは良かったらしいのよね、教えてもらっても怒られなかったから。

だけどころなあんまりごちゃごちゃ転業に転業で、生きてきたもんですから、あんまりお役に立てなくて申し訳ない。ただひとつその一番モンゴルの暮らしの最後の段階を見たということはね、やっぱり、III. ナツアグドルジさんなんか、実際に見たことないところを、実際に見たということは、まあ、ただね、そういう、その、いい加

減なモンゴル語だったから、今思えば、もっとやれたのに、という気が時々するけど。でも、いま、ハーマーグイ(関係ない)と思ちゃう。

(後略)

註

- 1) モスタールト神父のオールドス滞在が1906-1925であることは磯野先生自身が常に見ておられるので、ここでは多分、スクート会の宣教活動全体についてコメントしているものと思われる。
- 2) 磯野富士子先生は日本女子大、東京大学などの非常勤講師を勤めているが、専任の大学教員であったことはない。機会そのものが与えられなかったと解する人もいるようだが、この発言はご本人がそれを望まなかった部分もあったことを示している。尚、坂本忠東京外国語大学学長の任期は昭和50年(1975)からの6年間。

(しばやま ゆたか)

《資 料》

モンゴル語音楽用語小辞典

Монгол-Япон хөгжмийн нэр томъёоны харьцуулсан толь

青 木 隆 紘

序 言

筆者がモンゴル音楽の研究を始めたとき、困ったことの一つは音楽用語の訳出の問題であった。ソ連経由で入ってきた外来の術語がそのまま使われている場合にはよいのだが、モンゴル語に訳された術語を理解するのに普通の辞典ではもちろん歯が立たず、文字通り手探りで読むしかなかった。日本におけるモンゴル語の研究は長い歴史を持つとはいっても、いくつかの分野においてはまだ言葉の壁が立ちだかっているように思う。そこでモンゴル音楽についてモンゴル人自身の書いたものを読むため、この小辞典作成を企図した。

作成に当たっては現在モンゴル国で作曲家として指導的な地位にあり、音楽学者でもある N. ジャンツァンノロブの『音楽理論専門用語小辞典』が非常に役に立った。

実はモンゴル国においてもモンゴル語による音楽用語が広く定着しているとは言い難い。まず第1にスターリン時代、ソ連圏の民族共和国では学術・技術に関する国際的な用語をロシア語から「民族語」に翻訳することをソ連政府は批判していたという。モンゴルも例外ではなかったようで、キリル文字化が決定された時期、学術用語の訳語を作成する動きはストップしている。第2に共産圏の専門的な技術を学ぶ現場ではロシア語が使われていた。モンゴル国内であっても概してロシア人かソ連圏から派遣された技師が技術指導に当たっており、彼らとのコミュニケーション言語は大抵

がロシア語だった。また専門的な技術、高等教育を身につけるためソ連圏の大学に留学するケースが多く、もちろん彼ら留学生はロシア語によってその知識を学んだのであった。

スターリン時代が終わると、モンゴル人民共和国ではそうした専門用語のモンゴル語翻訳語の辞典が再び作られるようになる。音楽用語に関しては1956年、J. バドラーが『音楽用語』というロシア語の音楽用語とモンゴル語の訳語を対応させた小冊子を科学委員会から出版した。バドラーはリンチェンの弟子でもあり民族主義的な思想を持った人物だったと言われる。当時この辞典は『ウネン』紙上で音楽家の Ch. チミッドに批判された。その趣旨は「わざわざ理解しがたい翻訳語を多く作るよりも、外来語をそのまま使った方が便利なお場合も多々ある」ということだった。対してバドラーは「西洋の音楽用語をそのまま使うことへの信仰は、ともすれば西洋中心主義に陥る」との考えで、このことについては後に評価されている。そしてバドラーの提唱した用語は彼以外の書いたいくつか出版物の中にも使われた。しかし音楽教育の現場で定着することはなかったようだ。そもそも音楽の高等教育を修める際も、ソ連圏への留学が主流だったのであって、学位論文もロシア語で書かれることが多かった。現在でもそのため有名な音楽家のいくつかの重要な論文がモンゴル語で読めない状況にある。

1990年代の民主化以降、外来語をモンゴル語に置き換えるべく活動を行う人々が現れた。そういった訳語は日常の会話レベルではまだ耳なじ

みはないが、出版物の中では使用頻度が増えてきている。本辞典の参考に用いた『音楽理論専門用語小辞典』の著者ジャンツァンノロブもその1人である。彼はバドラーに教えを受けた人物であり、上記のロシア語論文がモンゴル語で読めないという問題にも関心を寄せている。ジャンツァンノロブは音楽のモンゴル語術語について積極的に発言し、主に自らの著書の中で率先してそれらの用語を用いている。他の著者の書いたものの中でもモンゴル語の音楽用語の使用頻度は、ロシア経由で入った語と並列されて書かれることが多いが(例: цувраа / арпежио /)、上がってはきている。ただし、現場での会話は外来単語が頻出する。多くの主要な音楽家が社会主義時代にソ連圏で学んでおり、また当時、ロシア人教師が多く派遣されてきていたからだ。しかしモンゴ

ル語の音楽用語の理解の必要性が高まっていることにはかわりはない。

この辞典では上述のジャンツァンノロブ、バドラーの整理した用語を中心に、モンゴル国で用いられている伝統音楽に関する若干の語を加えた。他に数多くある伝統的な用語や、内モンゴルその他のモンゴル人居住地で用いられる語は今回はカバーできなかった。伝統音楽に関わる語や、人物、作品、演奏団体、楽器などに関しては、『モンゴル音楽“事典”』を作成中であり、さらにモンゴル音楽理解の助けとしたい。この小辞典により日本でのモンゴル音楽の研究が少しでも進むことを願ってやまない。最後にモンゴル語部分の校正を快く引き受けて下さった東京外国語大学客員教授J・バトイレードゥイ先生に御礼申し上げます。

凡 例

【略】略語

【器】楽器

【歴】歴史

【響】音響学

【伝】伝統音楽、伝統文化の用語

《露》ロシア語

《西》チベット語

《中》中国語

[] 置き換え可能

例: гигэлгэн [гунил] аяз は гигэлгэн аяз または гунил аяз の意。

～ 用例・準見出しの中の語の全部、または一部に変えて用いる。

→ 参照すべきものを示す

A

аажуу アダージョ (速度記号)

аажуухан アンダンテ

авад зохиомж 即興演奏；即興曲；インプロビゼーション

авиа 音；声

～ дэвсгэрлэх арга 音響学

～ зүй 音声学

айзам 小節；拍子

дутмаг ～ 不完全小節

нийлмэл ～ 複合拍子

таван хувийн ～ 5拍子

угтвар ～ 上拍；アップ・ビート；アウフタクト；
オフ・ビート（ジャズ）；弱起

холимог ～ 混合拍子；特殊拍子；変拍子

алгуур ラルゴ

алтан тэнхлэг 黄金比；黄金分割

аман хуур：【器】

1、ハーモニカ；ブルース・ハープ

2、アマン・ホール；口琴；ジュース・ハープ
→ хэл хуур

анги 楽章

нэгдүгээр ～ 第1楽章

анхдагч өргөлт (詩における) 強弱格

аравац 10度音程

аравлал 10連譜

арвал 十重奏；デクテット

арван гурвац 13度音程

арван зургаат эгшиг 十六分音符

арван нэгц 11度音程

арван хоёрц 12度音程

арван хоёрын журам 十二音技法

арван хоёр эгшиглэн 半音階主義

арван хоёр эгшигт 半音階の～；半音階的な

～ ийн бүтэн шат 全音階的半音

～ ийн журам 半音階システム

～ ийн хагас шат 半音階的半音【歴】

～ ийн цуваа 半音階的音階；クロマティック・
スケール

арга эгшиг 長調(J.バドラーの用語)

аргил バス；バス声部；低音

～ ын түлхүүр バス記号；へ音記号；低音部記号

ерөнхий ～ 通奏低音；バス・コンティヌオ；
ゲネラル・バス

тоо бичигт ～ 数字付き低音

ардын аман зохиол フォークロア；民間口承文芸

ардын дуу 民謡

ардын хөгжим 民俗音楽、民俗楽器

～ ийн билиг 音楽民族学

～ ийн билиг зүй フォークロア研究(における音
楽分野研究)

ари (オペラの)アリア《露》→ үглэл дуу

ахмад хийл 【器】コントラバス

ая：

1、曲全体のメロディー；旋律

2、(口語で)曲

～ зүй 旋律学；旋律的特徴

аяархан (音量の)ピアノ；弱く

аяг 動機；モチーフ

оноот ～ ライト・モチーフ；示導動機

аяж 民族音楽における典型的な旋律的言い回し。広義にはあらゆる旋律的言い回し、抑揚を指す。古代ロシア歌唱芸術における、反復される独特な旋律的・リズム的節回しを指す попевка《露》の訳語。

аяз 小曲；ピース

аялга イントネーション；抑揚

аялгас メロス。歌、旋律の要素。音楽における旋律の本質。

аялгуу 旋律；メロディー；音調；調子

～ ны байрлал 旋律的配置

～ ны нугалаа 旋律装飾

- ～ ны оргил 旋律の頂点
- ～ т жүжиг メロドラマ；付随音楽のついた劇
- ～ т хөг-эгшиглэгээ 旋律的調性

аялгуучилсан бага хөг 旋律的短音階

аялгуучилсан их хөг 旋律的長音階

Б

бага хөг 短調；短音階

- ～ ийн гурвал эгшиг 短三和音
- ～ ийн долооц хам эгшиг 短7の和音
- ～ ийн цуваа 短音階
- ～ ийн эгшиглэгээ 短調の旋律・旋法
- язгуурын ～ 自然的短音階

багасгал 減～；ディミニッシュ

багасгасан гурвал эгшиг 減三和音

багасгасан долооц хам эгшиг 減7の和音

багасгасан зай 減音程

багц ターン、回音

багцлал ターンの配置

бадагт 番；一筋（詩詞の一節）

- ～ хэлбэр リート [歌曲] 形式

бадрангуй アパッショナート

бадрангуй арга ロマン主義

байгууламж 1、音律；調律法

2、ピッチ；音程

балалайк【器】バラライカ《露》

баргил バリトン(の)

- ～ бүрээ【器】バリトン(サクソルン族の金管楽器)

- ～ хоолой バリトン(声部)；男性の声域

барилжуулга 様式化

бартокийн тэнхлэгийн журам バルトークの黄金
比作曲法

баян хуур【器】ロシア式クロマティック・アコー
ディオン

баясуулах хөгжим ディヴェルティスメント；喜遊
曲

биба【器】琵琶(pipa)

билиг эгшиг 短調(J. バドラーの用語)

бичил ちっぽけな；微小な

～ зай 微分音程

～ шатны журам 微分音階システム；四分音階

бишгүүр【器】ビシゲール。現在はチャルメラ様の
楽器を指す。元は横笛の意味であったがそち
らは лимбэ の語に取って代わられた。

ардын [монгол] ～ アルディーン [モンゴル]・ビ
シゲール。演奏の表現力を広げるためシング
ルリードに改良されたビシゲール。

баяжуулсан [баялаг] ～ バヤジョールサン [バヤ
ラグ]・ビシゲール；キー付チャルメラ。チベッ
ト仏教寺院で用いられていたビシゲール(チ
ベット語ではギャリン (rgya gling))を改良した
もの。

их ～ イフ・ビシゲール。ファゴット型の改良ビ
シゲール。

богино дуу【伝】ボギン・ドー。モンゴル民謡の一
形式。拍節的なリズムで歌われる。馬頭琴や
ヨーチン、器楽合奏が伴奏することがある。

бодрол дуу (オペラなどの) アリア；(ари)

боловсруулалт (楽曲の) 展開部

босоо 縦の；垂直線；垂直音程

～ чиглэлийн идэвхт харалдаа зохиомж 垂直的
展開対位法

босоо ятга【器】豎琴；ハープ

бөгтөр жимбүүр【器】イングリッシュ・ホルン；コー
ラングレ

бөлөг 部；幕。нэгдүгээр ～ 第1幕

бөмбөр【器】小太鼓；スネア・ドラム；サイド・ド
ラム

(бүрээний) бугалга (金管楽器などの) 朝顔；ベル

бурзан【器】(管楽器の) マウスピース

бүдүүн (音、声が) 低い

～ дуу 低い声 [音]

бүжиг 踊り

бүжгийн хөгжим 舞踊音楽

бүжгэн жүжиг 舞踊劇；バレエ

бүлүүр (金管楽器の) ピストン

бүлэг 幕 нэгдүгээр ～ 第一幕

бүрдмэл зай 複合音程

бүрэн нугалбар 全休止

бүрээ【器】ラッパ

бүтэн шат 全音；全音程

～ ат эгшиглэгээ 全音音階による旋法

～ ат эгшигийн цуваа 全音音階

бүтэн эгшиг 全音符

бүтэн зогсоц 全休符

бүтээл 作品

бүүвэй Брунвей. 子供をあやす時にかける言葉。

(бумбалаа, бүү-ай)

～ н дуу 子守唄

бүхэл задалгаа 総合分析；全体分析

бэлгэдэх арга シンボリズム；象徴主義

бэнсэн үлгэр【伝】ベンセン・ウリゲル《中》。『三国志』や『西遊記』などの翻訳物を、台本を見ながら、四胡や馬頭琴に合わせて弾き語る。

бэсрэг зөрчилт хэлбэр ソナチネ

бэсрэг хөөцөл Фгетта；小フーガ

бэсрэг яруу зохиол 小交響曲；シンフォニエッタ

бялар：【器】

1、ビャラル；哨呐

2、クラリネット

аргил ～ бас・クラリネット

эрдүү ～ Басетт・ホルン

B

вальс Вальс；円舞曲《露》→эргэнцэх бүжиг

венийн сонгодог дэг Виен楽派

венийн шинэ дэг 新ウィーン楽派

Г

галбир 音型；フィギュア

галбиршил フィギュレーション

гажил (声部の) 対斜

ганц эгшиглэн Моноフォニー；単旋律

гигэлгэн [гунил] аязエレジー；悲歌

гитар【器】ギター《露》

гишгүүр【器】(ピアノなどの) ペダル

солгой ～ ソフト・ペダル

гишгүүрдэл ペダリング；ペダル用法

гол хөг-эгшиглэгээ 主調

гол хувь 第1主題；主要楽節

гоцлол ソロ；独奏

гоцлооч 独奏(唱)者；ソリスト

гоцолбор 協奏曲；コンチェルト →concert

төгөлдөр хуур, симфони найрал хөгжимд
зориулсан ～ ピアノとオーケストラのための
協奏曲

гулсаа グリッサンド

гуравлал 3連符

гуравц 3度

бага хөгийн ～ 短3度

гурамсан 三重の

～ харалдаа зохиомж 三重対位法

～ хөөцөл 三重フーガ

гурвал Трио、三重奏曲

～ эгшиг 3度音程；3度の和音

гурван хэсэгт хэлбэр 三部形式

бэрх ～ 複合三部形式

гурван шат 三全音；トライトーン

гурвац 3度

～, дөрвөц хам эгшиг 七の和音の第2転回形；
三四の和音

～ ын эгшиг 第3度音

гучин хоёрт эгшиг 三十二分音符

гэрэлтэх хөгжим 光と音楽とのコラボレーションに

よる芸術のこと。

Д

давалгаалах хөдөлгөөн 波状の動き

давтаал リフレイン

давтал (音楽形式における) 再現部

тонгоруу ∼ 鏡像反復

даван тонших (楽句を) 繰り返す

давтах бөлөг (ソナタ形式の) 反復；繰り返し

давтах дахил オスティナート；執拗反復

давтлага リハーサル；稽古

давхарлах [хослох] 重複する

давхац хөг【響】上音；部分音

дагал カノン

хос ∼ 二重カノン

цаглашгүй ∼ 無限カノン

дагнамал төрх モノディ；モノディ様式

дагнамал эгшиглэн 単旋律曲；モノディ (レチター
ル・カンタンド様式の独唱または少人数の重
唱歌曲)

дагшаа жүжиг ミュージカル

дагшаа жүжиглэн バラエティショー、寄席演芸

дагшаа үзүүлбэр ミュージック・ホール (娯楽場)

дайвар хоолой 第2声部

далд хоолой 隠伏声部

дамар【器】ダマル。胴が人間の頭蓋骨でできた小
太鼓。チベット仏教寺院で用いる。

дан сэдвийн журам 単一主題；単一主題法

дан хөгжим 器楽；特に器楽独奏のこと

дарамж【器】クラヴィーア

дарал(т)【器】(木管楽器の) キー；鍵；(金管楽器の)
ヴァルヴ

даруул【器】鍵盤

дахихын тэмдэг リピート；反復；反復記号

до эгшиг ドの音

догол хэмнэл シンコペーション

долоол 七重奏

долооллол 7 連符

долоон эгшигт 全音階；ダイアトニック

∼ ийн бүтэн шат 七音音階の全音

∼ ийн журам 全音階主義

∼ ийн зай 7 音程

∼ ийн хагас шат 7 音音階の半音

∼ ийн цуваа ダイアトニックの音階

∼ ийн эгнээ ダイアトニックのスケール

долооц 7 度

∼ хам эгшиг 7 度の和音

их ∼ хам эгшиг 長7の和音

долуул 七重奏

доод ахмад наймц 下2点音

доошлуулга ♭ (フラット)

∼ т хөг-эгшиглэгээ フラット系の調性

хос ∼ ダブルフラット

дохио [дуудлага] ファンファーレ

дөлгөн аяз [дуу] 舟歌；バルカローレ

дөлгөн бүжиг ガヴォット (古典舞曲)；ガボット

дөлгөөвтөр бүжиг ポレロ

демөлзөх бүжиг ファランドール (фарандол)

дөрвөн өрөг тетраコード (4 音セット)

дээд ∼ 上方の тетраコード

дөрвөн чихтэй [утагст] хуур【器】四胡

дөрвүүл 四重奏、カルテット

дөрвлөл 4 連符

дөрвөт эгшиг 四分音符

дөрөмсөн харалдаа зохиомж 四重対位法

дөрвөц 4 度

дөрвөц, зургаац хам эгшиг 三和音の第2 転回形；
四六の和音

дунд хоолой 中声部

дундад эртний эгшиглэгээ 中世旋法

дундаж өрөг 中音

дээд ∼ 上中音 (音階の第3 音)

дурдхал хөгжим レミニサンス

дуржигнуулга トレモロ

дуу 歌；声；音

～ чин 歌手

～ бичлэг 録音

～ бүдүүрэх 音程を下げる

～ хөгжим (歌と器楽を含む) 音楽

～ хураагуур 録音機；テープレコーダー

нийтийн ～ 歌謡曲；大衆歌

хүүхдийн ～ 童謡

дуударам【器】ドーダラム；九音鑼；雲鑼 (打楽器)

дуулаач 声楽家

дуулал 声楽作品；賛歌。時に合唱、カンタータなど大規模形式のものを含む。

төрийн ～ 国歌

ялгуусан ～ オラトリオ

дууламж 歌唱法

дуулах 歌う

～ хөгжим 声楽

～ хөгжимдөх урлаг 音楽芸術

дуулбар ヴォカリーズ；母音唱法

дуулдахуй 音響学；音響効果

барилгын ～ 建築音響学

дуульバラード；譚詩

дуураймал хөгжим ミュージック・コンクレート

дууриал 模倣

дуурь オペラ；歌劇

дуурийн бүтээл オペラ (作品)

～ ийн театр 歌劇場；オペラ劇場

дуулин ～ バラード・オペラ

их ～ Гранд・オペラ

наргиант ～ オペレッタ；喜歌劇

төлөв ～ オペラ・セリア

уянгын ～ 叙情オペラ

хошин ～ コミック・オペラ

шог ～ オペラ・ブッフア

дуусгавар：

1、カデンツァ

2、エピローグ

～ хөгжим ポストリユード；後奏曲

бүрэн төгс ～ 完全終止

бүрэн төгс бус ～ 不完全終止

дутуу ～ 中間カデンツァ

дэвсгэр хөг (J. バドラーの用語) 調性；調；キー

дэвхрэх бүжиг ゴバック；ゴパーク (гопак)

дэвхчих бүжиг Салтаレロ (сальтарелла)

дэг 学派；楽派

венийн сонгодог ～ ウィーン楽派

венийн шинэ ～ 新ウィーン楽派

дэд гурвал эгшгүүд 副三和音

дэд сэдэв 副主題

дэд хөг-эгшиглэгээ 副次調

дэд хувь (ソナタ形式の) 第2主題

дэд эгшиг 補助音；刺繍音 (非和声音の一つ)；隣接音

дээшилсэн өрөг 上への移調

дээшлүүлэг シャープ；#；嬰

～ т хөг-эгшиглэгээ シャープ系の調

хос ～ ダブルシャープ

E

ерөөл ヨロール；祝詞。他の人物や事物の将来について幸多かれと祝福する内容の韻文の口承文芸。ほとんど無伴奏で語られる。

есүүл 九重奏

есц 9度

еслөл 9連符

Ё

ёочин【器】ヨーチン；洋琴《中》

Ж

жаран дөрвөт эгшиг 六十四分音符
 жигд хөдөлгөөн よどみない流麗な動き
 жигдрүүлэг 音律
 жигдэлсэн хөг 平均律
 жимбүүр【器】オーボエ (гобой)
 жингэнэх бүжиг ジーグ (古典舞曲) (жиг)
 жиргүүлэг トリル
 жиргээ モルデント
 жүжиг 劇
 жүжгийн хөгжим 劇音楽
 аялгуут ～ メロドラマ；付随音楽のついた劇
 жүжиглэн 劇場
 ～ гийн хөгжим 劇場音楽

3

зааглац аяз 間奏曲；インテルメッツォ
 заал ホール；大部屋
 завсар хөгжим 幕間音楽
 завсарлага 幕間
 завсарын эгшиг 経過音
 загвар セリー (十二音技法、または全面的セリー主義における)
 загварчлал 十二音技法、または全面的セリー主義 (トータル・セリー) における、音高、音のパラメーター (音価、強度、音色) のセリー化。
 загварчлах арга セリー技法
 загварчлах хөгжим セリー音楽
 зай 音程
 ～ н өргийн хэмжээ 音程の各音の幅
 бичил ～ 微分音程
 ихэсгэсэн ～ 増音程
 займрал 一時的転調
 зогсолтгүй Атакка
 зогсоц 休止；パウゼ
 ерөнхий ～ Генерал・パウゼ；総休止

наймт ～ 8分休符
 хий ～ ルフトパウゼ
 зоргоороо アドリブ
 зохиол 作品
 ～ ын дуу (民謡に対して、新しく作曲された) 歌謡曲
 хөгжмийн ～ ч 作曲家
 зохиомж 作曲；作曲科
 зохирол 和声；ハーモニー
 ～ -галбиршил 和声のフィギュレーション
 ～ ын бага хөг 和声的短音階
 ～ ын задалгаа 和声分析
 ～ үйлдэл 和声機能
 ～ хөгжил 和声進行
 ～ хөг-эгшиглэгээ 機能 и声
 ～ эвдрэл 不協和音
 нийлэл ～ ポリハーモニー
 оноот ～ 示導和音
 зохирол эрэмбэ スケール；音階 (J. パドラーの用語)
 зохиролжуулга 和声付け
 зохицуулга 編曲；トランスクリプション
 зөвшөөл 解決
 зөрөл эгшиглэн ヘテロフォニー
 зөрчилт ソナタ
 ～ хөгжим ソナタ；奏鳴曲
 ～ хэлбэр ソナタ形式
 ～ хэлбэрийн журам Алегро・ソナタ楽章
 ～ цуврал хэлбэр 循環ソナタ形式
 бэсрэг ～ ソナチネ (形式)
 зургаалал 6連符
 зургаан өрөг ヘキサコード；六音音階
 зургаац 6度
 зургаац хам эгшиг 三和音の第1 転回形；六の和音
 зургуул 六重奏
 зуу хэнгэрэг【器】タンバリン
 зууван 符頭；(音符の) たま

зэмсэг 楽器 хөгжмийн ～ 楽器

хөгжмийн зэмсгийг сэргээн үйлдэх 楽器を復元
する

хөгжмийн зэмсгийн ай 楽器分類

зэмсэг судлал 器楽研究

зэрэг дуурьсал 合音

зэрэгцүүлэх арга 平行法

И

идэвхт харалдаа зохиомж 転回対位法

ижил эгшиглэн ユニゾン

инцдүүр【器】カスタネット

их, бага хөг 長短調

～ ийн гол гурвал эгшгүүд 長短調の主三和音

их бүрээ : 【器】

1、チューバ

2、チベット仏教の長大な金管楽器ダウン・チェン (Dhung Chen) のこと。もしくはそれを改良した楽器。(үхэр бүрээ)

их хаалт 大コーダ

их хөг 長調

～ ийн бага долооц хам эгшиг 長7の和音

～ ийн гурвал эгшиг 長3和音

～ ийн эгшиглэгээ 長調の旋法

язгуурын ～ 自然的長音階

их цагариг бүрээ【器】ヘリコン(低音金管楽器)

ихэл【器】イケル。西モンゴルで用いられる2弦の擦弦楽器。(икил)

ихэсгэл 増～

ихэсгэсэн гурвал эгшиг 増3和音; オーギュメント・トライアド

ихэсгэсэн эгшиглэгээ 増音階

иш【器】(弦楽器の)指板; 棹; ネック

К

киноны хөгжим 映画音楽

концерт : 《露》

1、協奏曲 → гоцолбор

2、演奏会 → тоглолт

Л

ла – ла эгшиг ля ラの音、イ音

лимбэ【器】リムベ; 横笛《西》。現在は大小2種あり、銅、プラスチック製のものが使われる。

М

магтаал :

1、【伝】マクタール; 讃歌。対象の事物、人の現在の状況を讃える内容を持ち、無伴奏または馬頭琴などの伴奏つきで語られる。

2、頌歌; オード

магтуу カンタータ; 讃歌。大規模な形式と編成をもつ声楽作品。

мазур бүжиг マズルカ

малчны аялгуу パストラーレ; 牧歌

марш マーチ; 行進曲《露》

ми

～ эгшиг ミの音

модон үлээвэр хөгжим【器】木管楽器

морин хийл【器】チェロ

морин хуур【器】モリン・ホール; 馬頭琴。この語は1950年代に定着したものでそれ以前は морин толгойн хуур、хил хуур、単に хуур など地域と時代によって名は様々である。

мөрдвөр シナリオ

мөрөөсөл аяз ノクターン; 夜想曲

мөчлөг ピリオド; 終止; 楽段

мөшгөл Зекエンツ; 反復進行; 聖歌の続唱

шилжүүлгэт ～ 転調を伴う反復進行

мундштук【器】マウスピース《露》→ бурзан

мэргэжлийн хөгжим 専門の教育を受けたプロ
フェッショナルな音楽家による音楽
～чин 専門教育を受けたプロフェッショナルな
音楽家

Н

найгалзах бүжиг ファンダンゴ (фанданго)
наймт эгшиг 八分音符
наймуул 八重奏
наймц Оクターヴ
～ын журам Оクターヴ・システム
бага ～片仮名オクターヴ
их ～平仮名オクターヴ
хоёрдугаар ～
найраглал 詩；詩曲
найрал дуу 合唱
～шинжлэл 合唱指導
～ны багш 合唱指導者；合唱指揮者
дан ～アカベラ合唱；無伴奏合唱
нэг төрлийн ～同声合唱
хос ～複合唱
найрал хөгжим【器】オーケストラ、管弦楽団、大
規模な器楽合奏
дагшаа ～ポップス・オーケストラ
симфони ～交響楽団；管弦楽団
үлээвэр ～吹奏楽団
үндэсний ～民族楽器オーケストラ
цэргийн ～軍楽隊
чавхдаст ～弦楽オーケストラ
яруу ～交響楽団；管弦楽団
найралжуулга オーケストレーション
найраллаг 合唱団
найраллагын багш 合唱団指導者
найруу эгшиг 和音；コード (J. バドラーの用語)
найруулах 編曲する；アレンジする
найруулга 編曲；アレンジ

намсгал ディミネンド
намсгуур【器】弱音器、ミュート
нар угтах дуу アルボラーダ
наргиант дуурь 喜歌劇、オペレッタ
нарийн (音、声が) 高い【俗】
～дуу 高い声 [音]
нарийн бүрээ【器】トランペット (труба)
аргил ～バス・トランペット
өчүүхэн ～ピッコロ・トランペット
нахилах бүжиг アダージョ (楽曲)。速度記号とし
てのアダージョは →аажуу
нийлмэл 複合
～төлөр 複合ジャンル
～холимог хэм хэмжээ 混合拍
～хэм хэмжээ 複合拍
нийлэл баймж ポリモーダル
нийлэл найруулга зүй 多様式主義 (シュニトケの
用語)
нийлэл үйлдэл 多声機能
нийлэл эгшиглэн ポリフォニー；多声音楽
～гийн гурван хэсэгт хэлбэр 多声三部形式
～гийн хоёр хэсэгт хэлбэр 多声2部形式
～т хувилбар 多声変奏
～т хэлбэр 多声形式
нийт даруул【器】鍵盤、キーボード
нийцтэй зай 協和音程
номын сан 楽譜ライブラリー；図書館
ноот [нот] 楽譜；音符《露》
нохилох бүжиг アルマンド (舞曲)
нугалбар 終止法
дашрам ～アーメン終止；変格終止
магад ～正格終止
тасарсан ～中断されたカデンツァ (終止形)
нум【器】(弦楽器の) 弓
～т (хөгжмийн) зэмсэг 擦弦楽器；弓奏楽器
нүсэр бүжиг パッサカリア (パッサカль)
нэгц зай 1 度

нэмэлт шугам 加線
 нэхэгч リスボスタ
 нягт байршил 密集配置

О

огторгуйлиг хөгжим 空間音楽
 огцом スタッカート
 олон хоолой 多声法；多声性
 олуул дуу Моететт；经文歌
 оноот эгшиглээ 示導音色
 оргил [туйл] クライマックス
 оройлго эгшиглэн ホモフォニー
 ～ хэлбэр ホモフォニー形式
 ～ т хэв ホモフォニックなテクスチュア
 орхиц 音符の旗；符鉤
 оруулга аяз インターリユード、間奏曲
 оруулгын долооц хам эгшиг 短七の和音をもつ長
 音階において、2度と7度上の七和音を指す呼
 び方。ハ長調の7度上の h-d-f-a、2度上の d-f-
 as-c、イ短調2度上の h-d-f-a など。
 оршил プロローグ、序奏
 оршихуй ая 定旋律；カントウス・フィルムス

Ө

өгсөх давхцал 上音；部分音【響】
 өгсөх хөдөлгөөн 上行動
 өгүүлбэр 大楽節
 өлмий 韻脚（詩の韻律）
 өмнөх аяз Интродакшн；イントロ；導入部；
 序奏
 өнгө 音色
 ～ сонсол 音色聴覚
 өөлэй аргил Октавист；バスの1オクターブ
 下の音を重ねることが出来る声楽家、その声部
 өргөлт アクセント

өрнөмж ドラマトウルギー；作劇法
 өрөг（音程の）度
 ～ ижилсүүлэг 音程移動
 гоц ～ 主音；トニック；（和音の）根音；キー・ノー
 ト
 гурван ～ 3度
 доод зонхилох ～ サブドミナント；下属音
 доод зонхилох өргийн хүрээ 下属音領域
 зонхилох ～ ドミナント；属音
 зэрэгцээ ～ 隣接音程
 үүсмэл ～ 微分音（の度）
 өөрчилсхийх アゴーギク（をかける）
 өхөөрдөл дуу マドリガル
 өчил モノローグ

П

пянз レコード《中》
 ～ дуурьсгуур レコードプレイヤー

Р

ре
 ～ эгшиг レの音

С

саад 掛留
 хос ～ 二重掛留
 сайн дурын Амаച്ചуаの
 сакс бүрээ【器】サククス；サクソフォン
 баргил ～ バリトンサククス
 тунгалаг ～ ソプラノサククス
 цээл ～ テナーサククス
 эрдүү ～ アルトサククス
 салбарлага ディヴィジ
 санааны зохиомж インヴェンション、即興、即興曲

си

～ эгшиг シの音

симфони 交響曲《露》

～ найраглал 交響詩

～ найрал хөгжим 交響楽団；管弦楽団 → яруу
найрал хөгжим

сол

～ эгшиг ソの音

сонгодог 古典の

～ арга 古典派、古典主義

дэлхийн ～ хөгжим クラシック音楽

сонихон аяз アラベスク

соноор сонсол 絶対音感

сонооршуулга ソルフェージュ

сонсогч 聴衆

сонсол 聴覚；音感

～ бичиг 聴音書き取り

судалбар аяз エチュード；練習曲

сургууль 学校、練習

суурь эгшиг ドローン

сурталчлах хөгжим 宣伝音楽

сүүл コーダ

сэдэв 主題；テーマ

～ боловсруулал 主題労作

сэдвийн цөм 核主題

сэжмээс ダル・セーニョ

сэлгээ 可変の

～ хэм хэмжээ 変拍子

～ эгшиглэгээ 可變的旋法

зэргэд ～ эгшиглэгээ 平行可變的旋法

сэтгэл дүрслэх арга 印象主義

Т

таван өрөг Пентаコード

таван хувьт хэмжээ 5 拍子系

таван эгшигт Пентаトニック

тавил 展開部

тавлал 5 連符

тавуул 五重奏

тавц 5 度

～, зургаац хам эгшиг 5 度、6 度の和音

～ ын хүрд 5 度圈

тайлал 解釈

такт 小節《露》

тарантогийн бүжиг Тарантелла (イタリア舞曲)

тасалбар チケット；切符。→ билет

тасалдангуй хэмнэл 付点リズム

татлага【器】(弦楽器の弓の) ボウイング；ストロー
ク

татах бүрээ【器】トロンボーン

аргил ～ бас・トロンボーン

эрдүү ～ アルト・トロンボーン

татуурга：

1、舞台の袖

2、【器】チューニング・スライド；(トロンボーンなどの) 変調迂回管；U 字管

тахилгын хөгжим 礼拝音楽

товчлох /хасах/ 省略する

～ тэмдэг 省略記号

товшил ピツィカート

товшуур【器】トブショール。2 弦の發弦楽器。西
モンゴルで用いられる。

товшлох бүжиг メヌエット

товшчих бүжиг ポルカ (полька)

тоглолт コンサート；演奏会

～ ын танхим コンサートホール

тогосны бүжиг パヴァーヌ

тогтвор 協和

～ гүй зай 不協和音程

～ той зай 協和音程

тогтворжил 協和

тогтворшилгүй 不協和

тогшил トッカータ

тод дуудлага アーティキュレーション

тойго トイグ。実の母ではない家畜に子家畜の面倒
を見させるときなど、家畜をなだめる時にか
ける掛け声。

тойгын дуу 子取らせ歌

тойронцол ロンド；輪舞曲

～ зөрчилт хэлбэр ロンドソナタ形式

тоон журам 数字譜システム

тохиолдлын арга [тоглоомын аяс] 偶然性；アレ
アトリー

төгөлдөр хуур【器】ピアノ

～ ын гурвал ピアノ三重奏

～ ын даруул ピアノの鍵盤

～ ын тавал ピアノ五重奏

～ ын хоршил ピアノデュオ

төгсгөл Фиナーレ；最終楽章；終曲

～ хувь 結尾部

～ гүй ая 無限旋律

～ гүй дагал 無限カノン

төлөв хөгжим セリー音楽

төмөр хуур【器】トゥムル・ホール；鉄製の口琴

(улсын) төрийн дуулал 国歌

төрлийн зэрэг 第1次の近親関係にある調

төрх 様式；構造；書法

төсөрхөн аяз バガテル

тунгалаг хоолой ソプラノ；ソプラノ声部

царуу ～ ドラマティック・ソプラノ

туршилтын хөгжим 実験音楽

тусгаар хэсэг Эпизод；挿入句

туслах эгшиг 補助音

тууллгиг 狂詩曲；狂想曲；ラプソディ

тууль【伝】叙事詩

баатарлаг ～ 英雄叙事詩

тухайлбар 楽句；小楽節；フレーズ

тухайлал フレージング；楽句区切り法

тушаас 連鉤

түлхүүр 音部記号

～ ийн тэмдэг 音部記号

түрлэг リフレイン；(歌の)繰り返し

түрүүлэгч эгшиг 逸音

тэвх【器】(弦楽器の)駒

тэгш жигдэлсэн эгшгийн эгнээ 平均律音階

тэгш хамт эгшиглэгээ 対称性を内包する旋法

тэд [дэх, дах] リピート；反復

тэмүүлэл 愛着

У

угалз бүрээ【器】ホルン；フレンチホルン

удирдаач 指揮者

удирдахуй 指揮法

～ н ухаан 指揮法

удирдбар スコア；総譜 (楽譜)

～ унших スコア・リーディングをする

～ ын хувь パート；声部

～ ын хураангуй ショート・スコア

удиртгал 序曲

ул эгшиглэн Олгерлункт

уламжлал 伝統

～ т (19世紀～20世紀初頭からの) 伝統的な

уншуу 無言歌

урам【器】鹿笛；狩猟笛

уран бүтээл 芸術作品

уран сайхан 芸能

～ чアマチュアの優れた芸能者；民間芸能者

уран сэтгэмж ファンタジー；幻想曲

уран тунгалаг хоолой コラトウーラ・ソプラノ

уран чимэглэл コラトウーラ

уриа дуудлага ファンファーレ

урсгал 流派

уртасгал フェルマータ

уруудах давхцал 下方倍音、低音

уруудах хөдөлгөөн 下行

уртын дуу【伝】オルティン・ドー。民謡の一形式。

自由なリズム、ゆったりとした旋律線、多用される装飾音などの特徴をもつ。無伴奏、あるいはモリン・ホールカリムベのヘテロフォニックな伴奏つきで歌われる。

урын сан レパートリー；曲目

урьдал リチエルカーレ

утгажуулга (演奏) 解釈

уянгалуулан дуулах ベルカント；ベルカント唱法で歌う

уяруун арга 感傷主義

Y

үг (口語で) 歌詞

үглэл レチタティーヴォ；叙唱；朗唱

～ бяцхан アリエッタ

～ дуу アリア

үглэнцэр дуу アリオーン

үелэх бишгүүр【器】ファゴット (ファゴット)

ахмад ～ コントラファゴット

үелээс【器】上駒；フレット

үлгэрт дуу【伝】ウリゲルト・ドー。物語を四胡、二胡、馬頭琴などの伴奏で歌う。ホルチン部族の間で盛ん。

үлээвэр 吹奏

～ найрал хөгжим 吹奏楽団

～ найрал дагшаа хөгжим ビッグバンド

～ хөгжим 管楽；管楽器音楽

～ хөгжмийн зэмсэг 管楽器

үлээвэр модон хөгжмийн зэмсэг 木管楽器

үндсэн бөлөг 提示部

үндсэн зай 基本音程

үндсэн өргүүд 音階音

үндсэн хам эгшиг 基本和音；基本コード

үндсэн хөг-эгшиглэгээ 基調

үндсэн эгшиг 基音

үнэмшлэх арга ヴェリズム；現実主義；真実主義

үргэлждийн аргил バッソ・オスティナート；執拗低音

үсрэлт 跳躍

үсрэх бүжиг ガリヤルド

үсэрцэх бүжиг ロманесク (романеск)

Ф

фа

～ эгшиг ファの音

фригийн эгшиглэгээ フリギア旋法

X

хавирах デタツシェ

хагас 半分の

～ дээшлүүлэг 半音上げること

～ шат 半音

～ шатлалгүй эгшгийн эгнээ 無半音音階；アンヘミトニック

～ эгшиг 二分音符

хамын эгшгүүд 和声音

хам эгшиг：

1、和音

2、[зохиrolын хэв] 和音和声的テクスチュア

ерөнхий ～ 通奏和音

нийлэл ～ ポリコード

нийцээ ～ 協和和音

хоёрц ～ 七の和音の第3転回形；二の和音

хам эгшгийн байдал 和音の種類

～ ийн зүй 和音書法

～ ийн хөнтрөл 和音の転回

хамд хамаатуулахгүй эгшиг 和声外音；非和声音；隣接音

хамсраа 伴奏；囃子

хамсрах 伴奏する

хамтлаг グループ；(ポピュラー音楽などの) バンド

хангуун アッサイ

хандал дуу [аяз] セレナード

харалдаа зохиомж 対位法、対位旋律

босоо хөдлөх ～ 垂直的転回対位法(タネーエフ
の用語)

бэрх ～ 複対位法

тонгоруу ～ 鏡像対位法

урвуу ～ 転回対位法

харанга【器】銅鑼；ゴング

харилцаа дуу【伝】掛け合い歌。頭韻を踏んだ口語
の四行詩を即興で掛け合いながら歌う。清朝
時代、中国の時事的な歌謡や戯曲の影響の下
普及した。

хариу (フーガの) 応答；応唱

бараг ～ 調的応唱；調性的応答

бодит ～ 正応；真正応答

харш зай 不協和音程

харшаа 不協和音

хачин аяз Каприччио；奇想曲(каприччио)

хачинцар бүжиг セギディーリャ(сегидиль)

хийл：【器】

1、弦楽器一般

2、ヴァイオリン

нэгдүгээр ～ 第1 ヴァイオリン

хил【器】(弦楽器の)弓

(нумны) хичир【器】(弦楽器の弓の)スクリュウ；
ねじ

хобис [хубис]【器】ホビス；火不思。4 弦の發弦楽器。

хоёр хувьт хэмжээ 2 拍子系

хоёр хэсэгт хэлбэр 二部形式

хоёрдогч өргөлт (詩作における) 弱強格；抑揚格

хоёрлол 2 連符

хоёрц 2 度

～ хам эгшиг 七の和音の第3 転回形；二の和音

хоёул 二重奏；デュエット

холбоо スラー；連結符

холбоос スラー；連結符

～ т эгшиг レガート

холбоос хувь：

1、経過句

2、推移部

холимог байршил 混合配置

хоолой：

1、喉；声

2、パート；声部

～ засал 声部配置

～ солбилт 声部の交差

～ хөтлөл 声部進行；声部書法；ヴォイス・リー
ディング

～ н зөрүү хөтлөл 斜進行

～ н зэргэд хөтлөл 平行；並進行

～ н сөрөг хөтлөл 反進行

～ н шууд хөтлөл 直行

нарийн ～ 上声部

нэг төрлийн ～ 同声部

тунгалаг ～ ソプラノ

цангинаа ～ ディスカント；ディスカントウス

цөлдөн ～ メゾソプラノ

цөлх ～ コントラアルト

эрдүү ～ アルト

хоршил Дюет；二重奏；二重唱

хоршцох бүжиг カドリーユ；カドリール(кадриль)

хос 二重の

～ зонхилох ダブル・ドミナント

～ үйлдэл 二重機能

хот бүжиг ホタ(スペイン舞踊)

хошид プレヴィス

хошуулагч Авангьяルド；前衛主義

～ арга 前衛手法

(нумны) хөвч (弦楽器の弓の) 毛

хөг 調；調性

～ үгүйсгэсэн хөгжим 無調音楽

хөг-шилжүүлэг 転調

ижилсүүлэх ～ エンハーモニック転調

хөг-эгшиглэгээ 調；調性

～ үгүйсгэл 無調

～ ний ижилсүүлсэн тэгшитгэл エンハーモニッ
ク転調

～ ний мөрдвөр 調性プラン

～ ний төрөл 近親調

зэргэд ～ 平行調

нийлэл ～ 多調性

нэг нэрт ～ 同名調

хос ～ 複調

хөгжим：

1、(広義の) 音楽 → дуу хөгжим

2、器楽音楽(こちらがモンゴル語本来の意味)

～ мэдлэг 音楽学

～ судлагч 音楽学者

～ шинжлэл 音楽研究

хөгжмийн агуулга 音楽内容

～ ийн ахуй 音楽活動

～ ийн барил 音楽様式

～ ийн боловсрол 音楽教育

～ ийн бүтээлийн бүтэц 作品構造

～ ийн гоо зүй 音楽美学

～ ийн дунд сургууль 音楽専門学校；音楽中学校

～ ийн дүр 音楽イメージ

～ ийн журам 音楽の規則

～ ийн жүжиг 楽劇

～ ийн жүжиглэн концерт-холл

～ ийн задалгаа 楽曲分析；アナリゼ

～ ийн зэмсэг 楽器

～ ийн их сургууль 音楽大学；音楽院

～ ийн мэдэгдэхүүн 音楽の能力

～ ийн наадам 音楽祭

～ ийн нийгэм судлал 音楽社会学

～ ийн ном зүй (音楽書の) 文献

～ ийн нэр томьёо 音楽用語

～ ийн онол 音楽理論

～ ийн санаа 音楽上の発想；作品構想

～ ийн сонсол 音楽鑑賞

～ ийн сонсол бичиг 聴音書き取り

～ ийн сургууль 音楽学校

～ ийн сэтгэл судлал 音楽心理学

～ ийн төрөл 音楽ジャンル

～ ийн тэмцээн 音楽コンクール

～ ийн түүх 音楽史

～ ийн угсаатны зүй 音楽民族学；音楽人類学

～ ийн уран бүтээл 音楽作品

～ ийн үг зүй 音楽語法

～ ийн үзүүлбэр (音楽の) コンサート；演奏会

～ ийн үзүүлэл 音楽図解

～ ийн хошин жүжиг 音楽喜劇

～ ийн хүмүүжил 音楽教育

～ ийн хүрээлэн フィルハーモニー協会

～ ийн хэвлэл 音楽出版

～ ийн хэлбэр 音楽形式

～ ийн цагаан толгой 音楽の初歩

～ ийн шүүмжлэл 音楽批評；音楽評論

～ ийн шүтээн зүй 音楽図像学

～ ийн эд эс テクスチュア

～ ийн эртний бичиг зүй 文字譜、ネウマ譜など

5 線譜普及以前の記譜法の研究。

хөгжимт жүжиг 音楽劇

～ т жүжиглэн 音楽劇

～ чин (楽器の) 演奏家

ардын ～ 民俗音楽；民俗楽器

дуу ～ 音楽；歌謡と器楽をあわせた音楽一般

сүмийн ～ 教会音楽

үндэсний ～ 国民音楽；民族音楽

хөг үгүйсгэсэн ～ 無調音楽

хүүхдийн ～ 児童向け音楽

хөгжмийн зэмсэг 楽器

гуулин ～ 金管楽器

дэлдүүр ～ 打楽器

үлээвэр модон ～ 木管楽器

үлээвэр ～ 管楽器

цохивор ～ 打楽器
 чавхдаст ～ 弦楽器
 хөгжмөн чимэглэл 囃子；伴奏
 хөгжүүхэн アニマンド
 хөгжүүн アニマート
 хөглүүр 音叉
 хөндлөн бишгүүр【器】フルート
 аргил ～ バス・フルート
 өчүүхэн бишгүүр ピッコロ
 хөөмий [хөөмэй]【伝】ホーミー；フーミー；喉歌。
 口の中に下で空間を作り、そこで声を共鳴させ、同時に2つの声を出すように聞かせる。
 хөөрөгт даруул хуур【器】ハルモニウム；リード・オルガン
 хөөрөгт цуур【器】バグパイプ
 хөөрүү アジタート
 хөөцлиг フガーート
 хөөцөл フーガ；遁走曲
 хөөцлийн сэдэв フーガ主題
 ～ ийн үндсэн хэсэг (フーガの) 主題提示部
 ～ хариу 応答；応唱
 бэсрэг ～ フゲッタ；小フーガ
 нэг хөг-эгшиглэгээтэй ～ 単声フーガ
 тогоруу ～ 投影フーガ
 хос ～ 二重フーガ
 хөрвүүлэг 編曲；トランスクリプション
 хөрвүүлэх 編曲する；トランスクリプトする
 хөтлөгч コンサートマスター；伴奏ピアニスト；伴奏者 → концертмейстер
 хөтөлбөр プログラム；演出
 ～ т хөгжим 描写音楽；標題音楽
 хугалаа 倚音 (非和声音の一種)；前打音
 хувилбар 変奏曲
 ～ т сэдэв 主題と変奏
 ～ ын цуврал 変奏曲集
 хувилгал 変位；ある音の呼び方を変えずに、半音、全音など上方・下方に音高を変えること。

хувилуу аяз シャコンヌ
 хувь：
 1、拍
 2、主題
 сул ～ 弱拍
 хүчтэй ～ 強拍
 хоёр (гурван) ～ т хэмжээ 2 (3) 拍子系
 хулс【器】(木管楽器の) リード
 хулсан хуур【器】ホルسن・ホール；竹製の口琴
 хурд 速度；速さ；テンポ
 ～ хэмжүүр メトロノーム
 ～ өөрчлөлтгүй а・テンポ (a tempo)
 хурдавар Алегретто
 хурдан Алегро
 хурдасган Аттальярандо
 хурдлага ルラード
 хурууны хувиар 指使い；運指法
 хуур【器】ホール；琴。弦楽器や口琴を表す言葉。
 ～ ч 弦楽器演奏家
 дунд ～ ドンド・ホール。馬頭琴アンサンブルで中音を担当するために開発されたチェロ型の4弦の擦弦楽器。
 их ～ イフ・ホール。コントラバス型の低音改良馬頭琴。
 хуурын үлгэр【伝】ホーリン・ウリゲル。叙事詩などを基にした物語を二胡、四胡などの伴奏で語る語り物。ジェリム、ジョー・オダ、シリ・ゴル、ホロンバイルなどの盟で盛ん。
 хуучир【器】ホーチル；二胡。現在大中小三種類が用いられる。
 хүлээн авагч ラジオ受信機
 хүнэ アルコ (arco)；弓を使って演奏する指示
 хүрцэл タッチ
 хүүрнэл дуу ロマンс (романс)
 хүчдэл ダイナミクス；強弱法
 хэв Тексчур
 хэл хуур【器】ヘル・ホール；口琴；ジューズ・ハー

ブ

хэлбийлэг 文法

хэлбэлзэл ヴィブラート

хэлбэршил 楽曲構成

хэм 拍子；拍節

～ тэгшитгэлийн арга 定量リズム法

～ хэмнэл 拍節リズム

нийлэл ～ ポリリズム

хэмжээ 拍子

хэмнэл リズム

～ зүй リトミカ

нийлэл ～ ポリリズム

хэнгэрэг【器】太太鼓；バス・ドラム

төрийн их ～ トウリーン・イフ・ヘンゲレグ。

1981年に復元された古代風太太鼓。

хүрэл ～ タムタム（現代のオーケストラで用いる銅鑼の一種）

хэсэг 断章；フラグメント；部分

хэт реал үзэл シュールレアリズム；超現実主義

хэц【器】ヘツ。小鈴のついた一枚皮の太鼓。

бөөгийн ～ シャーマンの太鼓

Ц

цагинаа хоолой ディスカントウス；ディスカント

цан【器】シンバル

цараа 全音域；全声域

～ ны бүс テッシトゥーラ

царгил хөгжим【器】シロフォン（キシロフォン《露》）

царны нүүр 響板；共鳴板；（弦楽器の）表板

цахилгаан орон зайн хөгжим 電子音楽

цахилгаан хөгжмийн зэмсэг 電子楽器

цовоо ヴィヴァーチェ；ヴィーヴォ

цовхрох бүжиг ギャロップ

цоглог хөгжим [аялгуу] スケルツォ

цомнол：

1、[цомог]（オペラ、バレエなどの）台本；筋書き

2、旋法；モード（J. バドラーの用語）

цохиур 爪；プレクトラム；ピック；義甲

цохивор хөгжмийн зэмсэг 打楽器

цөлдөн хоолой メゾソプラノ

цөлх хоолой コントラアルト

цөөхүүл 小編成の；室内の

～ найрал хөгжим 室内オーケストラ

～ хөгжим 室内楽

～ чуулга 室内合奏団；室内アンサンブル

цувраа アルペッジョ；アルペジオ

цуврал хөгжим ツィクルス；チクルス；連作

цуврал хэлбэр 循環形式

цуур【器】ツォール；胡茄（モンゴルの管楽器の一種）

цуурай：

1、【響】共鳴；残響

～ н хайрцаг 共鳴箱

2、エコー；反響；やまびこ

цүнхлэг オーケストラ・ピット

цэвэр хөглөө 純正調

цэвэршүүлэг ナチュラル；本位記号

цэг：

1、付点

2、スタッカート の点

цэглэх арга 点描主義

цэнгээх үзэгдэл ディヴェルティスマン

цэргийн найрал хөгжим 軍楽隊

цэргийн хөгжим 軍楽

цээл テノール；テナー

～ ийн түлхүүр テノール記号

～ ийн хоолой テノール；テナー

Ч

чавхдас【器】（弦楽器の）弦

～ т найрал хөгжим 弦楽合奏；弦楽オーケストラ

～ т хилт хөгжмийн зэмсэг 擦弦楽器

～ т хөгжим 弦楽
 ～ т хөгжмийн дөрвөл 弦楽四重奏
 ～ т хөгжмийн зэмсэг 弦楽器
 товшуур ～ т хөгжмийн зэмсэг 撥弦楽器
 чавхдуур 爪；プレクトラム；ピック；義甲
 чадамгай ヴィルトゥオーゾ
 чалх 音域；声域
 чанга：
 1、音圧；音量
 2、強い音；フォルテ
 чанд барил（ポリフォニーの）厳格様式
 чанд бичлэгийн харшаа（対位法などの）厳格書法
 における不協和音
 чиглэл 流派
 чимэглэгээ 装飾法
 чимэглэл 装飾音をつけること
 чимэглэн メリスマ；装飾音
 чимэглээ フィオリトウーラ
 чинхэлзүүр【器】チェレスタ
 чийртэй эгшиглэн ダイフォン；音と音のつながり
 部分
 чичиргэл ヴィブラート
 чөлөөт барил 自由様式
 чөлөөт хэлбэр 自由な形式
 чуулбар 組曲
 чуулга アンサンブル

Ш

шад 中間休止；切れ目
 шалмаг задгай цохилт（打楽器の）ロール打ち
 шанз【器】シャンズ；三味線《中》。棹が長く、紙巻
 タバコ型のピックで奏する。
 шат（音階の）音
 шахалт ストレッタ
 шидрүү бүжиг ブレー（フランス舞曲）
 шидрүүсэх бүжиг チャールダーシュ（チャルダシ）

шилжилт シフト；ポジション移動
 шилжүүлэг 移調；移高
 шилжүүлгэт мөшгөл 転調を伴う反復進行
 шинэ бадрангуй арга 新ロマン主義
 шинэ сонгодог арга 新古典主義
 шинэчлэгч арга モダニズム
 шог аяз プルレスケ
 шог өгүүлэл ユモレスク
 шугамчлал 線の進行
 шудраа パッセージ
 шударга【器】ショドラガ；モンゴルの三味線
 →шанз
 шуугиан 騒音；雑音；ノイズ
 ～ ы арга（騒音音楽の）騒音楽派
 ～ т найрал хөгжим 騒音オーケストラ。楽器で
 はなく日常的な実用品で音を出す20世紀初頭
 に行われた試み。
 шууд оруулга 省略
 шууд унших 初見で演奏する
 шууд шилжүүлэг 直接転調
 шууранхай ファルセット
 шуус【器】（管楽器の）リード

Э

эвэр бүрээ【器】エヴェル・ブレー；狩猟笛を元に改
 良したモンゴルのキー付角笛型クラリネット。
 эгшиг：
 1、音；音響
 2、調べ；調子；音調
 ～ бичиг 録音
 ～ бичих 録音する
 ～ бичгийн шугам 五線譜
 ～ бичгийн зүй 記譜法
 ～ гажих 調子外れに歌う
 ～ хослох 倍音を出す
 ～ ийг үеэр нэрлэх 音名で呼ぶ

эгшгийн босоо чиглэл (和音など) 音の縦方向；
 音の重なり
 ～ ийн давтал 音の反復
 ～ ийн журам 音響システム
 ～ ийн өндөр 音のピッチ；音高；音の高さ
 ～ ийн туйлын өндөр 絶対音高
 ～ ийн туйлын урт 絶対音価
 ～ ийн урт 音価；音の長さ
 ～ ийн хүрд 音階；音列
 ～ ийн хэвтээ чиглэл (和声進行など) 音の横方向
 ～ ийн цуваа スケール；音階
 ～ ийн чанар 音質
 ～ ийн эгнээ スケール；音階
 эгшигт хайрцаг 蓄音機；レコードプレイヤー
 дээд оруулга ～ 上主音；スーパーオニック
 оруулга ～ 導音
 хос ～ 重音；ドッペルグリフ
 эгшиглэгээ 旋法
 ～ ний өрөг 音階の各音(度)
 ～ ний өргийг тэмдэглэх, нэрлэх 音階の各音(度)
 の表記と名
 ～ ний тогтвортой өрөг 旋法の安定音
 ～ т хөг 調旋法
 бага хөгийн ～ 短調の旋律・旋法
 багасгасан ～ 短旋律；短調の旋法
 бүтэн шатат ～ 全音音階による旋法
 доорхи ～ ヒポ旋法
 дорийн ～ ドリア旋法
 зэргэд сэлгээ ～ 平行可変的旋法
 ионийн ～ イオニア旋法
 лидийн ～ リディア旋法
 магад ～ 正格旋法
 миксолидийн ～ ミクソリディア旋法
 нийлэл ～ 旋法の複合系
 золийн ～ エオリア旋法
 эртний грегийн ～ 古代ギリシア旋法
 эгшиглэх 音楽を奏でる、楽器を鳴らす

эгшиглээ 音色；音質
 эгшиглээс 音符
 ～ ийн зүй 記譜学
 ～ ийн шугам 五線譜；譜表
 эгэл гурван хэсэгт хэлбэр 3 部形式
 эгэл нэг хэсэгт хэлбэр 1 部形式
 элэглэл パロディー
 эмгэнэл дуу レクイエム；鎮魂歌
 эмгэнэлийн хөгжим 葬送音楽
 эмхэтгэл хөгжим ポプリ；接続曲
 энгийн зай 単音程
 энгийн хэм хэмжээ 単純拍子
 эргэлт ターン；回音
 эргэнцэх бүжиг ワルツ；円舞曲(вальс)
 эргэх хөдөлгөөн 逆行；逆行動
 эргэцүүлэл дуу カヴァティーナ
 эрдүү Алрт (の)
 ～ бүрээ【器】アルトホルン(金管楽器)
 ～ хийл【器】ヴィオラ
 ～ хоолой Алрт；アルト声部
 ～ гийн түлхүүр Алрт記号
 эрхий дарах (チェロを演奏する際の) 親指位置
 эсрэг тавил 対主題
 эстрад：
 1、(社会主義時代に) ポピュラー音楽
 2、ロシアの大衆娯楽
 эхлэл：
 1、歌い出し
 2、序奏；前奏；イントロダクション；イントロ
 ～ хөгжим 前奏曲；プレリュード
 эш (音符の) ぼう；符尾
 ～ ийг зөв бичих 符尾を正しく書く
 ээлжлэн дуулах Анティフォーナ、交唱

Я

 ян татал コラール

янчир【器】ヤンチル。ヨーチンのこと。→ёочин
 язгуур урлаг (真正の) 伝統芸能；伝統芸術
 ялгаа ニュアンス；味わい
 ялгарамж コントラスト；対照
 яруу зохиол 交響曲
 ～ ын арга シンフォニズム
 бэсрэг ～ 小交響曲；シンフォニエッタ
 яруу зураглал 交響的絵画；音画
 яруу найрал хөгжим 交響楽団；管弦楽団

яруу найраглал 交響詩；音詩
 яруу уншлага 朗詠；朗唱
 яруу хөгжим 交響楽；管弦楽
 дуулах ～ 声楽付管弦楽
 яруу хэнгэрэг【器】ティンパニ
 ятга【器】ヤトガ；ヤタグ；箏。現在のモンゴル国
 では朝鮮のカヤグムが元になった標準的な音
 高のものと低音箏の2種類が用いられる。

参 考 文 献

- ・ Ж.Бадраа(1956) ”Хөгжмийн нэр томьёо”, Улаанбаатар
- ・ Ж.Бадраа(1998) ”Монгол ардын хөгжим”, Улаанбаатар
- ・ Н.Жанцанноров(1993) ”Хөгжмийн онолын нэр томьёоны хураангуй тайлбар толь”, Улаанбаатар
- ・ Н.Жанцанноров(2006) ”Монгол хөгжмийн таван эгшигтийн онолын асуудлууд”, Улаанбаатар
- ・ Монголын Соёл, Урлагийн Их Сургууль, Соёл, Урлаг Судлалын Хүрээлэн (1999) “Монголын Соёлын Түүх”, Улаанбаатар
- ・ Г.Ринченсамбуу(1959) ”Монгол ардын дууны төрөл зүйл”, Улаанбаатар
- ・ Л.Хэрлэн(2006) ”Монгол Ардын Хөгжмийн Зэмсгийн Түүхээс”, Монгол Улсын Их Сургууль, Монгол Хэл Соёлын Сургууль, Ардын Урлаг Судлалын Тэнхим
- ・ Kögjiltü(1997) ”Mongyol ündüsüten-ü dayuu kögjim-ün teüke”, Svenyang: Liyooning-un ündüsüten-ü keblel-ün qoriy-a
- ・ 石田一志他編 (2006)、『露和・和露音楽用語小事典』朔北社
- ・ 木村肥佐生 (1978)、「外来語及び学術用語より見たモンゴルの近代化」『アジア研究所紀要5』、亜細亜大学アジア研究所、pp.284-250
- ・ 柴田南雄 / 遠山一行監修 (1995)、『ニューグローヴ世界音楽大辞典』講談社
- ・ 清水脩 (1976)、『新版 標準音楽通論』音楽之友社
- ・ 田中克彦 (2003)、『言語の思想』岩波書店

参考ウェブサイト

- ・ 東京芸術大学音楽学部楽理科 & 大学院音楽研究科音楽文化学専攻音楽学分野公式ウェブサイト
 (<http://www.geidai.ac.jp/labs/musicology/>) 利用日 2008年12月20日

(あおき たかひろ)

モンゴル研究会活動報告 (2007 年度)

■モンゴル研究会 7 月例会 & 第 1 回卒論中間発表会

日時：2007 年 7 月 14 日

■モンゴル研究会 10 月例会 & 第 2 回卒論中間発表会

日時：2007 年 10 月 21 日

■モンゴル研究会 12 月例会 & 第 3 回卒論最終発表会

日時：2007 年 12 月 2 日

報告者および報告テーマ：

- ・川崎未来 「モンゴル国における日本語教育の課題 ～日本語教師の可能性から考える～」
- ・小中里恵 「モンゴル国の食について」
- ・佐伯勝志 「モンゴル国における鉱害問題 ～水俣病の経験から考える～」
- ・垂水友香 「モンゴル人と葬法 ～グローバリゼーションのなかでの変容～」
- ・永田 梓 「移住者とアソシエーションと地域コミュニティ ～ウランバートル市第 3 ホローと名古屋市栄地区の事例から考える」
- ・西部絵瑠 「自然から学び、現代を生きる人々の姿 ～日本の牛飼いとモンゴルの遊牧民の事例から考える～」
- ・東森 大 「貧困家庭における底力となる民間療法 ～モンゴル国ウランバートル市第三ホローにおけるアンケート調査からの考察～」
- ・武 韻恩 「遼朝服飾史に関する一考察 一定住化がもたらす女性服飾の変容～」
- ・森田省吾 「オゴタイ・カン ー司馬遼太郎の想い描いたモンゴル人とはー」

■モンゴル研究会 2 月例会 & 2007 年度卒業論文の合評会

日時：2008 年 2 月 2、3 日

報告者および報告テーマ：

- ・武 韻恩 「遼朝服飾史に関する一考察 一定住化がもたらす女性服飾の変容～」
- ・森田省吾 「オゴタイ・カン ー司馬遼太郎の想い描いたモンゴル人とはー」
- ・垂水友香 「モンゴル人と葬法 ～グローバリゼーションのなかでの変容～」
- ・佐伯勝志 「モンゴル国における鉱害問題 ～水俣病の経験から考える～」
- ・永田 梓 「移住者とアソシエーションと地域コミュニティ ～ウランバートル市第 3 ホローと名古屋市栄地区の事例から考える」
- ・東森 大 「貧困家庭における底力となる民間療法 ーモンゴル国ウランバートル市第三ホローにおけるアンケート調査からの考察ー」
- ・川崎未来 「モンゴル国における日本語教育の課題 ～日本語教師の可能性から考える～」
- ・小中里恵 「モンゴル国の食について」
- ・西部絵瑠 「自然から学び、現代を生きる人々の姿 ～日本の牛飼いとモンゴルの遊牧民の事例から考える～」

(以上、敬称略)

* * *

今年度も今岡ゼミとモンゴル研究会の合同で月例会を企画し、卒業論文の発表会を開催した。今年も、社会人と現役の学生(4 年生と 3 年生)が交流する貴重な機会となった。また、卒論を作成するプロセスで、助け合い、励ましあい、競い合う卒論生が、一種の共同体を作っている。信頼が深まるにつれ、叱咤激励も激しい口調となっている。おそらくもとのモンゴル研究会は、このような雰囲気だったのではないかと、思いをはせる。

(今岡 良子)

賛助会員募集のお願い

『モンゴル研究』は1975年の2月に創刊されたモンゴル研究のための研究誌です。僅か101頁のタイプ孔版印刷から始まった小誌は、毎号着実な実績を積み上げ、いまでは内外の研究者を中心に、広範な支持と高い評価を得ています。

1984年からは、賛助会員制度が発足し、創刊当時からお世話になった故司馬遼太郎さんをはじめ、多くの方々から、暖かいご支援を頂戴して参りました。

今後とも、『モンゴル研究』の在り方にご賛同いただき、ひとりでも多くの方が賛助会員となっていただけますよう心から希望いたしております。

尚、賛助会員についての要綱は以下の通りです。

モンゴル研究会賛助会員要綱

- 賛助会員とはモンゴル研究会の趣旨およびこれまでの研究会活動とのその意義に賛同し、会の活動、運営には直接参加せず、その周囲にあって、この会を育てていこうという善意から財政的に支援する個人、または団体である。
- 賛助会員は賛助会費（年間1口5,000円、何口でも可）を定期的に納入することで財政支援を行い、『モンゴル研究』の贈呈を受ける。
- 賛助会員は、モンゴル研究会の趣旨や活動に異議がある場合、あるいは個人的な理由によって、いつでも自由に退会できる。

既に賛助会員となって下さっている皆様、ご支援、誠にありがとうございます。ご支援いただいたすべての方々のお名前をここに掲げて、御礼を申しあげるべきところですが、個人情報保護の観点から、賛助会員名簿掲載は控えさせていただいております。何卒、ご理解下さい。

また、会員、賛助会員の皆様の個人情報管理につきましては、法令を遵守し、今後とも、十分な注意を払ってまいります。

『モンゴル研究』 投稿規程・執筆要領

＜投稿規程＞

1. 名称及び発行

本編を『モンゴル研究』(JOURNAL OF MONGOLIAN STUDIES)と称し、原則として毎年1回発行する。

2. 投稿資格

投稿できる者は、原則として、モンゴル研究会会員に限る。ただし、次のいずれかに該当する場合には投稿を認めることがある。

(1) モンゴル研究会の依頼により、モンゴル研究会で講演、発表等を行った非会員。

(2) その他、会員の推薦があつて、編集委員会が適当と認めた者。

3. 投稿内容

モンゴル研究に関する未発表原稿で、原則として研究会の月例会などで報告したもの。その種類は論文、研究ノート、調査報告、翻訳などで、編集委員会が適当と認めたもの。

4. 原稿の分量及び様式

(1) 原則として、原則として、論文は50枚以内(400字詰め原稿用紙換算、図表や注を含む)、研究ノート30枚以内(同)。その他の原稿も50枚を超えない。制限を超える長文原稿は、編集委員会の承認によって受理または分割連載されることがある。欧文・モンゴル文の場合も、これに準じる。

(2) 原稿の様式や提出方法については、別掲の執筆要領に準じる。

5. 原稿の締め切り

投稿を希望する者は原則として、8月末日までに編集長にその旨を申し出、原稿の締め切りは原則として、10月末日とする。査読による修正の再提出期限は編集委員会が定める。

6. 原稿の提出

(1) 完成した原稿1部と電子ファイルを編集委員会へ提出する。

(2) 原稿は指示された形式の電子テキストで作成し、フロッピーディスク等を添えて提出する。

7. 論文等の審査及び掲載の可否

(1) 編集委員会は、審査の結果、必要ならば原稿の修正を求めることができる。

(2) 編集委員会は、審査の結果等に基づいて掲載の可否を決定する。

8. 校 正

校正は執筆者の責任において行い、原則として再校までとする。

9. 掲載及び別刷りの経費

(1) 掲載に要する経費は原則として無料とする。

(2) 別刷りを希望するものは編集長にその旨を、必要部数とともに申し出る。別刷りの費用は希望者が負担する。

(3) 執筆者には掲載号を1部進呈する。

10. 出版権利用の許諾

投稿者は、モンゴル研究会に対し、当該論文に関する出版権の利用につき許諾するものとする。

11. 論文等の電子化及びコンピュータ・ネットワーク上での公開

(1) 論文等は、電子化し、ホームページ等を通じてコンピュータ・ネットワーク上に公開することがある。

(2) ただし、執筆者が電子化・公開を希望しない特別の理由を有する場合は、編集委員会に申し出て、当該論文の電子化・公開を拒否することができる。

＜執筆要領＞

1. 原稿について

(1) 原稿用紙はA4を使用、1ページ＝40字×40行とする。

(2) タイトルの後には執筆者名のみ記し、所属、肩書きなどは一切記入しない。但し海外からの投稿には、末尾に(内蒙古大学)などのような情報をふる場合もある。

(3) 原稿にはタイトルおよび執筆者名の英文表記を添える。

(4) 本文の形式

本文は横書きとする。特に希望のない場合は、章立ての形式を右の通りとする。

(5) 図表

図表を入れる場合は、図表のタイトルに通し番号(図1、表1等)を付ける。本文中での図表の位置を明示する。

(6) 註・参考文献

1) 註は文末註の形式とする。

2) 参考文献リストの書き方は原則として下記の通りとする。

①日本語文献

論文の場合

著者名(発行年)、「論文名」『掲載雑誌や本の名前』雑誌号数、発行所か出版社名

例) フフバートル(1999)、「『内蒙古』という概念の政治性」『ことばと社会』第1号、三元社

本の場合

著者名(発行年)、『本の名前』発行所か出版社名

例) 坂本是忠(1974)、『辺疆をめぐる中ソ関係史』アジア経済研究所

新聞の場合

『新聞名』(何年—何年)

例) 『朝日新聞』(1995—2001年)

②モンゴル語、ロシア語、英語など欧文文献の場合

論文の場合

著者名(発行年)、「論文名」「掲載雑誌や本の名前」掲載号数、発行所か出版社名

本の場合

著者名(発行年)、「本の名前」発行所か出版社名

例) П.Шагдалсүрэн(2000)“Миний мэдэх маршал Х.Чойбалсан”, Улаанбаатар

* [] でくくって翻訳する場合もある。

例) [シャグダルスレン(2000), 『私の知るチョイバルサン元師』ウランバートル]

新聞の場合

“新聞名”(何年—何年)

例) “Үнэн” [ウネン モンゴル人民革命党発行紙] (1945—1996年)

③中国語の場合

基本的に、日本語文献と同じ。

例) 張大宣(1983)、『外蒙古現代史』第4冊、蘭溪出版社、台湾

(7) 提出された原稿は返却しないものとする。

2. 原稿の提出

上記の原稿とともに、原稿のファイルをいれたCDまたはフロッピーディスクを提出する。文書ファイルと図表ファイルは別々のファイルにいれ、文書ファイルはテキスト形式(.txt)、リッチテキスト(.rtf)、あるいはワード(.doc)とし、図表ファイルは、原則エクセル(.xls)とする。その他の場合および、写真を画像ファイルで提出する場合は編集委員会と相談する。また、使用ソフトのバージョンも明記する。プリントアウトした図表の原稿を必ず添える。モンゴル語についてはモンゴル語が正しく打ち出された原稿、テキストファイルの他に、独自の入力方式による場合はモンゴル語フォントを明記し提出する。必要な場合、モンゴル語のフォントも送付する。

はじめに(序、序文など)
I
1.
(1)

II
.
.
.
おわりに(結び、結論など)

編集後記

◇日本におけるモンゴル研究の歴史は 100 年を少しこえたところである。今日、誰でも、いつでも、自由にモンゴルで現地調査や研究をすることが可能だ。しかし、わずか、20 年ほど前、自由な現地調査など想像もできなかった。そのことを思えば、30 年以上前に創刊された『モンゴル研究』が、まがりなりにも 25 号を数え、その記事すべてが著者それぞれのモンゴル体験を原点としていることは、まことに感慨深い。

◇本号には、自然科学、社会科学、人文科学、芸術にわたる労作が並んでいる。碩学の論文の隣に留学からもどったばかりの若い研究者たちの仕事も紹介されている。そこに、磯野富士子先生を偲び、先生が学生に語られたモンゴル体験を付すことにした。

◇本誌創刊以来、いつも優しく応援して下さった磯野富士子先生は、2008 年正月、逝去された。一般に、どこのどんな地域の研究であれ、一旦、フィールドに入れば、とらえどころのない現実との格闘で、一体自分が何をしているのか分からなくなってしまうような場合が少なくない。磯野先生が示された、観察対象に対する深い共感と自己を見つめる真摯な姿勢は、われわれ、そして、これからのモンゴル研究者にとって、こころの羅針盤となるはずである。

◇さて、25 号もまた、アルド書店と吉本さんに多大な負担をかける結果になってしまった。その反省から、編集委員会としては、今後、本誌のさらなる充実とともに、編集作業の見直しを行うつもりである。

◇『モンゴル研究』は、財務面でも、真剣な検討が必要な時期にさしかかっている。本誌を支えるのは会員と賛助会員であり、その会費や賛助会費がなければたちゆかない。海外では、老舗の新聞や雑誌が廃刊になったり、電子版に移行したりしつつある。本誌も役割の変化に応じて、その姿を変えるべき時が近づいたのかも知れない。

◇会員、賛助会員のご協力に感謝を申しあげるとともに、会員諸子、読者諸氏に、忌憚のないご意見をお寄せ下さるようお願いして、未曾有の経済危機の中、ウランバートル第 3 ホローへと旅立った編集長のピンチヒッターとしての筆を擱きたい。

(芝山 豊)

モンゴル研究 第25号

2008年12月31日発行

定価1,100円

編集・発行 モンゴル研究会

〒562-8558 箕面市粟生間谷東8-1-1 国立大学法人大阪大学

世界言語研究センター 今岡良子研究室気付

TEL・Fax 072-730-5262

e-mail: imaoka@world-lang.osaka-u.ac.jp

振替口座：00950-3-29906 モンゴル研究会 代表小貫雅男

制作 アルド書店

〒631-0806 奈良市朱雀5-1-1, 60-101

印刷 株式会社 国際印刷出版研究所

MONGOL-KENKYŪKAI (the Society of Mongolian Studies, Founded in 1970)

c/o Imaoka's office, Osaka UNIVERSITY, Research Institute for World Languages, Aomatanihigashi 8-1-1, Minoo-shi, Osaka 562-8558 Japan. Giro account: 00950-3-29906 Mongol-Kenkyukai.

MONGOL-KENKYŪ

Journal of Mongolian Studies

No.25

CONTENTS

Dec.2008

Articles

Shamans Living in UlanBator Today -first part-

-Transformation of their Activities and Potentiality-..... Mayo FUJII 2

Emergence of Cross-National Social Surveys in Mongolia:

What Have They Revealed? Kunio MINATO 13

Changes in the Vegetation of Grazing Pastures caused by Drought Conditions

in the Gobi Mountain Region Takashi MIAKI 31

Remembrance

In Memoriam Fujiko Isono (1918-2008) Yutaka SHIBAYAMA 43

Materials

The Translation of *Textes Oraux Ordos*:

An interview with Fujiko Isono Yutaka SHIBAYAMA 46

Mongolian-Japanese Dictionary of Musical Terms Takahiro AOKI 54

Activity Report 75

Edited by

MONGOL-KENKYŪKAI

Osaka Japan